喰らう霧

シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
喰らう霧

【Ｎコード】
Ｎ８５７２Ｖ

【作者名】
シン

【あらすじ】
梗概
フィランドへと訪れた大学時代の仲間、現在、画商の秋月魁（あきづきかい）と、グラフィック・デザイナーの仁龍生（じんりゅうき）、売れない画家の小島克也（こじま かつや）、デザイナーの深見響子（ふかみきょうこ）と、主婦の高橋真弓（たかはし まゆみ）と、その夫の高橋修一（たかはししゅういち）の六人は、豪華客船でのクルーズの途中、蒼く光る、不気味な霧に遭遇する。
一方、スウェーデンでは、豪華クルーザーでのパーティに出席していたガラス王の孫、エリアス・ダールクビストと、その秘書のオ

ーギュストが、同じように、蒼く光る霧を前にしていた。
そして、双方の船で、同じ異変が起こり始める。それは、霧に濡れた人間が、異常な食欲を見せ始める、という奇怪な現象であった。
蒼い霧に濡れた者たちは、己の感情や欲望を、全て食欲に変えてしまい、ついには人間を喰らうようになったのだ。
逃げ場のない海の上で、次々に犠牲者が増え、その恐怖が広がり始める中、フィンランドからの豪華客船と、スウェーデンからの豪華クルーザーが、衝突する。
逃げ場がない上に、船が沈没の危機にさらされ、その中、魁と龍生、エリアスとオーギュストは出逢い、共に、霧に喰らわれた人間たちと、戦い始める。
その霧は、ロシアの生物兵器なのか、海に沈んでいた何かが、化学変化を引き起こすような物質と結び付いて、何らかの毒素を発生させているのか、もしくは、科学では説明のつかない、未知の物質なのか、それとも、生物なのか……。
四人は、何とか助かる方法を見つけようとするが……。

act 1

ガラス王――そう呼ばれた人物が、この世を去ったのは、ちょうと一年くらい前になるだろうか。
もっとも、そう呼ばれていた人物は、決して、ガラスのような繊細な心の持ち主では、なかったが。
厳しく、プライドが高く、傲慢で、才気に満ち、所謂（いわゆる）、野心家、と呼ばれる人物の典型であった。
その人物が、何故、ガラス王、と呼ばれていたのか。
答えは簡単である。
その人物が野心を向けたものが、ガラスであったからだ。
もともとは製鉄所であったものを、彼の代でガラス工場へと転身させ、一代で、このスウェーデンのガラス産業を築いた、という。
さまざまな芸術家や、ガラス職人を、自分の元へと集め、たったの四〇年で、アメリカ、ドイツ、オーストラリアへと手を広げ、老舗ガラス・メーカーと肩を並べる――いや、それ以上の地位を持った。
そして、彼は、ガラス王、となったのだ。

夏――。

「クソっ！　人を一体、何だと思ってるんだ、あのごうつくババアが！」
ストックホルムの郊外に建つ、城のような――いや、事実、城たる屋敷の廊下を歩きながら、シグルド・ワーレンは、腹立ちのままに、悪態づいた。
ここは、亡きガラス王が君臨していた、人々が言うところの《ガラスの城》である。もちろん、建物自体はガラスではないが、それでも、趣のある、かつては貴族が所有していた、というその城は、

優雅な気品に充ち溢れていた。
部屋数は――数えたことはないが、軽く数十はあるだろう。
今、この城に住んでいるのは、白髪の老婦人――亡きガラス王の細君、エイラ・ダールクビストと、その孫であるエリアス、そして、十数名の使用人だけであった。
「何が『まともな商売をなさい』だっ。貿易のどこが、まともじゃない？　どの商売だって、いい時もあれば、悪い時だってあるんだ。それを……。血の繋がった甥にまであの態度とは――。伯父様が伯父様なら、伯母様も伯母様だ。人間の血なんて通ってもいない」
シグルドはまだ、ブツブツと悪態づきながら、広く豪華な廊下を、歩いていた。玄関までが遠いせいもあって、その間に、いくらでも悪態づける時間があるのだ。
シグルドは、もう四十歳になるが、もともとが幼児性の強い――自分に甘いタイプの人間で、自分にも他人にも厳しいガラス王の細君とは、以前から反りが合わなかったのだ。
今日も、いつものことで、少し事業に穴を空けて、その穴埋めをするために、借金の申し込みに来たのだが、すげなく断られてしまった、という訳である。
金など有り余っているくせに、亡きガラス王の細君、エイラ・ダールクビストは、ビタ一文用立ててはくれなかったのだ。
もちろん、シグルドの方も、貿易とはいっても、密輸まがいの、法律スレスレのことをやっているのだが。
「クソっ！」
また悪態づいて、シグルドが床を蹴った時だった。
「また、おばあさまに、借金の申し込みを断られたのかい？」
庭を臨むことが出来る、廊下のガラス窓の脇から、澄んだボーイ・ソプラノが、響き渡った。本当に、響く、という言葉が相応しい、少年らしい声であったのだ。
見れば、そこには、十一、二歳の少年が、その窓に細工されたレリーフのように、皮肉げな眼差しで、立っていた。

床から、ほぼ天上まで、大きく切り取られたその窓には、実際、ガラス王の名に相応しく、美しい細工が施されている。それも、足を止めて、注意深く見てみなければ判らないほどの、ほんの隅っこの方に。

それを見ただけでも、亡きガラス王が、華燭さをひけらかすような人物ではなく、本当に美しいものを知る――そして、人にひけらかすようなものではなく、人が気づかない部分に、さりげない注意を注ぐ人物である、ということが解ってもらえるだろう。

少年は、その隅っこの細工を知るように、その場を選んで、立っていた。

もちろん、シグルドは、何回この屋敷に出入りしていようと、そんな細工には、全く気づいていなかっただろうが。

act 2

「やあ、エリアスじゃないか。久しぶりだな」
と、今も、全く気づいていない様子で、さっきまでの仏頂面を、愛想よく切り替え、その少年の前に、両手を広げる。といって、シグルドがその少年を気に入っている、という訳では、ない。むしろ、その逆であった。
シグルドは、その少年が嫌いなのだ。何よりも苦手、という言葉を使ってもいい。
何しろ、その少年ときたら、気に入ることが出来ないほどに、生意気で、無愛想な子供なのだから。
まあ、それが、このダールクビストの家系なのかも、知れないが。
見た目は、クリスタル・グラス以上に美しく、おとなしそうな少年である。北欧(ノルマン)人らしい金髪も、透き通るような碧い瞳も、愛らしい、としか呼べない雰囲気を彩っている。
だが、性格の方は、その限りに非ず。一向に可愛くもなければ、子供らしくもない。
しかし、亡きガラス王の細君、エイラに可愛がられている、唯一の人間であるから、シグルドとしては、手なずけておかない訳には、いかない。
何しろ、亡きガラス王の遺産を継ぎ、今、このガラス王国のトップに立っているのは、その十一、二歳の少年なのだ。そして、その少年が二十歳になるまでは、エイラが後見人として立つことになっている。
シグルドは、満面の笑みで、その子供を腕に抱き上げ――ようとしたが、
「触るなよ、ゲス」
冷ややか、とすら呼べるほどの、鋭い眼差しが、突き刺さった。
エリアスは、大人のような面貌で、シグルドをきつく、見据えて

いる。
どこの子供が、それほどに冷たい眼差しで、大人を睨みつけることが出来る、というのだろうか。
シグルドは、刹那、面を強ばらせ、広げた腕を、凍りつかせた。
「今度、おばあさまに、つまらない話を持ち出したりしたら、承知しない。これは、ガラス王、エリアス・ダールクビストの命令だ」
命令――。
わずか十一、二歳の少年が、大の大人に、本気でそんな命令している、というのだろうか。まるで、誇り高き戦士のように、或いは、伝説と謳われた王のように。
何よりも気高く、何よりも神々しく。
シグルドの面は、カッ、と屈辱の色に、染まっていた。
「では、ぼくはこれで、シグルドおじさま」
幼き稀代のガラス王は、亡きガラス王の血を誇るように、悠然と廊下の向こうへと、消えて行った。
「あのクソガキ……」
シグルドの肩は、怒りに細かく、震えていた……。

act 3

この国の人々は、自らの国を〝湖の国(スオミ)〟という。
六万とも、十数万ともいわれる湖が存在し、三万もの小島が、撒き散らされたように、浮かんでいるのだ。
フィンランド――。
北欧四カ国の中で、最も北極圏寄りに位置し、その山奥には、サンタクロースが住む、とされている。
「この水の澄み方は、怖いくらいだな……」
フィンランド湾の複雑な入り江の縁に立ち、秋月魁(あきづきかい)は、心のままの感嘆を、零した。
果てしなく広がる針葉樹林や、北部の広漠たるラップランドはもとより、古バルト海に散在する島々のそこかしこに、人間の手垢に塗れていない、太古の自然が残っている国なのだ、ここは。
人々は、歌のような美しい響きの言葉を話し、隣国のどの国とも異なった歴史や、特質を持っている。
その首都、ヘルシンキに、秋月魁は、いた。
夏の今、この国は、暑い。――いや、夏だから、暑いのは当たり前なのだが、これくらい北にある国であれば、もっと涼しくても良さそうなものなのだ。まあ、もっと北の方へ行けば、また状況も違うのだろうが。
ここは、温和な大陸性気候の街であった。
「魁！　女どもが昼メシにしよう、ってさ。もう行くぜ」
背後から、魁を海に突き落とそうとするかのような――いや、もちろん、そんなことはないのだが、それでも、思いっきりの日本語が、耳に届いた。
「……恥ずかしい奴」
もう、みんな三十歳を迎えよう、とする年なのだから、子供のようにデカイ声で呼ぶのはやめてほしい、と思うのだが、海外に出る、

ということは、誰もが解放感に流されるものらしく、日本では絶対にしないような、そんな恥ずかしい真似までしてみせる。
何より、集まっている連中が、皆、大学時代の身内、となれば、若返ったような気分にも、なるのだろう。もちろん、今でもまだ充分に、若い、のだが。
魁は、澄み切った海の側から腰を上げ、恥ずかしい身内の元へと、歩き始めた。
皆、同じ大学の仲間である。といっても、卒業後、ずっと付き合いがあった、という訳ではない。
第一、進んだ道もそれぞれで、コンピューター・グラフィックスの方へ進んだ者もいれば、画家、などという、食っていけそうにないことをやっている者もいる。大手メーカーのデザイナーになって、活躍している者もいれば、美術とは全く関係のないサラリーマンになった者もいるし、普通の主婦になった者もいる。
一応、絵は、趣味で続けているようだが、それでも、もう、昔のような夢は、持って、いなかった。
魁もまた、画商、などというものをやってはいるが、描く方はやめてしまった、という人間である。
今年、三十歳になる。
性格は多少――いや、他人に言わせると、かなり無愛想なところがあるらしいが、それでも、それが、怜悧な面貌に似合っているから、周りも文句はないようである。特に、女性陣に言わせると、その寡黙なところがいいらしい。もちろん、仲間と一緒になれば、ワイワイと騒ぐこともあるのだが――まあ、それは、当たり前か。
とにかく、大学時代から、女性なら一度は、魁を描きたくなる、と言われたほどの魅力の持ち主で、現在は、大人の魅力も加わっているため、どこへ行っても、女性の視線を惹きつける。
画廊に訪れる有閑マダムたちが、絵よりも彼を買いたがる、という話も、案外、本当であったかも、知れない。後腐れのない、大人の関係、というものが似合う男、なのである。

「あまりの水の透明さに、また絵筆を握る気にでもなったの？」
レンタカーの前まで来ると、大学時代から、少しも華やかさの消えない女性、深見響子（ふかみきょうこ）が、皮肉げに言った。
デザイナーとしてのセンスの良さを示すようなショート・カットも、シンプルなスタイルも、男に媚びることのない、気の強さを映している。
魁は、苦笑のように、唇を歪めた。
ここにいる六人は、皆、同じ美大の身内で――いや、一人は、身内の夫となった後輩ではあるが、存在感が薄いので、身内の中に入っていても、毒にはならず、邪魔にもならない。年上の女房の尻に敷かれて、荷物持ちに連れて来られた、というのが、正直なところであっただろう。
六人が揃うと、二台借りたレンタカーは、手軽なランチの取れる店へと、走り出した。

act 4

魁の運転するレンタカーには、何故か――いや、当然かも知れないが、女性二人が、乗っている。
男四人、女二人の旅なのだから、当然、もう一台の車には、男ばかりが乗っている、ということになる。
女性陣に言わせると（女性は二人でも、充分、陣、である）、久しぶりの目の保養らしい。
人妻まで、そう言って、魁の車に乗り込んでいるのだから、旦那の方は、あまりいい気はしないだろう。もっとも、それを口に出して言うような亭主ではないのだが。
紅二点の内の人妻、高橋真弓の夫、高橋修一は、魁たちよりも二つ、年下で、詳しいことはよく知らないが、真弓に言わせると、夫にしておくには、ちょうどいい人物であるらしい。
美大を出て、さしたる才能もなかった修一は、今、文具メーカーに務めるサラリーマンであり、一応、何の波風もなく過ごしている、という。
まあ、修一の方が、真弓に夢中になって、結婚を迫っただけに、多少、真弓に邪険に扱われることがあっても、黙っているしかないのだろう。真弓も、そこのところをよく心得ているらしく、
『泣いて頼むから、結婚してあげたのよ。――でも、やっぱり早まったわよねぇ……。諦めないで、魁くんを口説けばよかったわ』
などと、平然と皆の前で言ったりするから、魁としては、どんな顔をしていいのか、判らない。
夫たる修一が、それを笑い話にしてしまえるような人間なら良かったのだが、何も言えずに黙ってしまっているものだから、魁も余計に、気を遣ってしまうのだ。
もっとも、学生時代は、修一も、真弓に果敢に迫ったくらいだから、若さと希望に満ち溢れていたはずなのだが……社会、というも

のは、人一人、本当に呆気なく変えてしまうらしい。
それにしても、女というのは、時々――いや、いつも、どういう神経をしているのか、全く解らなくなってしまう。
今も、二人は、後部座席で、途切れることのない男の悪口を、言い合っている。もちろん、その度に、
『魁くんは別よ』
と、但し書きがつくのだが……。
自分のことを褒められるのは、本来、嬉しいことであるのだろうが、それが、他人のことを貶した上での言葉、となると、ちょっと喜ぶ気には、なれない。
まあ、女の話など、その場その場で変わる、半分冗談、半分本気の、憂さ晴らしのようなものであるのだろうが。
ともかく、魁には、聞いているだけで疲れるものであった。もちろん、疲れていようと、女二人は、話しかけて来るのであるが。
「ねェ、魁くん」
三十を前にして、『魁くん』もないと思うのだが、これも、大学時代からの呼び方である。
「克也くんの絵、買わなかったんですって？」
「え、ああ……」
「買う必要ないわよ。克也くんの絵って、魁くんの絵と、全然イメージが違うし、あの画廊に置いても、浮くだけだわ。せっかく、センス良くまとまってるのに、克也くんの絵一枚で、ぶち壊しになるなんて、大損よ」
「……」
当人がいないと、その悪口も、どんどんエスカレートして行くのだから、聞いている方は、たまらない。
小島克也は、昔の志のまま、画家として頑張っている一人なのだが、さっきの響子の言葉にもあったように、魁の好みに合うような絵ではないのだ。もちろん、批評家のように、何かと粗を見つけて突っ突くような真似はしないが、パッと見て、合う合わないの印象

は、大切である。
それに、その違いは、学生時代から解っていたことでもあるし、人の持つものは、そう簡単に変わりはしない。変わらないだけなら、まだいいのだろうが、新鮮さもない、ときては、魁も、克也の絵を好きになれる見込みは、なかった。
大学時代の仲間なのだから、もっと融通を利かせてもいいのではないか、と言われるかも知れないが、それをやり出したら限がないのだ。
車は、賑やかな女たちのお喋りの中、カフェテリアに着いた。

act 5

「やめてちょうだい！」
深見響子は、目の前に立つ小島克也を、気の強い眼差しで、睨みつけた。
「だけど、この間は考えておいてくれると――」
「お酒の席での話でしょ！　それとも、大勢の前で、『あなたと結婚する積もりなんてないわ』って言って、あなたに恥をかかせれば良かった、っていうの？　私は、あなたに恥をかかせちゃ悪い、と思って、目一杯、気を遣ってあげた積もりよ」
その響子の言葉に、小島克也の顔が、カッ、と染まった。
自ら、芸術家、という名に酔いしれるように、長く伸ばしている髪やヒゲも、怒りに小刻みに震えている。
場所は、カフェテリアの化粧室の前であった。
簡単なランチ・メニューを置く店で、他のメンバーも、今は注文を済ませて、それぞれ席についているはずである。
「それなら、どうして、一緒にフィンランドまで――」
「魁くんが行く、って言ったからに決まってるでしょ。あなたのためじゃないわ」
「――」
「せっかくの旅行なのに、場をシラケさせないでちょうだい」
そう言って、響子は、ツカツカと、皆の待つテーブルの方へと、戻り始めた。
克也は、それを止めることも出来ない様子で――また、収まりきらない怒りと屈辱のためか、長くそこに立ち尽くしていた。
そもそも、この旅の始まり、というのが、克也と響子の酒の席から始まっていたのだ。
大学時代の身内が、飲み屋で偶然、再会すれば、近況報告や、他の仲間の噂話にもなる。

デザイナーとして、満足できる地位についていた響子は、大学時代の友人のことなど、さして気にしていた訳ではないのだが、克也の方は、驚くほどに、皆の所在や活躍をよく知っていて、そんなことから、話は一気に、花開いた。
当然、今度、皆で集まらないか、という話にも、なる。
そして、魁の名前が出たことで、響子が、
「一度、会いたいわね」
と、いう言葉を口にするのにも、そう時間はかからなかった。
その結果が、今回の、この旅行である。
これは、克也と響子が、中心になって仕切った旅行であったはずなのだ。二人が意気投合したからこそ、適った……。
「あんな女……」
克也は、震えるこぶしを、握り締めた……。

「おい、克也はどうしたんだ？」
ランチも半分ほどになろうとした時、まだ手付かずで残っているランチを見て、仁龍生（じんりゅうき）が、眉を寄せた。
「さあ。自称、芸術家さまだもの、ここでも芸術に目醒めて、どこかで時間を忘れているんじゃないかしら」
そう言ったのは、響子である。
龍生は溜め息のように、肩を竦め、
「結婚しない女は、これだから」
と、言いたいことを、はっきりと言った。
「何ですって――」
「結婚しない男も、始末が悪いよなァ、魁？」
と、さっさと矛先を、魁へと向ける。
何かにつけて、要領が良いい男なのである、この仁龍生という青年。

フィンランド湾の入り江で、子供のように魁に呼びかけたのも、この青年で、仕事場では、クールな面貌を保ちつつ、コンピューター・グラフィックスなるものを手掛けている。のだが、何かにつけて、次男坊気質が見え隠れする。

まあ、そんなところが、魁には割りと、ほっ、と出来る存在であり――大学時代から付き合いがなかったことは、他のメンバーと同じではあるのだが、まだ、幾分、気が楽な相手であった。

喋らずにいれば、この仁龍生、もっとモテるはずなのだが、何でも口に出して正直に言ってしまうため、さっきのように、女性を怒らせてしまうことになるのである。

それでも、性格を知らない女性には、その切れ長の瞳と、どこか周囲に漂う子供っぽさで、魁と張るほどに、よくモテる。

act 6

「社長令嬢との結婚を控えて、こんなところに遊びに来ている男も、どうかと思うが」
魁は――これも、龍生に劣らず大人気ない言葉で、仕返しのように――いや、事実、仕返しとして、言い返した。
女たちが、この仁龍生を口説こうとしないのも、その社長令嬢との結婚が決まっているせいでも、ある。
それぞれの近況報告は、女二人のお喋りによって、訊くまでもなく、知れ渡っているのだ。
「羨ましいクセに。嫉くなよ」
「ムッ」
言葉を遠慮しない、というか、見かけだけは大人の、やんちゃな子供、というか、何となく憎めない青年である。
「魁くんは、そんなこと羨ましがっていないわよっ」
いや、男としては、やはり、少しは羨ましい――と、魁は思ったが、もちろん、口には出さなかった。
女の言葉を早く終わらせるには、黙っていることが一番、である。
「だいたい、結婚なんて、ままごと遊びの延長じゃない」
響子はそう言いながら、長い煙草を指に挟んでいる。
「陽が暮れたら家に帰る、って？」
「そうよ。――結婚する積もりなんてないんでしょ、魁くん？」
また、こういうフリが、魁へと回る。
響子の口調は、結婚しない自分を、魁と同種の人間として、誇っているようで、それは皆にも解っていただろうが、魁にも、もちろん、解っていて、こういう場所で、つまらない波風も立てたくなかったのだが、
「別に、独身主義、という訳じゃないさ。今は、仕事の方が手一杯で、そっちの方に手が回らないだけで」

その言葉に、響子の表情が、裏切られたかのように、きつく変わった。
龍生が必要以上に、からかったせいも、あるのだろう。
が、すぐに、
「そういうのを、世間では、独身主義、って言うのよ」
自らの負けを認めず、響子は言った。
ランチ・タイムは、その後も、そんな子供じみた話で、過ぎて行った。
真弓の夫、高橋修一は、ずっと黙ったままであったが、もともと存在感が薄いので、誰も気に止めることはしなかった。
そして、食事も終わり、後は支払いを済ませるだけ、となった時、
「結局、克也の奴、戻って来なかったな」
と、龍生が言った。
「子供じゃあるまいし、船の出航時間は知ってるんだから、それまでには戻って来るわよ」
どこか愉しげに、響子は言った。
傍らでは、
「ねェ、あなた、捜して来たら？」
と、真弓が、夫の修一を、突っ突いている。
「え、でも、ぼくは……その、道もよく知らないし……」
「何のために地図があるのよ。あなたが一番、若いんだから、体力だってあるし、捜しに行くのが当然でしょ」
女はこういう時だけ、年寄りになっても構わないらしい。
「それはそうだけど……」
「あ、そうだ。途中、イッタラに拠って、アールトの花瓶を買って来てちょうだい」
どうやら、当初の目的、人捜しの方は、薄れつつあるようである。
「でも、君の好みもあるだろうし……」
困り果てて、オロオロしている修一を横目に、魁と龍生は、肩を竦めて、互いに顔を見合わせていた。

そして、
「克也は、俺たちが捜して来るよ」
龍生が言った。
「そ、そんな、先輩っ。ぼくが捜して来ますっ」
さすがに、年上の人間をこき使うのは気が咎めるのか、道も判らず、土地勘も方向感覚も全くない、というのに、修一が慌てて口を開いた。
「それが当然よ」
と、真弓は、言っている。
「勝手にフラついて、皆に迷惑をかけるような人間なんて、放っておけばいいんだわ」
は、響子である。
どうやら、これ以上の話し合いは、無駄らしい。
それは、魁にも、龍生にも、判っていた。
何しろ、響子と真弓の二人は、学生時代から、男顔負けのバイタリティ溢れる存在、だったのだ。
そして、学生時代は、男に媚びようとしない、そんな二人と付き合うのが気楽で、魁も龍生も、男同士、という感覚で、その二人と付き合っていた。克也は――彼は、女として、響子を見ていたかも、知れないが。
「ほら、早く行きなさいよ」
と、真弓は相変わらず、夫の修一を突っ突いている。
その様子に、龍生がこう言ったのは、当然のことであっただろう。
「迷子は一人で充分だ。――いつまで煙草を吸ってるんだよ、魁。ここは禁煙だぜ。ほら、行くぞ」
と、魁の吸いかけの煙草を押し潰して、席を立つ。
こういう奴なのである、こいつは。
魁は、仏頂面で、席を立った。
「え、先輩――っ」
と、修一も同時に、席を立つ。

「ホテルまでなら判るだろ。君は、ホテルの方を捜してくれ。克也が見つかっても、見つからなくても、六時の出航に間に合うように、客船埠頭に集合だ。高い金払って、予約してあるんだからな」
社長令嬢との結婚が決まっている、というのに、結構、セコイ。
「婚約者の令嬢に、財布のヒモを握られてるんだろ？」
魁の目一杯の、皮肉であった。
そして、魁と龍生は、車で街を流すことに、修一は、響子と真弓をホテルへ連れ戻り、そのホテル内を捜すことに、なった……。

act 7

「おばあさま」
ガラス王の名を受け継いだ少年、エリアス・ダールクビストは、老いて尚、気品高い老婦人の部屋に来て、優しい口調で、呼びかけた。
窓からは、夏の――思ったよりも強い陽差しが、差し込んでいる。
ここ、ストックホルムは、メーラレン湖と、バルト海に囲まれた、二〇余りの島を橋で結ぶ街で、水の都に浮かぶ島、または、北欧のヴェネツィア、と呼ばれている。
その街の、短い夏を謳歌するため、人々は、大型帆船やヨットを操り、紺碧の海へと繰り出して行くのだ。
「おばあさま、陽差しの中に長くいらっしゃると、お体に触ります」
幼き当主、エリアスは、窓の側に腰掛ける老婦人へと、声をかけた。
「そうね……。あなたが成人するまで、倒れる訳にはいきませんものね」
老婦人――フリュ・エイラは、その言葉に逆らわず、窓の側を離れて、陽差しの届かない、奥の椅子へと、場所を変えた。
「パーティの支度は、まだいいのですか、エリアス？」
と、大きな背凭れ椅子に掛けて、問いかける。
「夕方ですから――。それに、おばあさまの気分が優れないのなら、今日は断っても」
「私は大丈夫ですよ。シグルドの言葉に、少しカッカしただけで」
「……」
「もう本当に年ね。以前は、カッカするあの人を宥めるのが、私の仕事だったのに……」
「おばあさま……」
エリアスは、皺深い――それでも暖かい手を、両手で包んだ。

「ええ、大丈夫。解っているわ。あなたは安心して、パーティに出席してちょうだい。お祖父様のお力になってくださった方々も、大勢、見えるのですから。私が一緒に行ければいいのだけど――」
そう言って、フリュ・エイラは、ドアの前に立つ男へと視線を向け、
「エリアスを頼みますよ、オーギュスト。今日の天候なら、海も大丈夫でしょうが、船上でのパーティは、エリアスの気分が悪くなっても、すぐに戻る、という訳にはいかないのですから」
「かしこまりました、大奥様」
オーギュスト、と呼ばれた、秘書然とした男は、畏まって、頭を下げた。
年齢はよく解らないが、五十歳前後であろう。知らない人間が、初めて彼を目にすれば、四十歳前後、と言ったかも知れない。それほどに、年、というものを感じさせない、男なのだ。
かつては、亡きガラス王の片腕として、働いていた男でも、ある。側にいても気にならないし――存在感がない、というのとは違うが、言うなれば、気配というものを立てない、有能な部類の男、なのだ。
今は、エリアスの秘書として、働いている。
「あまり心配をなさっては、皺が増えますよ、おばあさま」
「まあ」
フリュ・エイラは、クスクスと笑い、
「……あなたは本当に、優しい子ね、エリアス」
「……」
「あなたは、エーリックに――あなたのお父様に、そっくりだわ。本当に、どんどん似て……」
と、エリアスの金の髪を、優しく撫でる。
エリアス自身は、写真でしか、両親の顔を知らないのだが、まだ、物心もつかないころに、船の事故で死んだ、と聞かされている。
両親も、祖父も、呆気なく事故で失ってしまったのだ。
もちろん、エリアスの両親も祖父も、仕事で世界中を飛び回り、

さまざまな場所へ出掛けることが多かったのだから、普通の人間より、事故に遭う確立も高かったのだろうが――　本当に事故だったのだろうか、という疑問も、祖父たるガラス王の死から、エリアスの胸には、過っていた。

両親の死は、覚えていないから、疑問にもならなかったのだが、一年前の祖父の死は、あまりに突然で、あまりに衝撃的で、そのショックが収まりだした頃から、そんな疑問が生れるようになっていたのだ。

もちろん、事故でない、という証拠など何もなく、あれば警察が調べているだろうが。

亡きガラス王は、ヘリでの移動の最中に、事故に遭い、恐らく、気流の悪いところに入って、コントロールが効かなくなったために、墜落したのではないか、ということになっている。

ヘリコプターは、渋滞に巻き込まれることもなく、時間を有効に使えるから、と言って、亡きガラス王は、いつもヘリで、各地の工場を移動していたのだ。

それは、誰もが知っている。

だから、誰もが、そのガラス王の死に、疑問を抱かなかった。空を飛ぶ乗り物は、いつ落ちても不思議ではない、という思い込みがあったのだろう。あれだけヘリを乗り回していれば、今まで落ちなかったのが不思議なくらいだ、と。

だが、こうは考えられないだろうか。誰もが、ガラス王がヘリを愛用していたことを知っていたのなら、誰でも、そのヘリに何らかの細工をすることが出来た、と――。

大破炎上したヘリからは、その痕跡も見つからなかったが、もともと、証拠を消すために、大破炎上させたのではないか、と――。

もちろん、それは、証拠のない仮定に過ぎないのだが。

それに、両親の事故に関しては、大破炎上した訳ではないのだから、何か不審があれば、当局の調べで判っているはずだ。

ヘリの事故はともかく、船が沈んだその事故の方は、本当にただ

の事故であったのかも、知れない。
そう思うと、ヘリの事故も、やはりただの事故であったようにも、思えて来る。
それでも――。

act 8

それでも……。
「ぼくはこれで失礼します、おばあさま。そろそろ、パーティの支度を始めますので」
エリアスは、老婦人の頬にキスを重ね、オーギュストと共に、部屋を出た。
他人から見れば、可愛げのない、妙に大人びた子供であっただろう。恐ろしくなるほどに、子供らしさの破片(かけら)もない――。
だが、彼は、早く大人にならなくては、ならなかったのだ。ガラス王の名を継ぐ者として、そして、残された大切な人を守るために。
「――シグルドじゃないのか、オーギュスト？」
広い廊下を渡りながら、何とも言わず、エリアスは言った。
だが、オーギュストは、その言葉の意味を理解したらしく、
「あの気の小さな御方に、事故を装うような真似が出来るとは思えませんが。カッとなって、手を挙げるくらいのことは、なさるでしょうが」
「……そうだな」
一番、疑わしい人物が、そんなことの出来る人間では、ないのだ。
「もう危険な真似は、おやめください、坊っちゃ――エリアス様。大奥様に内緒で出席されている、他のパーティだけでも――」
「それは、パーティの間に、ぼくも事故に遭う確立が高い、ということかい、オーギュスト？」
「……」
「ぼくは、シグルドよりも、おまえのことを疑っているんだ。いつも、おじいさまの側にいたはずのおまえが、あの日に限って――おじいさまが事故に遭われたあの時に限って、一緒にいなかった。おまえなら、ヘリの細工も出来ただろう。そのおまえを、おばあさまの元に残して行くことはしない。おまえは必ず、ぼくの側にいるん

だ。――いいな、オーギュスト？」
何という少年なのであろうか、彼は。
これが、わずか十一、二歳の子供が口にする言葉である、というのだろうか。
「……はい、エリアス様」
陽差しには、少し陰が、差し始めて、いた……。

act 9

「見つかったか？」
車の中から降りて来る秋月魁を見て、仁龍生は訊いた。
「いや」
とだけ、魁は首を振る。
国際免許を持つこの二人が、二台のレンタカーをそれぞれに運転して、街を流して捜してみても、カフェから姿を消した、小島克也の姿を見つけることは出来なかったのだ。
あとは、タクシーでホテルに戻った三人だが、まだ埠頭には姿を見せていない。
「来るんじゃなかった、って顔だな」
煙草を銜える魁を見て、皮肉な口調で、龍生は言った。
「愛煙家が肩身の狭い思いをする北欧は、懲り懲りだよ」
「ノルウェーに比べれば、マシさ。それに――。話をすぐ別の方向に持って行って、煙に巻こうとするおまえの態度も、気にいらない。口数が少なけりゃ、女にはモテるんだろうが、男にはモテないぜ」
「……かもな」
苦笑のように唇を歪め、魁は、煙草の煙を、吐き出した。
何でもはっきりと言ってくれる友人を持つのは、いいこと、なのだろうが、龍生の場合、いつも、一番痛いところを突いて来るから、魁としては、黙るしかない。
「俺が一番、残念だったのは、自信家のおまえが、自分の才能に見切りをつけて、絵筆をを折った時の顔を、見ることが出来なかったことだよ。――挫折したくせに、逢ってみれば、それなりに成功している青年画商だ」
「それなり、は余計だ」
今でも、自信家なところは、変わっていない。
「何で、おまえが、こんなくだらない旅行に参加したか、当ててや

ろうか？」
「――遠慮しとくよ」
「そうか。なら、言ってやる」
結局、言うのである。
こちらの方も、学生時代から、ほとんど変わっていないらしい。
「おまえは、ただ一人、筆を折らずに画家なんて酔狂なことをやってる克也に、勝ちたかったのさ。画商として成功している自分の方が上だ、と見せつけてやりたかった。――そうだろ？」
「……」
「俺も同じだよ。挫折して、筆を折って――。それでも、別の分野で成功して、社長令嬢との結婚も決まってる。そんな自分を、克也に見せつけてやりたくて来たんだ。俺になかった才能が、克也になんかあるはずがない、ってな。あいつに、自分の才能のなさを気づかせてやりたかった。自分の才能が、どんなにちっぽけなものなのかにも気づかず、まだ絵筆を握っている、あいつに――。天才は、そうそう生まれて来るもんじゃない、さっさと筆を折って、おまえも挫折しろ、ってな」
「……かもな」
多分、龍生の言葉は、正しいものであったのだろう。そして、誰もが口に出せない、正直な心であったに、違いない。
どんなに描こうとしても描けず、技術ばかりが先走って、自分の絵が描けなくなってしまった時の、あの苦しさ。
描くことが、ただ楽しかった昔とは違って、段々、苦痛になっていった、あの頃。
うまい絵なら、いくらでも描くことが、出来た。誰もが知る有名美大で、期待されていた腕だったのだ。技術だけなら、いくらでも、持っていた。それこそ、人が羨むほどに。
だが――。
だが、ただ楽しいだけで、絵を描いていた日々のことが、思い出せなくなってしまっていたのだ。

うまくなれば、うまくなるほどに。
期待されれば、期待されるほどに。
それは、魁だけでなく、龍生もまた、同じであっただろう。だからこそ、仕事も成功し、忙しい時期でも、こうして休みを取って、こんな旅行に加わっているのだ。
他人にも、自分と同じ挫折感を味あわせてやりたくて……。
あの苦しさを、克也にも味あわせてやりたくて……。
「あの時、克也がテーブルに戻って来ないのを知っても、誰も席を立たなかった。すぐに、克也の話題から話を逸らし、目の前のランチを平らげた。だから、解ったのさ。皆、同じことを考えてるんだ、ってな」
誰もが、まだ絵筆を握っている男を、疎んじていたのだ。――いや、嫉妬していた。
「おまえは精神分析医（サイコアナリスト）になるべきだよ。コンピューターより、性に合っていそうだ」
車の灰皿に煙草を潰して、魁は言った。
「まあ、俺の場合は、色々と才能があり過ぎるからな」
結構、本気で言ってるから、この青年、可愛らしい。
「……色々な才能より、一つの才能が欲しかったさ、俺は」
この魁の言葉こそ、誰もが思っている本音、ではなかっただろうか。
「まあ、適当なところで、我慢しとくんだな。俺だって、そうしてるんだから」
フッ、と魁は、鼻を鳴らした。
そうする内に、タクシーが止まり、ホテルに戻っていた三人が、姿を見せた。

act 10

「魁くん、克也くん見つかった？」
第一声にその言葉が出て来たのは、幾分、安堵できるものであっただろう。それでも、それは、本心から、克也を心配してのものではなかったに、違いない。
見つからなかった、と知るや否や、話は、これから始まるクルーズのことへと、移り変わった。
これから、十数時間かけて、このヘルシンキから、海を隔てたスウェーデン――ストックホルムに、そして、そのストックホルムとフィンランドの古都を、巡ることになっているのだ。
十八時に出発して、翌朝九時に到着する、バルト海クルーズである。
客船埠頭には、その豪華客船が、碇泊している。
三万トン級の大型客船で、船底から、最上階のデッキまで、九層になっており、レストラン、クラブ、サウナ、プール、カジノ、免税ショップ……と、これからのクルーズを退屈させない施設が、整っている。
「もう行きましょうよ。船が出てしまうわ」
まだ時間的な余裕はあるはずだが、女二人は、そう言って、これからの船旅へと、魁を急かせた。
「克也くんだって、子供じゃないんだから、心配ないわよ」
「ん、ああ……」
結局、一人欠けたまま、五人は、豪華客船に乗り込んだ。
龍生の視線を感じて、魁は、また心を見透かされたような気がしたが、今は、欠けた一人を捜している時より、ずっと気分は楽であった。
多分、それは、誰もが同じ思いである、ということを、龍生の言葉から知ったせいでもあっただろう。

克也が何故いなくなったのかは判らなかったが――いや、恐らく、仲間の成功を見せつけられて、我慢できなくなって姿を消したのだろう、と思っていたが、そのことへの罪悪感は、あまり、なかった。

自分たちは、絵筆を折った地点で、すでに克也に負けているのだ、ということを、認めてしまったせいだったかも、知れない。

勝った人間が、負かした人間に罪悪感を感じるのは当然だが、負けた人間である魁や龍生が、そんな罪悪感を、克也に持つ必要などない、と思っていたのだ。

何より、今も昔も変わらず、好きな絵だけを描いて暮らしている克也を、これ以上、心配してやる必要もない、と思っていた。

そして、船は、バルト海へと、出港した。

二〇〇〇人から、二五〇〇人を収容できる、という大型客船の片隅には、五人を見つめる一人の男の影が、あった……。

act 11

同じ頃、バルト海を隔てたストックホルムから、政財界の要人たちを乗せた、超豪華クルーザーが、波足も優雅に、出港していた。
収容人数、四五〇名ほどのクルーザーだが、金持ちだけを乗せるクルーザーとあって、その豪華さも、並のクルーザーとは、ケタが違う。
出港と同時に始まったパーティも、これから夜通し続くであろうと思わせるように、まずは、握手と談笑から、始まっていた。
「何をしてるんだっ、マルセ！　早く来ないかっ」
タキシードに身を包む、六十歳前後の紳士が、まだ三十代半ばと思える貴婦人を、咎めるように、急き立てた。
「ですが、あなた……。私、昨夜から気分が……」
弱々しい声で、マルセ、と呼ばれた貴婦人は言った。
「各界の要人が集まっている場だぞ！　その中、私に体裁悪く、一人で挨拶をして回れ、とでもいう積もりか？　私の妻なら、少々気分が悪くても、這ってでもついて来るのが当然だろっ」
「……」
「早くするんだっ。このパーティが終わってからなら、倒れようと、寝込もうと構わん」
紳士は、蒼白い顔をした妻を労るでもなく、パーティの輪の中へと、入って行った。
マルセも唇を噛み締めるようにしながら――いや、もうそれさえも忘れてしまったかのように、無気力な表情で、紳士の後に続いている。
不幸な女性であることは、一目で知れた。まだ若いというのに、その華やかな時代を謳歌しよう、とする生気が、全くないのだ。
もし、別の人物の元へと嫁いでいたのなら、彼女は、美しく優雅な貴婦人として、もっと生き生きとしていたのではないだろうか。

そんな貴婦人を従え、紳士の方は、薄ら笑いさえ、浮かべている。
愉しんでいる、のかも、知れない。何でも言う通りに動かすことが出来る、その妻の存在を。
彼らが、まず最初に向かったのは、要人たちの中でも、もう表向きは引退した――それでも、彼らの一声で、国さえ動かすことが出来る、と言われている人物たちの元であった。
だが、その時、会場の入り口近くで、おおっ、という、低いどよめきが、響き渡った。
見れば、まだほんの小さな子供が、少し生意気にも、タキシードに身を包んで、会場へと入って来ている。
小さな子供でありながら、傍らには、大の大人を従え、政財界の大物を前にしても、少しも怯まず、堂々たる態度で、入って来たのだ。そして、そんな、不思議な子供の雰囲気は、周囲の大人たちを、圧倒させるに充分なものであった。
彼の傍らに控える男は、彼の父親、という訳ではなく、部下か何かであろう。そんなことが一目で判るほど、その子供は堂々とし、上に立つものの力を見せつけていたのだ。
閣僚クラスのお偉方さえ、その子供の元へと、自ら足を向け、孫と接するように、親しみを込めて話しかけている。
「お祖母様はお元気かね、エリアス君？」
「はい、お陰様で……」
「そうか。私も、君のお祖父様には、随分、世話になった人間だ。何か力になれることがあれば、いつでも声をかけてくれたまえ」
「ありがとうございます」
ガラス王――。彼は、その名を受け継いだ少年なのだ。
お偉方の元へと向かおうとしていた紳士は、憎しみにも似た眼差しで、そのガラス細工のような子供を、見据えていた。
周囲で、ひそひそと声が、飛び交い始める。
「先代のガラス王が亡くなって、ダールクビストのガラスの城も、もう終わりかと思っていたが、あんな小さい子供が、あっさりとガ

ラス王を継いでしまうのだからな。バーレンにしてみれば、思惑違いだっただろう」
と、チラチラと、紳士の方を、垣間見ている。
幼きガラス王と、老舗ガラス・メーカーの会長、バーレンとの鉢合わせは、人々の注目の的であったのだ。
もちろん、閣僚クラスのお偉方が、どっちにつくか、ということも含めて。
「クソっ」
紳士――バーレンは、その人々の囁き合いの中で、悪態づいた。そんなことが、また、周りの人間を喜ばせることになる、とも知らずに。
バーレンにしてみれば、わずか十一、二歳の子供が継いだガラス王国など、ほんの数カ月で、崩れ落ちてしまうだろう、と思っていたのだ。そして、その時には、老舗ガラス・メーカーたるバーレンのブランドが、再びトップに返り咲くであろう、と。
だが、現実にはそうはならず、幼い子供が継いだガラス王国は、それだけでも業界の注目を集め、亡きガラス王の人脈もあって、一向に衰えもしていないのだ。
バーレンには、何よりも面白くないことであった。
「あなた……。少しだけ、風に当たって来てもよろしいかしら……？　気分が悪くて……もう立っていられなくて……」
妻のマルセが、弱々しく言った。
もちろん、バーレンには、そんな妻の体を気遣ってやる積もりも、休ませてやる積もりも、なかった。
特に、今は、幼きガラス王の出現で、さらに機嫌を損ねていたのだ。
その妻の言葉を、キッ、と睨み、
「まだそんなことを言っているのか、おまえは！　このパーティの顔触れを見てみろっ。妻は気分が悪くて休んでいる、など、そんなみっともないことが言えると――」

と、言いかけたのだが、バーレンは、何かを思いついたように、言葉を切り、唇の端を持ち上げた。
「そうだな、少し休んで来い。ここで倒れられても、迷惑だ」
と、狡猾な面貌で、ニヤリ、と言う。
そんな許しをもらえるとは、思ってもいなかったのだろう。マルセの表情が、戸惑いに変わった。それでも、ホッとしたように頬を緩め、会場の出口へと、歩き出す。
バーレンは、その姿を黙って、見送っていた。カッ、となることはあっても、策を練れないほどに、間の抜けた人間では、ないのだ。
そこが、シグルドとバーレンの違い、でもあっただろう。
「美しい妻には、それなりに役に立ってもらわんとな……」

act 12

マルセは、血の気の引くような気分の悪さを圧し堪えながら、パーティ会場の外へと、向かっていた。
体が弱い、という訳では、ない。恐らく、精神的な疲労の方が、大きいのだろう。
会場を出るまでに足がフラつき、マルセは、前のめりに床へと倒れ込んだ。――いや、倒れようとした時、誰かが、腕を伸ばして、マルセの体を支えてくれた。
力強い――それだけで安心できるような、腕である。
厚い胸板も、大きな手も、その一瞬で信頼できる、という温もりが、籠もっていた。
もちろん、それが、夫たるバーレンの腕でないことは、確かであったが。
「大丈夫ですか、フリュ？」
マルセの耳に届いたのは、愛らしい、ボーイ・ソプラノであった。
小さな男の子が、マルセの顔を見上げている。
もちろん、その小さな子供が、マルセの体を支えてくれている訳では、ないだろうが。
マルセの体を支えてくれているのは、その少年の傍らに立つ、年齢のよく判らない男であった。
「あ……ごめんなさい。――ええ、大丈夫。少し、目眩がしただけで……」
マルセは、少し慌てながら、それでも、何故かその少年の優しい言葉に救われたような気分になって、忘れていた笑みさえ、返していた。
「オーギュスト、ご夫人を部屋までお送りして。バーグマン氏なら、快く部屋を貸してくださる」
「かしこまりました、エリアス様。――どうぞこちらへ、フリュ」

「え？　あの……」
マルセは、慣れない親切に、戸惑った。
バーレンの家に嫁いでから、こんな風に優しくしてもらったことなど、一度もないのだ。
「ダールクビストの秘書の身ではございますが、私が支えさせていただきます。――どうぞ」
「ダールクビスト……」
ダールクビスト、といえば、夫を不機嫌にさせている、ガラス王の名前である。夫の事業の邪魔をし、我が物顔でのさばっている、という……。
だが、それでも――。
それでも、マルセは、オーギュスト、と呼ばれたその男の手を、振り払う気には、なれなかった。それどころか、夫には感じたことのない、暖かさ、というものまで、感じていたのだ。
幸せな結婚でないことは、マルセの視点からだけでなく、周りの人間から見ていても判ることだろうが、もうそれが当前、と諦めかけていた頃に、こうして差し出された優しさは、何よりも心が暖まるものであった。
「どうぞ、こちらです」
オーギュストが、一つの部屋のドアを、開いた。
一流ホテルのロイヤル・スイートにも劣らない、豪華な部屋である。多分、このクルーザーの中でも、一際立派な一室ではないだろうか。
「あの――」
「エリアス様は――ダールクビストは、優しい方です。――ですが、あなたは拘わり合いにならない方がいい、フリュ。どんな些細なことでも、利用しよう、という人間はいるものです。ダールクビストへの礼も、ご遠慮いたします」
そう言って、オーギュストは、パーティ会場へと、戻って行った。
マルセにとっては、束の間の夢のような出来事で、あった。自分

が人間らしさを取り戻して行くような、そんな気さえ、していた。
どれほど秘書然とした事務的な言葉であっても、それは決して、冷たいものではなかったのだ。
「……ありがとう」
マルセは、部屋に入って、心地よい弾力を持つ、豪華なソファへと腰を下ろした。

act 13

疲れ切っていた体が、心の奥底の氷が解けるのにも似て、痺れるように、和らいで行く。

マルセは、その安らぎに浸るよう、薄茶色の瞳を、そっと閉じた。

もう何年も、こんな落ち着ける時間を持ったことなど、なかったのだ。父親の事業が、多額の負債を抱えて追い詰められ、その負債を肩代わりしてもらったバーレンの元に、嫁いでからは。

老舗ガラス・メーカーの会長たるバーレンにとっては、その出資の代わりに、何でも思い通りに動かせる――そして、格好の憂さ晴らしになる妻を手に入れたのだから、それなりに満足できる生活であっただろう。

バーレンが方々に女を囲っていることは、マルセも承知しているし、それに文句を言う積もりも、全くない。そんなところが、バーレンの気に入る妻でもあったのだ。離婚、などという体裁の悪いことにもならず、好き勝手をしても何もいわない妻の存在は。

どれくらいそうしていただろうか。

カチャ、とドアの開く音がした。

さっきのダールクビストの秘書、オーギュストが様子を見に来てくれたのか、と思い、マルセは、出来るだけ疲れた顔をしないように、閉じていた瞳を開いて、顔を上げた。本当は、もう少しこうして目を閉じていたかったのだが、あの二人のためなら、少々無理をすることも、決して厭な気分では、なかった。

足音が部屋へと、入って来た。

だが、それは一人の足音ではなく、少なくとも、四、五人はいるように、思えた。

マルセは少し戸惑いながら、ドアの方へと視線を向けた。

そこには、顔半分を隠す仮面をつけた男たちが、五人もいた。

仮面舞踏会でも始めるのかしら、とマルセは思ったが、すぐに普

通ではない雰囲気を感じ取り、ハッ、としてソファの上から、腰を上げた。
「あ、あなたたちは何なの……っ。人を呼びますよ」
と、震える声で、言葉を放つ。
「ほう。五人ではまだ足りんかね。よほど、好きとみえる」
狡猾げな唇が、ニヤリ、と歪んだ。
「何の話を……」
「我々を楽しませてくれるそうではないか。何でもしてくれる、と聞いているよ、あなたのご主人からね、フリュ」
「え……？」
それは、マルセの聞き間違い、ではなかったのだろうか。いくら、思い通りに動かせる妻とはいえ、自分の妻を、そんな見知らぬ男たちに差し出すなど――。いや、仮面を取れば、誰もが知っている顔であるのかも、知れない。
そして、バーレンが、今日に限って、休んで来い、と言ってくれたのも、このためであったのかも。
「さあ、楽しませてもらうよ、フリュ。バーレンにはもったいない、若い奥方だ」
男たちが、厭らしい笑いを浮かべて、足を進めた。
「や……やめて……」
マルセは、震える足で、後ずさった。
「ヘル・バーグマンのパーティは、真面目過ぎるのがたまにきずだ。こういうことにかけては、あなたのご主人の方が、楽しみ方を知っている」
タキシードの黒い塊が、目前に迫った。
「いやあああ――っ！」
果たして、そのマルセの叫びは、声になっていただろうか。
男たちの欲望は、それすら掻き消してしまうものであったに、違いない……。

act 14

「イッタラの花瓶を買いに行かなかった、ですって？　あなた、ホテルに戻ってから、何をしていたのよ！　買って来て、って言ったじゃないの！」

船がバルト海へと漕ぎ出してから、一時間、まだこれから、どんどんと華やかになって行く夜のために、着替えに戻った部屋の中で、真弓は、夫の修一を怒鳴りつけた。

ここは、真弓の部屋ではなく、修一と龍生が取っているツイン・ルームであり、真弓は、響子と別のツインを取っている。

デラックスから、エコノミーまで、キャビンには五つのカテゴリーがあるが、ここは皆、平等に、《Ｌｕｘ　Ｒｏｏｍ》を取っている。

真弓と響子は、《Ｓｕｉｔｅ》にしよう、と言い張ったのだが……。

「ご、こめん。つい、うっかりして……。それに、小島さんも捜さなきゃならなかったし――」

「克也くんを捜すのに、何時間かかるって言うのよ！　街を捜し回っていた魁くんや龍生くんならともかく、あなたは、ホテルの中を捜しただけじゃない！」

「……」

「もう本当にイヤになるわ。どうして、あなたなんかと結婚したのかしら」

そんな真弓の物言いは、もう今では珍しくもないことであったが、このフィンランドに来てから、修一には、たまらないものになっていた。

家の中にいるのなら、他に比べられる対象があるわけでもなく、それほど腹も立たないのだが――いや、腹は立っても、結局、真弓も、修一以外に話相手がいないために、いつまでもプンプンとはしていないのだが、ここには、他に話相手が、一杯いるのだ。それも、

修一より、ずっといい男と思える、二人の身内が。
どちらも独身で――龍生の方は、婚約者がいるようだが、魁の方は決まった相手もおらず――となると、真弓が結婚を悔やむのも無理はない。
そして、修一には、今までにない腹立ちが込み上げて来るものであった。
愛して結婚した妻であった、はずなのだ。あの頃は、そんな偉そうな口調も、年上女性の包容力とさえ思えて、ただ愛しいだけのものであった。心の全てを奪われるほどに、魅力的な存在であったのだ。
それが――。
それが、結婚という枠の中に収まってみると、この結果である。
何故、こんな女に、あれほど夢中になっていたのだろう、と思わずにいられないほどに。
人はよく、男は女の尻に敷かれているくらいが丁度いい、というが、実際、そうなってみれば、決して、そんなことは言わないだろう。
女はやはり、慎ましく――とまではいかないまでも、ある程度は夫を立ててくれ、互いに陰ひなたになり、共に支え合って生きて行けるような関係が、一番いいのだ。
「聞いてるのっ、あなた！」
また、キーキーと煩い声が、飛んだ。
殺してやりたい――と、ふと修一が思ったのも、その時であった。そして、それほどはっきりとした殺意を感じたのは、初めてであった。
だが、慣れない社会に出て、すっかり臆病になってしまった修一に、そんなことが出来るはずもなかった。せいぜい、物に八つ当たりするのがいいところで――いや、それも真弓に文句を言われるかと思うと、ためらって、出来ない。家の中のものを壊したりしたら、それこそ、何を言われるか判ったものではないのだ。

だが、ここは家ではないのではなかったか。そして、壊しても真弓に文句を言われるようなものは、それほどなかったのでは……。
やはり、臆病である。
「もういいわ。私、みんなとバーに行ってくるから。あなた、その間に免税店で、このメモに書いたものを買って来てちょうだい」
買い物好きな女性から見れば、この真弓の言葉は納得できないかも知れないが、この豪華客船の中の免税店、といえば、ウォッカやウイスキー、煙草を買う人の群れで、凄まじい混み方になっているのだ。それというのも、それらのものには、高い税金がかけられているためで、北欧の人々は、このクルーズを、船旅、というよりも、免税店でのショッピングや社交の場、として楽しんでいるのである。
そんな免税店に、うっかり買いに行こうものなら、遊ぶ前に、へたってしまう。それに、せっかくセットした髪も、バーへ行くために着替えた服も、クシャクシャになってしまうに違いない。
まだ買い物よりも、男の視線の方が気になる、女、なのである、真弓は。
真弓は、修一にメモを手渡すと、さっさと部屋を後にしていた。
今、修一の手の中には、そのメモだけが、残されている。
そして、消えることのない、はっきりとした殺意も……。
ギュっ、とメモを握り潰し、修一は、それを、ゴミ箱の中へと、投げ捨てた。……が、十分と経たない内に、
「ぼくに、人殺しなんか出来るはずないよな……」
と、ゴミ箱の中からメモを拾い、それをきれいに広げ始める。
こういう性格だから、真弓に馬鹿にされるのだ、ということも解っているのだが、人間の性格など、そう急激に変わりはしないものなのだ。絵ばかりを描いていた学生時代から、いきなり右も左も判らない社会に放り出された時なら、ともかく、もう言われ慣れている悪態、となれば。
それに、殺し損なって、一生そのことをチクチクと言われ続けるくらいなら――その上、莫大な慰謝料を請求されるくらいなら、素

直に免税店に行って、少しでも真弓に機嫌を直してもらった方が、いい。たとえ、他人からは、どんなにみっともなく見えようと……。

そして、日本に戻ったら、離婚届を突き出してやればいいのだ。会社での体裁は悪くなるし、慰謝料もがっぽりとふんだくられるだろうが、殺し損なってふんだくられる額より、遥かに少ないはずである。それに、あんな女のために、一生を棒に振る必要もない。

そこまで考え、修一は、メモを片手に、部屋を出た……。

act 15

外は、まだ明るいままである。
夏の今、バルト海の日没は、やがて――本当に〝やがて〟という、のんびりとした形で訪れる。
白く仄かな白夜の太陽の下、少し感傷的な気分にもさせてくれるような形で、陽はゆうるりと沈んで行くのだ。
そんな白い夜を、部屋の窓から眺めながら、魁は一人、静かな時間に浸っていた。
ここは、魁と克也が取っているツイン・ルームであり――いや、であるのだが、克也があれっきり行方不明であるため、魁一人の部屋となっている。
そして、それは、魁にとって、最も気楽なことであった。
もちろん、克也の心配をしていない訳では、ない。
だが、もういい年をした三十男なのだ。暗い夜に、突如としていなくなった、というのなら、心配もするだろうが、昼間のカフェで姿を消した、となると、自分から、フラフラと出歩いている、としか思えない。事故や事件に巻き込まれた、ということではないはずなのだ。もちろん、警察にも、それらしき通報は、一件もなかった。
今は、北欧の人々が、一年の中で、一番人生を謳歌する夏である。そんな暗い事件は、似合わない。
そんなことを考えていると、コンコン、とドアにノックが届いた。
魁はもちろん、居留守を使った。
やっと、騒々しいバーから逃れて、自分の部屋へと戻って来たところなのだ。少しくらい静かな時間に浸っていても、バチは当たらないだろう。
だが、ノックの主は、そう思っていないらしく、
「おい、魁、開けろよ！　いるのは判ってるんだっ。出て来なきゃ、女どもに、おまえがここにいることをバラすぞ。目の色変えて、お

まえを捜し回っているんだからな」
声の主は、本当にいつも、痛いところを突いて来る。
魁は、仕方なく腰を上げ、ドアの鍵を解除した。
目の前に立っているのは、言わずと知れた、龍生である。
「相変わらず、腹の立つ奴だな、おまえは。いつも俺より先に逃げやがる」
開口一番、龍生は、そんな悪態をついて、ツカツカと部屋に入り込んだ。
もちろん、魁は止めなかった。ドアの前で、長話をされるより、マシである。
「三十にもなると、騒ぐのはきついのさ」
と、肩を竦める。
「きついのは、そっちの方じゃないだろ。おまえの建前なんか、すぐに判るんだよ。俺だって、女どもの元気さに疲れてるんだから」
「なら、自分の部屋に戻ったらどうだ？」
飽くまでも、素っ気ない口調である。
「おとなしい後輩と〃にらめっこ〃も疲れるのさ。バーに来てなかったんだから、部屋で羽根を休めてるに決まってる。そんなところに先輩の俺が戻ってみろ。向こうだって、息抜きも出来やしない」
「おまえが一番、後輩に気を遣わせないタイプじゃないか。俺や克也が同室だったら、もっと気疲れしているに決まってる」
今回の部屋割も、それを考慮してのものなのだ。
「まあ、おまえと同室にはなりたくないだろうな。考えただけで息が詰まる。それに、真弓のこともあるし」
「……」
魁は、黙って窓へと視線を向けた。
窓の外には、幻想的な、明るい色の海が、広がっている。
二万ともいわれる群島の合間を縫って進む、このクルーズは、船からの眺めも素晴らしく、いくつもの群島や岩礁をくぐり抜けて進むスリルも、味わえるのだ。

岸辺には、北欧の人々の日常を垣間見ることも、出来る。
「まあ、おまえに厭味を言いに来た訳じゃないけど――」
龍生はそう言い、
「克也が船に乗ってるぜ」
と、唐突にその言葉を持ち出した。

act 16

「え？」
「さっき、バーの中で見たんだ。暗かったけど、あれは確かに克也だった。すぐに消えちまったけどな」
龍生の話では、克也の姿を見つけ、声をかけようとすると、克也は、逃げるように人混みの中に消えて行った、という。
もちろん、何故、逃げてしまったのかまでは、解らない。
「まあ、バツが悪かったんだろうけどな」
龍生は言った。
だが、魁の胸には、何となくすっきりしないものが、燻っていた。
確かに、龍生の言葉通り、突然、行方を暗まして、皆に黙って船に乗っているところを見られて、バツも悪かったのだろう。
だが、それだけではない、という気もしていた。
「響子や真弓には話したのか？」
魁は訊いた。
「話してたら、今頃、大騒ぎさ」
龍生は天を仰いで、肩を竦める。
男にとって、出逢ったばかりの女は可愛いものだが、長く付き合っている女は、喧しいものでしかあり得ないのだ。特に、学生時代からの知り合い、となると、気分も学生時代に戻ったような気になるのか、その女たちの賑やかさときたら、一時間と付き合ってはいられない。
「あの喧しさを見てたら、本当に、沙織と同じ女なのかと疑いたくなるよ。――あ、沙織、っていうのは、俺の婚約者の名前だけど――。きれいな名前だろ？　写真を見せてやろうか？　信じられないくらいの美人だぜ」
「……幸せな奴」
魁は、頭痛を堪えるように、眉間を押さえた。

龍生の方は、
「つまらない奴」
と、そっぽを向いている。
この二人、結構、気が合っているのかも、知れない。
性格の方は、似ている、とはいえないが。
「まあ、克也が無事、船に乗っているのなら心配もないじゃないか。
響子や真弓に知れて、酒の肴にされるのは、たまらないが」
「同感」
やっと、意見が一致した。
それから、どれくらの時間が経ったであろうか。急に、窓の外が暗くなった。それは本当に〃急に〃という言葉が相応しい、陽の暮れ方であったのだ。
これが〃やがて〃の日没なのだろう。
だが、何か、おかしくはないだろうか。
この辺りには、完全な白夜はないとはいえ、こんな風な暮れ方をするものなのだろうか。
「静かだな」
龍生が言った。
確かに、暗い海は、ゾッとするほどの静けさに包まれていた。
場所が場所なら、そして、相手が女性であったのなら、その龍生の言葉も、ロマンティックなものになっていたのかも知れないが、今は、違う。
その〃静かだな〃は、明らかに、気味の悪さを示す言葉であった。
話をやめたから、というのではなく、急に、何もかもが息をひそめるように、一斉に静まり返ってしまったのだ。――いや、人々は相変わらず騒いでいるだろう。
だが、風も波も、急に凪ぎ、自然の奏でる音の全てが、いきなり、黙り込んでしまったのだ。
もちろん、それは、二人の勘違いであったのかも、知れない。
部屋を出て、デッキに上がってみれば、風も波も、さっきまでと

同じようにあるのかも、知れない。
急激に沈んだ太陽のせいで、そんな風に思うのかも、知れない。
だが、何かが違う、と思わずにはいられなかった。
「海の上では、風が凪いだら、波も静かになるんだろう。朝凪とか、夕凪とか、色々あるからな」
何かが違う、と思いながらも、魁は、軽い口調で、そう言った。
「今は、朝でも夕方でもないぜ。それに、海が静まり返るのは、嵐の前触れ、とか言うじゃないか」
龍生は、納得しない、とでも言うかのように、食いついて来る。
「嵐が来る、なんて予報は出ていなかったさ」
「本当に来るとは言ってないさ。だけど、この大型客船は、群島や岩礁を縫うように航海してるんだぜ。もし、嵐が来て、岩礁にでも打付かったら、どうなると思う？　船底をやられたら、一巻の終わり、だぜ」
海の中に隠れている大岩は、その言葉が冗談でないほど、恐ろしいものなのだ。特に、大型船の場合、沈む時に渦を起こすため、泳げるものでも、その渦に飲み込まれて、まず助からない。
「ちゃんと、婚約者を保険の受取人にしてあるのか？」
飽くまでも冗談で済ませようとするかのように、魁は言った。
ここで、そんな心配をしていても、どうにもならないのだ。それに、二〇〇〇人を越える乗客がパニックを起こせば、どうなるかは、目に見えている。
「何かあれば、船員の方が早く察して手を打つさ。俺たちがオロオロと考えている間に、な」
窓の外の眺めが変わったのは、その時であった。

act 17

「何だ、あれは？」
窓の外が、ほんのりと明るくなっている。
そして――。
そして、龍生の視線の先には、蒼く仄光る霧が、厚い壁のように、押し寄せて来ていた。本当に、押し寄せる、という迫力で、船の方へと近づきつつあったのだ。
まるで、空を飛んでいる中、雲の中に入ろうとしているのではないか、という錯覚を起こさせるほどに――それほどに、一寸先も覗けない、深く分厚い、霧の塊が。
霧の塊が――。
恐ろしい化け物のように、とてつもない圧迫感を持って、押し寄せて来る。――いや、この辺りの人々には――海をよく知る人々には、何の変哲もない、ただの霧なのかも知れない。
だが、普段、東京という味気無い都会に住み、霧といっても、一〇〇メートル先まで充分、見渡せるようなものしか見たことのない二人にとって、突如、海に現れたその霧は、とてつもなく恐ろしいものであった。
「海の霧って……こんなに蒼く光るのか……？」
呆然と目を見開きながら、龍生が言った。
その思いは、魁も同じであった。
その霧は、確かに、光っていたのだ。蒼く、仄かに――もっと言うなら、薄気味悪く。
背筋に、震えが走るのを、感じていた。
全身が、いつの間にか、鳥肌立っている。
寒いのだ。キャビンは、空調も整えられている、というのに、それでも、寒い。
もちろん、気分的なものも、あるのだろう。

だが、何となく、この寒さは、その霧のせいではないのか、というような気も、していた。
霧は、今やすっぽりと、船を蒼く包んでいる。
船内アナウンスは、その霧について、何も言わない。だから、不安になる必要もないのだろう。
だが――。
だが、それでも……。
シャッ、と龍生が、カーテンを引いた。
顔色は、どことなく蒼冷めている。
「都会の人間には、こんな霧は心臓に悪いぜ」
と、気を紛らわすように、口を開く。
キャビンにいてさえ、息が詰まりそうになるような霧なのだ。
とてつもない――恐怖と呼べるようなものが、体中を這っているのも、解っていた。
「風がないのに、何で霧が流れて来るんだ?」
龍生が、黙っていられない、とでもいうように、魁を見上げた。
「……風はちゃんとあるのさ。きっと、この霧を確認して、船員が船の速度を落としたから、風が止まって、波が凪いだように思えたんだろう」
それが気休めであることは、魁自身、解っていた。
あの霧は、確かにどこか変であったのだ。人に言うと笑われてしまうかも知れないが、異質のものだ、という気がしてならなかった。
風がないのに、あっという間に船を飲み込んでしまったスピードも、数センチ先も見てとれない、あの厚さも。そして、何より、蒼く仄光る、あの不気味さ……。
海は相変わらず、静かなままである。
船内スピーカーも、ただ沈黙を守っている。
黙っていると、気が狂いそうになるような時間であった。
「あの霧、随分早く流れてたよな」
龍生が言った。

「ああ。きっとすぐに晴れるさ」
本当に、そうなのだろうか。
あの霧は、すぐに晴れるのだろうか。
蒼く光る、薄気味悪いあの霧は。
「音楽聴こうぜ、音楽」
魁の携帯に、小型のスピーカーを取り付け、龍生が言った。
その手が震えていることは、魁にも見えていたが、見ていないフリをして、黙っていた。
スピーカーを通して、魁の好みであるジャズ・ピアノの音が、部屋に広がる。
音のある世界が、これほど安心できるものである、と、二人が心の底から実感したのは、この時であった。
どちらも、カーテンを開けて、窓の外の様子を確かめてみようとは、思わなかった。ただ、時間が流れるのに、任せていた。

act 18

霧は――流れているだろうか。
それともまだ、この船を包んでいるだろうか。
互いに、その話題を口にするのは、避けていた。
見た者でなければ解らないだろうが、本当に、薄気味悪い霧であったのだ。
不意に、スピーカーから流れていた音楽が、止まった。
二人は、ハッと息を止めて、互いの顔を見合わせた。
「バッテリーが……切れたみたいだぜ、魁」
多分、そうなのだろう。ただ電池が切れてしまっただけのことなのだろう。
だが、普通、少し音が小さくなったりしてから、音楽が聞こえなくなるものではないのか。
どちらともなく、そんなことを考えていた時、不意に、コンコン、とノックが届いた。
それは、今の二人にとって、とてつもなく高い響きを持つ音のように、聞こえた。
顔を見合わせ、それから、ドアの方へと、視線を向ける。
ノックは、さらに大きくなって、二人の耳へと飛び込んで来た。
その向こうに、化け物がいるのだ――そんな気さえ、していた。
――いや、間違いなく化け物だ、と思っていた。さっきの霧に運ばれて来た、とてつもなく恐ろしい化け物が、ドアの向こうにいるのだと。だから、決してそのドアを開けてはならないのだと。
二人は、じっと息を殺していた。
ノックは、諦める様子もなく、続いている。それも、段々、大きくなっている。
そして――。
「魁くん！　いるんでしょ、魁くん！　居留守を使っても無駄よ。

さっき、魁くんの好きなジャズが聴こえたんだから」
ドアの向こうから聞こえたのは、すっかり酒でいい気分になっているらしい、響子の声であった。
「……やっぱり、化け物だ」
そう呟いたのは、果たして、どっちであっただろうか。
とにかく、相手が響子であると解って、二人は心の底から、ホッとしていた。そして、仕方なくドアを開けた。
居留守がバレてしまった以上、本当に仕方なく、である。
音楽を聴こうう、と言った龍生を、魁が睨みつけていたことは、言うまでもない。もっとも、あの場合は、音楽で聴かけなければ、本当に耐えていられない状況であったのだが。
「あーっ！　龍生くんまで、こんなところにっ。いつの間にか二人していなくなって――。せっかく豪華客船でクルーズを楽しんでる、っていうのに、遊ばなくちゃ意味がないじゃないの」
ドアが開いた途端、響子が――真弓も、目を吊り上げて――それでも甘えるように、目の前の魁にしがみついた。酒の勢いも、あったのだろう。――いや、素面(しらふ)でも同じことをしていただろうか。
酔っ払った女、というのは、色っぽいところもあるのだが、さっきのあの霧を見た後では、そんな気分にもなりようがなかった。
「おまえら、あの霧を見なかったのかよ」
龍生が言った。
「霧？　何、それ？　霧が出たの？　夜の霧って、ロマンティックで、素敵だわァ……」
女二人は、そう言って、またキャッキャッとはしゃいでいる。
どうやら、バーにいた彼女たちの目には、あの霧が映っていなかったらしい。
龍生は、シャっとカーテンを引いた。
「これがロマンティックな霧かよ」
と、窓の外を、二人に示す。が、そこにはもう、霧など破片(かけら)も残っていなかった。

響子と真弓は、ポカン、と暗い海を見つめている。
きっと、それで良かったのだろう。あんな霧など、見ずに済んで良かったのだ。
もちろん、霧を見せようとしていた龍生には、あってくれた方が、まだ格好がつくものであっただろうが。
「大間抜けだな、龍生」
魁の軽口も、霧が消えていたからこそ、口に出来たものであった……。

act 19

「さっきの夫人、どうだったんだ？」
人いきれで疲れ、用意してもらった部屋のベッドに寝転がりながら、エリアスは訊いた。
そのゴロゴロとした姿は、間違いなく十一、二歳の子供のものである。
「ただの疲労か何かでしょう。ご主人から離れて、少しお休みになれば、気分の悪さも収まるかと」
皮肉な視線で、オーギュストは言った。
「へェ。――で、その主人って？」
「ヘル・バーレンです」
「……なるほど。おじいさまも、その男のことは嫌っていらした。夫人の話までは聞いたことがないけど――。随分、年の離れた夫婦じゃないか。どう見てもあの夫人は、三十代だ」
バーレンは六十歳前後の年であるはずなのだから、ざっと計算しただけでも、かなりの年齢差がある。
「他所のご家庭のことに興味を持たれるのは、どうかと思いますが――」
「おまえは、秘書の身分で、ぼくに指図までするのか、オーギュスト？」
冷たい眼差しで、エリアスは言った。
「……。申し訳ございません。――あの夫人は、両親の借金の代わりに、バーレン氏に嫁がれたようなもので、バーレン氏にとっては、世間体のために必要な細君でもあったのでしょう。バーレン氏は一度、離婚なさっていますし、もうそんな体裁の悪いことも出来ないでしょうし――かといって、いつまでも離婚された（・・・）夫のままでは、業界でも形見が狭いでしょうから」
普通なら、十一、二歳の子供に聞かせるような話ではなかっただ

ろうが、オーギュストは、主人たる少年の命令のままに、そう言った。
「ふーん」
と、エリアスは、変わらずベッドに寝転がっている。
何を考えているのか解らない少年かも知れないが、それでも、今、この場に限っては、オーギュストにも、エリアスの考えていることは、解っていたに違いない。
「……あなたのお母様の方が、美しいブロンドだったと記憶していますが」
オーギュストは言った。
エリアスの碧い瞳が、持ち上がった。ある意味では、少年らしい瞳であったのかも、知れない。
「余計なことばっかり言う奴」
フッ、とオーギュストは、鼻を鳴らした。
わずか十一、二歳の子供が、母親を恋しがったところで不思議はないのだ。たとえ、何一つ想い出がない母親であろうと――。いや、何一つ想い出がないからこそ。
「お召しものがシワになります。お休みになられるのなら、上着を――」
「さあっ、起きよ」
どこまでも、人に逆らう少年である。普通なら、殴りつけたくなるほど憎らしい子供であるのかも知れないが、オーギュストは何も言わなかった。
フッ、と窓の外が暗くなったのは、その時であった。
「え？」
と、本当に声を上げてしまうほどに、急激に陽が暮れたのだ。――いや、きっと徐々に暗くなり始めていたのだろうが、話をしていたせいで、それに気づいていなかったのだ。
だが、もうそんな時間であっただろうか。
奇妙なほどの静けさが、その暗闇の中には、渦巻いていた。

海がすっかり、凪いでしまっている。
風も、あるようには、思えない。
「嵐でも来るのかな」
いつもと違う海の様子に、エリアスは、少し小さな声で、呟いた。
以前にも一度、これと似たような海を見たことがあるのだ。多分、あれは、祖父――亡きガラス王に連れられて行った、イギリス海峡（イングリッシュ・チャンネル）でのことではなかっただろうか。
静かに凪いだ海を見て、亡きガラス王は、
『嵐が来るな』
と、呟いたのだ。
そして、その言葉の通りに、嵐は、来た。
幼いエリアスには、その言葉を呟いた祖父が、とてつもなく偉大な人物に思え、尊敬したものである。
だが、今のこの静けさは、あの時のものとも、どこか違っているような気が、していた。
どこが、と言われたところで解らないが、ふと、そんな気がしたのだ。
「予報では、何も言っていませんでしたが……」
言っていれば、今日のパーティも、取りやめになっていたはずである。海の天候は気まぐれ、とはいえ、嵐が来る、という予報を見逃すはずもないだろう。
その霧は、いつの間に、と思うほど、気がついた時には、もうクルーザーの直前にまで、迫っていた。
分厚い――一寸先も見えないような、霧である。
そして、その霧は、不思議なほど蒼く光っていた。確かにその霧は、自らが発光体であるかのように、ぽぅ、と蒼白く光っていたのだ。
不気味な霧であった。
突然、現れたようでもあるし、足音を忍ばせて、近づいて来たようでも、ある。

act 20

「霧が……光ってる……」
エリアスがそう言った頃には、もう霧は、クルーザーをすっぽりと、包んでいた。
濃く、厚く、息が詰まりそうなほどの圧迫感を持って。
「クルーザーの光の加減で、そう見えるのでしょう」
オーギュストは言った。
だが、その肌には、隙間なく鳥肌が立っている。
「――大人には、そう見えるのかい、オーギュスト？」
「――」
「少なくとも、子供のぼくには、そうは見えない。この霧は、確かに自分で発光している。――もっとも、大人になれば、そんなことは恥ずかしくて口に出来ないのかも知れないが」
冷ややかな視線で――それでも、身震いをするように体を縮めて、エリアスは言った。
その身を駆け抜けているものは、確かに、恐怖、と呼べるものであった。それも、とてつもない類いの、言いようのない。
息が詰まる、のだ。
霧など入り込んで来るはずのないキャビンにいても、胸を圧迫されているように、息が詰まる。
だが、たかが霧に、そんな風に怯える必要などないはずなのだ。
本当に？
本当に、そうなのだろうか。この霧に怯えなくてもいい、というのだろうか。この霧から逃げなくてもいい、と。
少なくともエリアスは、この霧が漂う中、デッキには上がらない方がいい、と思っていた。一寸先も見えない霧の中で、海に落ちる危険性があるから、というのではなく、もっと他の――訳の解らない恐怖のために。

「これだけ深い霧なら、デッキにいる人間が、一人くらい誤って海に落ちても、不思議じゃないな。全く前が見えないんだから、慌てて動けば、落ちもする。特に、ぼくみたいな子供なら、誰もがそう思って納得するだろう。大人のように、落ち着いて行動が出来なかったのだと――。ぼくをデッキに連れて行って、突き落としてみるかい、オーギュスト？　今なら、おじいさまの時と同じように、事故死で片付けられる」

エリアスは、強かな眼差しで、オーギュストを見上げた。

オーギュストは、フッ、と瞳を細め、

「あなたが、霧の中で盲滅法、動き回られる方とは、思えませんので――。誰も事故だとは思ってくださらないでしょう」

「じゃあ、今回はやめる？」

これが、わずか十一、二歳の子供の言葉である、というのだろうか。

オーギュストには、ただ苦笑を零すしか出来ないものであった。

「おじいさまの孫だから、って、おまえは、ぼくにまで支える必要なんかないんだ」

「……ダールクビスト様は――大旦那様は、生前、こう言っておいでした。『おまえが共に死ぬべき相手は、この私ではない。おまえは、私が死んだ後も生き残り、エリアスを――あなたを守る努めがあるのだ』と――。私が死ぬ時は、あなたを守り切れなかった時なのだと」

「ぼくは、おじいさまから、そんな言葉を聞いたことはない」

「承知しております。――冷えて参りました。もう少し室温を上げますか？」

ゾクゾクとする寒気を、気温の変化のせいにするかのように、オーギュストは訊いた。

「おまえみたいな年寄りでもないのに、寒いもんか」

エリアスは、つん、と鼻を持ち上げて、そっぽを向いた。

憎らしい限りの、対応である。

それでも――。
それでも、オーギュストは、
「……お言葉ではございますが、私はまだ、四九歳です」
その男にも、やはり、年齢はあるのだ。それも何だか、妙な気がした。――いや、今なら、そう妙ではないかも知れない。この気味の悪い霧の中では。
「何歳であろうと、おまえが第一容疑者であることに変わりはないさ」
霧は、晴れる様子もなく、立ち込めていた……。

act 21

口の中に、男たちの精液の味が、残って、いる。
体中に汚液を塗りたくられ、何度も醜い欲望を突き立てられ、下肢の狭間から大腿部まで、白濁した液が伝っている。
涙は、いつ止まったのか、解らない。――いや、今も止まっていないのかも、知れない。
乳房は、唾液と精液で濡れ光り、余すところなく、男たちの欲望の色に、染め変えられている。
口の中で、何度、欲望を受け止めたことだろう。
柔らかい葩の中で、何度、欲望を受け止めたことだろう。
結い上げた髪は乱れ、打たれた頬は、まだ熱く痺れている。
これが、妻への仕打ち、だというのだろうか。ただ、気分が悪くて休みたい、と言ったことへの仕打ちだと……。
マルセ・バーレン夫人は、ベッドを降りて、ただ無気力に、立ち上がった。
鏡の中に、惨めな貴夫人の姿が映っている。もちろん、それが自分の姿である、ということは、マルセには最初から、解っていた。
そして、死にたい、と思ったのも、その鏡の中に映る、自分の姿を見た時であった。
こんな惨めな思いをして生きるよりも、死んだ方が、ずっとマシだ、と思ったのだ。
今、マルセが死を選んだところで、慈悲深い神々は、きっとお怒りにはならないだろう。そして、夫のバーレンは、気に留めもしないに違いない。
マルセは、ガウンを羽織ることもせずに部屋を出て、男たちの欲望に塗れた姿のまま、静かなデッキへと、足を向けた。――そう、静かであった。陽も、いつの間に暮れたのか、と思うほど、何の前触れもなく、沈んでいる。

もちろん、あの部屋で男たちに凌辱を受けていたマルセには、いつ陽が暮れたのかなど、知りようもないことであったのだが。
デッキは、不思議なほどに、静かであった。風は少しも流れず、海は湖のように、静まり返っている。
そして、突然、目の前が明るくなった。
陽が顔を出したのだろうか――マルセはそう思って、顔を上げた。
だが、そこには、白夜のもたらす白い光ではなく、蒼く仄光る霧が、あった。
霧が――光っているのだ。しかも、奇妙なほどに、蒼白く。
急に、寒さが肌を犯した。
その寒さが、目の前にある霧がもたらしているものであることは、容易に知れた。
だが、今のマルセには、それも、どうでもいいことであった。この惨めな姿を隠してくれる霧は、心地よいものでさえあったのだ。
蒼く仄光る不気味な霧は、すぐに、マルセの体をすっぽりと飲み込み、ただ蒼白い世界だけを、見せていた。
男たちの生臭い精液の匂いよりも、ずっと楽に呼吸が出来る空間であった。
何故、蒼く光っているのかも、海がこれほど静まり返っているのかも、さして気にはならなかった。
マルセは、霧に包まれるまま、長くその場に立ち尽くしていた。
声が、聞こえた。
「クソッ！　何なんだ、この霧はっ。自分の手も見えないじゃないか！」
他にも、デッキに出て来ている人物がいるのだ。声からしても、男であろう。
その男も海に落ちてしまえばいい、とマルセは、思った。
この霧が、そんなことを思わせた訳では、ない。あの男たちが、今のマルセに、そう思わせたのだ、多分。
「……関係ないわ。私はもう死ぬんだから」

マルセは、口の中で、呟いた。
死ぬ、と決めてしまうと、心は意外なほどに、楽だった。この薄気味悪い霧のことも、きれい、と思うことさえ出来ていた。たとえ、それが狂人の持つ心であろうと。
もう少し、この霧に包まれていたい――マルセはそう、思っていた……。

act 22

「あーん、また負けちゃったわ」
高級感溢れるカジノの中で、深見響子は、引き上げられて行くチップを前に、天を仰いだ。
他社と豪華さを競い合う大型客船の中のカジノといえど、賭け金はそう高くもないのだが、勝負ごと、というのは、勝つ積もりでやっているため、負けた、となると、カッカするもので、響子の場合も例外ではなく、そのカッカに任せて、賭け金は、あっと言う間に数万に上っていた。
「ちょっと頭を冷やして来るわ」
それが賢明な判断であっただろう。
響子は、傍らにいる真弓にそう告げ、外の空気を吸いに、デッキへ上がった。
夜の短い今の季節、すぐにも陽が昇り始めるはずなのだが、まだ外は、暗いままに沈んでいる。
仄明るい白夜の中、最上階のデッキから眺める海や群島の姿は、幻想的なほどに美しいはずであった。――はずであった、というのは、船に乗った当初は、ワクワクとして、デッキにも上っていたのだが、その後は、プールやサウナ、クラブ、バー、カジノ……と、船内での遊びが中心になり、一歩も外へ出ていないためである。
「もっと風があって気持ちいい、と思ってたのに、何だか肌寒いだけで、すっきりしないのね……」
人気のないデッキを見渡しながら、響子は独り、呟いた。
陽のない時間は、景色が見えないために、好き好んでデッキに上がって来る人間もいないのか、それとも皆、遊びに夢中になって、自然に浸ろう、という気もなくなっているのか、辺りに人影は見当たらなかった。――いや、広いために、全てを見渡せる訳ではないが、少なくとも、目につく範囲には、誰もいない。もっとも、物陰

では、恋人たちが、ロマンティックなムードに浸っているのかも知れないが。
「恋人、か……。やっぱり、大学時代から、魁くんが一番、素敵よねェ……」
龍生は、どちらかというと、年増のマダムや、キャリア・ウーマンに可愛がられるタイプで、同性にも人気があったのだが、魁は、そういうタイプではなく、正当な――といっていいのかどうかは解らないが、女生徒の憧れの的であり、同性には、一目置かれるタイプであった。早く言うと、龍生は〝おねーさま〟たちに遊ばれるタイプで、魁は、真剣な恋愛を求められるタイプである。
その怜悧に整った面貌もさることながら、いつも何らかの賞に入選していた絵の才能も、女生徒が魁に憧れる所以であったのだ。仲間内では、砕けたところもあり――いや、それでも、はた目には、近寄りがたい冷たい人間、という印象が強かっただろうが、話をしてみると、それが正しいと――いや、ただ無愛想なだけだと解ったに、違いない。まあ、どっちにしても、いい性格ではないのだが。
普通の女なら、その魁の無愛想さに、自信を失くして、
「本当に私のことを愛してくれているの？」
と、詰め寄って、魁をうんざりさせていたに違いない。
そして、響子と真弓は、そういうタイプではなかった。自分に自信があった、ということもあるし、何より、あの頃、魁は、響子や真弓の一番のライバルであったのだ。だから、魁も、響子や真弓とは気楽に付き合ってくれていたのだろう。
龍生は、昔から誰にでも可愛がられるタイプであったから、魁も龍生を気に入っていたに違いない。
克也は――。
克也は……そう。言うなれば、自信家の四人を、満足させてくれる存在であったのかも、知れない。こいつには勝っている、と思わせてくれるタイプの――。だからこそ、プライドの高い四人が集まっていても、大きな揉め事にもならず、卒業まで気楽に付き合って

来れたのだ。
学生時代は、誰もが自分の才能を信じていたし、自分こそ、天才と呼ばれるべき人物なのだ、と思い込んでいた。
だが、結局、誰一人として、その名声を手に入れることは、出来なかったのだ……。
「馬鹿よねェ……。一番、才能がなかった克也くんだけが、今も絵筆を握っているんですもの。さっさと自分の才能のなさに気づいて、絵筆を折ればいいんだわ。学生時代だって、一度も賞を取ったことがないクセに」
響子は、忌ま忌ましさを露に、吐き捨てた。
「それにしても……生臭いわねェ……。景色が見えないと、海ってこんなに、魚臭さが鼻につくものなのかしら」
コト、っと背後で物音がしたのは、その時であった。
響子は、ハッとして後ろを、振り返った。暗く人気のないデッキで、女が襲われる、ということは、珍しくもない筋書きなのだ。
だが、そこには――。

act 23

そこには、

「克也くん……」

そこには、克也が、立っていた。

行方不明だった克也が、何故、ここにいるのか、という疑問よりも、さっきの悪口を聞かれてしまったのではないか、という心配の方が、響子の胸には過っていた。だから、

「ずっと、そこにいたの？」

と、無理に笑顔を作って、問いかけたのだ。

だが、克也は、無表情の見本のように、気味が悪いほど表情を変えず、ただその場に突っ立っていた。――いや、表情が変わらなかったのではなく、響子が勝手に、変わらないだろう、と思っていたのだ。何故、と訊かれたところで解らないが、今の克也には、そんな雰囲気が漂っていたのだ。

だが、実際は、克也は、笑った。まるで、響子の作り笑いに合わせるかのように、どこか冷めた眼差しで。

それでも、愉しそうな笑みであった。

不気味――そう呼ぶことも出来たかも、知れない。安心できるような類いの笑みでは、なかったのだ。

「……克也くん？」

響子は、少し引きつるようにして、呼びかけた。

克也の長い髪は、まるで、海を泳いで来たかのように、じっとりと濡れて、湿っている。――いや、サウナの蒸気に当たったように、と言うべきだろうか。

だが、何となく生臭い匂いが漂い、海で泳いでいたのか、という印象を持ったのだ。首筋や顔に張り付く髪も、肌に張り付く洋服も。

だが、克也が海で泳ぐはずもなく、服を来たまま、サウナへ入るはずもない。

そういえば、さっき、魁と龍生が、霧が出た、と言っていなかっただろうか。もちろん、たかが霧で、そんな風に髪や服が湿ったりすることなど、あり得ないだろうが。
「な……何を黙ってるのよ！　言いたいことがあるなら、はっきり言いなさいよっ。私は、思ったことを言っただけだわ。あなたと付き合う積もりも、結婚する積もりも――」
「解ってるさ」
克也は、優しい表情で、笑みを返し、
「ああ、お腹が空いた。何か食べて来よう」
と、キャビンの方へと翻って行った。
確かに、優しい表情でそう言い、別段、傷ついた風もなく、あっさりとキャビンへ入って行ったのだ。
背筋が凍りつくほどに優しい表情で、身震いが出るほど、平坦な口調で。
「何なのよ……あれ……」
響子は訳が解らず、呆然とその場に立ち尽くしていた。
克也が行方不明だったことを思い出したのも、その時であった。
もちろん、それを思い出した響子が、すぐに皆の元へ伝えに走ったことは、言うまでもない。
魁と龍生が、重たげに頭を抱えていたことも――いや、抱えるであろうことも……。

その頃、船内のレストランでは、何枚もの皿を、あっと言う間に平らげて行く、奇妙な客の姿に、他の客やスタッフたちが、目を丸くしていた。
鳥肉、羊肉、牛肉、トナカイの肉はもちろん、魚も甲殻類も、どんな胃袋をしているのか、と思うほどに、口の中へと詰め込んで行く。

「……もっと新鮮でうまい肉が喰いたいな」
客は、ぽつり、と呟いた……。

act 24

ガタン、と冷凍庫の方から音が聞こえ、調理場のコックは、その不審に、眉を寄せた。

この超豪華クルーザーの中では、集まっている要人に、何一つ失礼がないように、と、ネズミ一匹、見逃してはいないはずなのだ。

ディナーの時間も過ぎて、やっと落ち着いた今、肉や魚を入れてある冷凍庫に用がある者など、いはしない。――いや、そこにいるのが人間なら、まだ構わない。ネズミやゴキブリでもいようものなら、このクルーザーの持ち主、バーグマンに、解雇されても文句は言えないのだ。

どうかネズミでありませんように、と祈るような思いで、コックは、音のした方へと、足を向けた。

何かが動いている気配を、感じる。

クチャクチャと、肉を咀嚼して飲み込む音も、聞こえて来る。

ネズミではないのだ。

コックは、ホッ、と胸を撫でおろした。

だが、こんなところで、誰が食事をしている、というのだろうか。各界の要人しか乗っておらず、スタッフも、厳しく躾られた人員ばかりである、というのに。

新たな不審を胸に抱き、コックは、その人物を隠している大きな調理台を回り、冷凍庫の前を、覗き込んだ。同時に、瞳を見開いた。

「な……っ」

こんなことがある、というのだろうか。

冷凍庫の前には、全裸の――下着すら身につけていない、貴婦人がいた。しかも、その貴婦人は、冷凍庫から出した生肉を――カチカチに凍りついて、岩のように堅くなっているその肉を、容易く咬みちぎっては、咀嚼して喉に通しているのだ。

信じられる光景では、なかった。それでも、コックはまだ、ネズ

ミでなくて良かった、と思っていた。
貴婦人は、味の品定めをするように、色々な肉を齧っては、存分に舌の上で味わって、キロ単位の肉を、見る見る小さく変えている。まるで、厚く覆う深い霧が、あっと言う間に船を飲み込んで行くように。
コックの足は、その異様な光景を前に、もはや動かしようもなく、凍っていた。
冷凍肉をそんな風に喰らう全裸の貴婦人を見て、声をかけることの出来る者など、いはしなかっただろう。
「……もっと新鮮なお肉が食べたいわ」
貴婦人は言った。
ゾクッ、とするような、生暖かい――血臭すら漂うような、言葉であった。感情もなく、ただ食欲だけが残っているような――いや、全ての感情が、食欲のためだけに使われているような。
異常、としか呼べない呟きであった。
コックは、全身が総毛立つような気味の悪さと、堪えようもなく込み上げて来る吐き気に、口を押さえて、一歩後ろに、退いた。刹那、調理台に足が当たり、ガタン、と大きな音を立てた。
全裸の貴婦人が、その音を聞いて、振り返った。
血がついていないのが不思議なほどの、表情、であった。
笑っていた。心底愉しそうに――それだけに、不気味でしかない、どこか冷めた表情で。
彼女を知る者なら、きっとこう言っただろう。
これほど愉しそうに笑う彼女を見るのは、初めてだ、と……。
「こっ……ここで何をしているんだっ」
コックは、やっと喉の言葉を、振り絞った。
何故、そんな問いかけが出て来たのかも、不思議だった。
逃げれば、良かったのだ。もちろん、逃げなくては、とも思っていた。
だが、相手はか細い貴婦人で、何か危害を加えられる、とは、す

ぐに思いもしなかったのだ。それに、足が竦んで、動けなかった。
「男……。そうね。男の肉がおいしそうだわ……。人間の男の肉が……」
貴婦人が、ゆっくりとした動きで、立ち上がった。全裸の自分を恥ずかしがるでもなく、舌舐めずりさえ、して。
湿った髪が首筋から胸に張り付き、余計に、その姿を恐ろしく見せている。
だが、何故、湿っているのだろうか。――いや、全裸でいるのだから、シャワーでも浴びていたのかも、知れない。それにしては、やけに生臭い匂いが漂っているが――いや、生肉を喰らっていたのだから、当然か。
そんなどうでもいいことを考えている場合ではないのだろうが、コックの頭の中は、すでに混乱しきっていた。
「あなた、とてもおいしそうだわ……」
貴婦人が、言った。
生臭い匂いが、強くなった。
食べられてしまうのだろうか、あの冷凍肉のように――と、そんなことも、考えていた。
貴婦人の口からは、糸を引くような涎が、垂れている。
その口が、カッ、と限界以上に、大きく開いた。本当に、顔中が口になってしまったのではないか、と思えるほど、一気に大きく開いたのだ。
コックは、ハッと我に返り、その〝食欲〟から逃れるように、翻った。確かに、足は逃げようとしていたのだ。
だが、翻ったそこには、調理台があった。
「うわあっ！」
強かにその調理台に体を打付け、コックは、突っ伏すようにして、前のめりに倒れた。
頬に、生暖かいものが、落ちた。
涎、である。

「男をみんな食べてしまえば、この世界に男なんていなくなるわ……」

コックの目には、大きく開かれた、赤い口だけが映っていた……。

act 25

「船が全く動かないそうです。原因はまだ判っていませんが、ただ潮に流されているだけの状態だとか」
明かりの消えた、ロウソクだけの暗い部屋の中で、オーギュストは、たった今、バーグマンから聞いて来た船の異常を、エリアスに告げた。
「なら、ヘリを呼べばいいだろ。パーティは終わったし、子供は寝る時間だし――。頭を使って考えろよ」
相変わらず、生意気な限りの返答である。
「無線も使えないそうで、ヘリの手配も適いません。発煙筒や、照明弾の類いも、全て駄目になっているそうで、救援を呼ぶ手段もないとか。――ボートでお帰りになるのなら、頼んで参りますが――。正し、モーター・ボートの方は使えず、ゴム・ボートしかないそうです」
その言葉に、冷たい一瞥が、持ち上がった。
「すぐにカッとなって、大人げない奴」
エリアスは、言った。
すぐに、ではなく、オーギュストはよく耐えている方だと思えるのだが。
「ゴムボートがあるなら、おまえ一人で戻って、ヘリを手配して来くればいいだろ」
「……。私が一人で戻っても宜しいのですか？」
「構わないさ。ストックホルムまで、ゴムボートで戻れやしないだろうからな」
「私は、あなたをお守りすることが役目ですので、必ず帰り着き、迎えに――」
「それ以上付け上がって、ぼくを怒らせるなよ、オーギュスト。意地を張りたければ、他でやれ。ゴムボートで何十時間もかけて帰る、

なんて馬鹿馬鹿しいことを口にする前に、な」
エリアスは、子供のものではない眼差しで、冷たく言った。ある意味では、彼は、可哀想な子供であるのかも、知れない。
「……申し訳ございません。食料は、余分に積んであるそうですから、当分は困らない、ということです。私は、何か信号弾を作れるような薬品がないか、医務室の方を見て参ります」
オーギュストは、一礼を残して、部屋を出た。
あの霧が消えた後、しばらくして、船内の照明が全て消え、クルーザーも動かなくなってしまったのだ。まさか、霧のせい、ということもないだろうが、こんな故障の仕方は初めてだ、と船員たちは零していた。
今は、各所にロウソクが灯され、船内も明かりを取り戻している。が、それは、暗闇でない、という程度の明かりに過ぎず、近代化の照明に慣れた現代人には、自由に歩き回れる、というほどの明かりでは、なかった。
オーギュストは一応、懐中電灯を持っているが、それも、行く手の全てを照らしてくれる訳では、ない。
そして、何かが違う――そう思える静けさが、クルーザーの周囲を、取り巻いていた。もちろん、この暗闇のせいで、そう思えるのかも知れないし、船に異常が生じる前に見た、あの薄気味の悪い霧のせいで、そう思えるのかも、知れない。
人間というのは、精神的なことに、大きく左右されてしまうものなのだ。
蒼く仄光る霧と、突然止まった船、消えた照明――奇妙なものと、身動きの出来ない不安、先の知れない闇――そんなものが、人を恐怖に追い立てるのだ。
だが――。
だが、本当にそうなのだろうか。肌に感じる、この得体の知れない恐怖は、本当に、人間の心理的恐怖から生み出されているものなのだろうか。

どこかで何かが起こっている――そんな気は、しないか。
それも、すぐ近くで……。
妙に生臭い匂いが、した。潮の匂い、とか、魚の匂い、というものにも似ているが、それらとはどこか、違っている。
オーギュストは、鼻をつくその匂いに、眉を寄せた。
懐中電灯の光を、少し広く動かしてみる。
影が、あった。――いや、姿も、廊下の先に見て取れる。
全裸の貴婦人が、壁に凭れかかるようにして、倒れているのだ。
そして、オーギュストは、その貴婦人に見覚えが、あった。
「フリュ・バーレン！」
あの時、パーティ会場で、気分を悪くして倒れた、バーレンの夫人、マルセである。
「どうかなさいましたか、フリュ・バーレン？　この姿は、一体――」
オーギュストは、マルセの傍らに膝をつき、意識を確認するように、肩をつかんだ。
マルセの結い上げてあった髪は、乱れて解け、そして――何故か、冷たく湿っていた。もちろん、今はそんなことを気にしている時では、ないのだが。
「フリュ？　大丈夫ですか、フリュ？」
その呼びかけに、マルセがゆっくりと、顔を上げた。

act 26

妙に、蒼白い面であった。それに、異様に生臭い匂いが、鼻をついた。

血臭、ではないだろうか。唾液が凝固していくような、そんな、血独特の匂いが、混じっている。

だが、マルセが怪我を負っている様子は、どこにもなく、白い裸体には、血の一滴すら、ついてはいなかった。

「男……」

マルセが言った。

生臭い匂いは、その口の中から生じていた。

「男？」

オーギュストは、その言葉に――いや、マルセの面に尋常でないものを感じて、眉を寄せた。――いや、尋常でないことは、全裸でこんなところに倒れていたことからしても、容易に知り得る。

だが、そんなことではなく、もっと異様な――普通の人間ではない、というような恐怖を感じていたのだ。

「男……なんて……みんな喰い尽くしてやるわ！」

突然、マルセが牙を剥き、カッ、と大きく口を開いた。――いや、牙などなかったかも知れないが、オーギュストの目には、そう見えたのだ。

オーギュストは、反射的に飛びのいた。

秘書として、そして、ボディ・ガードとして、日頃から鍛えている体である。危険の前では、体も、考えるより先に、動いてくれる。

だが、マルセの動きも、早かった。獣のように跳躍し、オーギュストを上から押さえ付ける。

「く……っ！」

凄まじいほどの力であった。

馬乗りに、肩を押さえ付けられる中、オーギュストは、涎を垂らして口を開くマルセを押しのけようと、マルセの肩にかける手に、力を込めた。
吐き気を催すような生臭い涎が、ダラダラと糸を引いて、零れている。
正気では、ないのだ。
彼女は確かに、狂っている。人間を喰らおうとするなど、正気の人間が思いつくような考えでは、あり得ない。
それに、女とも思えないこの力は、あの気の弱そうな、しかも、顔色の悪い貴婦人の姿からは、想像も出来ないものであった。
だが、誰が彼女こんな風に狂わせた、というのだろうか。
もしくは、何が。
オーギュストは、身動きの取れない上半身を諦め、片膝を立てて、馬乗りになるマルセの背中に、蹴りを入れた。
膝蹴りを喰らったマルセが、前のめりに床へと、投げ出される。
もちろん、オーギュストは手加減をしたが――いや、しない方が良かったのかも、知れない。マルセは、大きなダメージを受けた様子もなく、立ち上がった。
彼女はもう、人間ではない、のだ――そんな気が、した。
少し手荒なことをしても、動きを封じてしまわなければ、喰い殺されてしまうだろう――そんなことも、思っていた。
「フリュ……。あなたは、人殺しなどしない方がいい」
オーギュストは、蒼黒い艶を放つ、ロイヤル・ブルーのコルト・パイソンを、脇のホルスターから、抜き取った。
その銃口を、マルセへと向ける。
だが、マルセは怯みもせず、食欲だけしかない獣のように、オーギュストへと襲い掛かって来た。
オーギュストは、ためらうことなく、引金（トリガー）を引いた。
だが――。
だが、銃は、カチ、っと小さな音を立てただけで、銃弾を噴く様

子は、全くなかった。
弾が一発も入っていないのだ。――いや、確かに入れておいたはずである。このクルーザーでのパーティに出席する前、ちゃんと確認しておいたのだ。こういう、要人ばかりが集まる、閉鎖された船の上でのパーティは、それを狙った強盗に襲われる危険もあるために。
「まさか……」
オーギュストの目前には、大きく開いた口が、迫っていた……。

act 27

ロウソクの明かりに照らし出されるベッドの上で、エリアスは、手のひらに握る、淡金の銃弾を見つめていた。
オーギュストの銃から、抜き取っておいたものである。
それを、一つずつ枕に並べ、
「オーギュストが殺した……殺してない……殺した……殺してない……」
と、花占いのように、呟きを、落とす。
実際、エリアスは、オーギュストのことなど何も知らないのだ。生まれた時には、もう祖父の片腕として働いており、どこへ行くのにも、常に側に控えていた。
祖父が、彼を『オーギュスト』と呼んでいたために、エリアスも同じように、呼んでいる。その名前以外のことは、素性も、家族も、何一つ知らない。また、訊いたことも、一度もない。
気がつけば、いつも側にいるような、そんな不思議な存在であったのだ。
「ニューヨークでもないのに、銃なんか持ち歩いて……。こんなもの、照明弾の代わりにもなりはしない」
エリアスは、枕の上に並べた銃弾を、再び手のひらの中に握り締めた。
ドアの外に足音が聞こえたのは、その時であった。
コツ、コツ、コツ――と、腹が立つほど単調な歩調で、誰かが静かな廊下を歩いて来る。
普通、暗い場所を歩く時、人間というのは、つい速足になったり、或いは、一歩一歩確かめながら歩いたりするものだが、その足音は、ひどく単調なリズムを刻んでいたのだ。妙に苛立ちを覚えるような、全く変わりない足取りで。
そして、その足音は、エリアスがいる部屋の前で、止まった。

多分、船内の見回りをしている誰かなのだろうが、止まった割りには、声をかけて来る様子がない。部屋の前で足を止めたのだから、何か声をかけて来るのが普通だ、と思えるのだが。

カチャ、とドアのノブを回す音が、した。

それも、普通の行動ではあり得ない。普通、ノックを置き、声をかけ、部屋の中の人間の了解を得てから、ドアを開けるのが常識である。

となると、ドアの前にいる人物は、そんな常識の通用する相手ではないのだろうか。――いや、オーギュストが部屋に戻って来た、ということも考えられる。もちろん、オーギュストにしても、ノックもしない、というのは、おかしなものなのだが……。

「オーギュスト？」

エリアスは、ベッドの上から体を起こし、少し訝しい思いで、光の届かない場所に目を凝らした。

だが、返事は何も、返らない。――いや、

「ああ、いてくれて良かった」

と、その人物は、ドアを開けて勝手に入り込みながら、そう言った。

「バーグマン氏は、子供の君は寝かせておいてあげよう、とおっしゃっていたが、これからホールで、船の故障についての説明があるんだよ。皆、不安になっているからね。君が寝ているようなら、オーギュストに聞きに来てもらおう、と思っていたんだけど――。彼はどこにいるんだい？」

ドアから姿を見せた人物は、部屋を見渡すようにして、そう訊いた。

「……。バス・ルーム」

エリアスは言った。

「そうか。じゃあ、どうするかな。君が聞きに来るかい？」

「……あなたは何故、このクルーザーに、シグルドおじさま？」

ドアの前に立っているのは、エリアスの伯父、シグルドであった。

「何故、とは厳しいな。ぼくはこれでも、ダールクビスト家の一員だし、貿易会社の社長だよ。ガラス王ほどの身分でなくても、パーティの招待くらいは受けるさ」

「……」

確かに、シグルドがパーティに呼ばれていても、何の不思議もないだろう。

何百人、という客人（ゲスト）たちの中、シグルドの姿を見かけなかったのも、不思議ではないかも知れない。それでなくてもエリアスは、常時、亡きガラス王の孫として、さまざまな人物に取り囲まれていたのだから。

それに、オーギュストが言っていたように、シグルドは、エリアスの祖父や両親を殺せるような人物でもなく、今、エリアスを殺せるほど、度胸があるとも思えない。――いや、度胸はともかくとして、自分が疑われないように、こんなところでエリアスを殺す計画を立てることは出来ないだろう。

だとすると、彼は本当に親切だけで呼びに来てくれた、というのだろうか。

act 28

「……ぼくが聞きに行くよ」
エリアスは言った。
「オーギュストに伝言を残して行くかい？」
「別にいい」
そう言って、ドアの方へと足を向ける。
妙に生臭い匂いが、した。廊下から漂う匂いなのだろうか。さっきまで何の匂いもしなかったのだから、ドアが開いたせいで流れ込んで来たとしか、思えない。
「ほら、暗いから気をつけて」
シグルドが、懐中電灯で、足元を照らす。
その時、また、廊下の先に、足音が聞こえた。シグルドと違って、その人物は懐中電灯を持っておらず、時々、ロウソクの側を通る時だけ、その明かりで顔が見える。
血塗れ、であった。ダーク・スーツの肩の辺りが、特に赤黒く変色している。
「オーギュスト！」
エリアスは、その人物の姿を認めて、声を上げた。同時に、血塗れの秘書の元へと、足を踏み出す。
「危ない――。こんな暗い中を走ったら、転んで怪我をするじゃないか」
シグルドの腕が、エリアスの行く手を遮るように、背後から胸に巻き付いた。
服が少し濡れているのか、その腕に抱きすくめられた瞬間、ひんやりとしたものを、エリアスは感じた。
「怪我なんかするもんかっ。放せったら！」
と、胸に巻き付くシグルドの腕を振り解き、オーギュストの元へと駆けつける。

オーギュストの体は、服の上から何かに切り裂かれたのか、しとどに血で濡れ染まっていた。
「オーギュスト、この傷は一体――」
「大丈夫です……。お部屋にお戻りください、エリアス様……。ここは危険です……」
「危険？」
「はい……。現実とは思えないことが、確かに現実に起こっています……。私のような大人にも、現実と認めるしかないようなことが……」
オーギュストの言葉は、エリアスにはすぐに理解できるものではなかったが、それでも、流れる血と、オーギュストの懸命さは、理解できた。確かに、何らかの危険が迫っているのだ。このオーギュストに、傷を負わせることが出来るような、そんなとてつもない危険が。
「解ったよ。――シグルドおじさまが、ホールで、船の故障についての説明会がある、って言ってたけど、そっちの方はどうする？」
「私が行って参ります。あなたは、部屋から決して出ないようにしてください。シグルド様とご一緒に」
オーギュストはそう言い、
「シグルド様、エリアス様をよろしくお願いいたします。私は、他の方々に、危険を伝えに行かなくてはなりませんので」
と、離れて立つシグルドに、声をかけた。
「ああ。ちゃんと部屋に鍵をかけておくよ」
平坦過ぎるそのシグルドの口調は、普段なら、おかしい、と思えるものであったのかも知れないが、今のオーギュストとエリアスには、注意を払うことが出来なかった。
「おまえも、傷の手当をしてからの方が――」
「大丈夫です……。それと、この銃をお持ちください。弾の込め方も、扱い方も、ご存じですね？」
弾の抜き方を知っているくらいなのだから、当然、込め方の方も

知っている。
「ああ、だけど――」
「マルセ夫人は……もう人間ではありません」
「え？」
「もし、私が戻って来る前に何かありましたら、ためらわず、この銃をお使いください」
オーギュストは、真摯な眼差しで、そう言った。
「……ぼくが弾を抜いたから、やられたのか？」
「いえ……。銃に頼ろうとした私の失態です。――部屋に戻られたら、すぐに鍵をかけて、他の誰も入れないようにしてください。私の考えが間違っていなければ、マルセ夫人一人ではないかも知れません。――後は、戻ってからお話しいたします」
「……解った」
エリアスは、ギュっ、と手の中のコルト・パイソンを握り締めた。子供の手には、重すぎると思える武器である。重量だけのことではなく、その銃が果たすであろう、役目も。
オーギュストが、安心したように、廊下の向こうへと歩いて行く。
「さあ、部屋に戻ろう、エリアス。オーギュストは有能な男だから、心配いらない」
シグルドの手が、肩に触れた。
どこか生臭い匂いのする、湿りを帯びた手のひらであった……。

act 29

「もう、どうなってるのよ！　カジノへ戻った途端、停電なんて――。真弓がどこにいるのかも解らないじゃないの」

一向に明かりの戻らない船内で、響子は、怒りを打付ける相手もなく、吐き捨てた。

すぐに元通りに明かりが灯るだろう、と思っていたのに、船内は、相変わらず暗いままで、各カテゴリーに船員が明かりを点けに回っているが、三万トンクラスの客船となると、それも、すぐに、という訳にはいかないのだ。

そして、停電についての説明も、一向に埒が明かないままで、『まだ何も解っていない』という説明しか受けていない。しかも、船内の放送が使えないために、それも、船員たちが、一か所一か所回って伝えている。

結局、停電の原因も解らず、いつになったら回復するのかも解らず、明かりが灯るまで動かないでください、ということだけが、説明の全てであった。

そして、今、やっと、船内にロウソクの明かりが灯り、船のスタッフたちが、乗客の誘導を始めたのだ。

もちろん、二〇〇〇人を越える乗客であるから、すんなり、とは行かなかったが、そう酷いパニックもなく――まあ、火事や嵐ならともかく、ただの停電なのだから当然だろうが――乗客たちは、文句を唱えこそすれ、駆け回ることもなく、各自、自分の部屋へと戻っていた。

響子もまた、同じである。

「それにしても、真弓、まだ戻って来ないのかしら……」

ツイン・ルームの、もう一人の滞在者は、未だ、船員に誘導されて来るでもなく、部屋に戻って来ていないのだ。

「まさか、一人で魁くんのところに行ってるんじゃ――」

ハタ、と思いついたその考えに、響子は、ベッドの上から、腰を上げた。が、その思いつきは、すぐに否定されることになった。
コンコン、と部屋にノックが届いたのだ。
恐らく、真弓が戻って来たのだろう。
「遅いじゃない、真弓。何してたのよ」
響子は、ロウソクの明かりを持ち上げながら、ドアの方へと足を向けた。
鍵を解除して、ドアを開く。
暗い中、すぐに顔を見て取ることは、出来なかった。まさか、相手の顔の真ん前に、ロウソクを持って行くことも出来なかったのだ。
だが、すでに目が暗闇に慣れていたこともあって、そう間を置かずに、相手の顔を見て取ることが出来た。
男であった。
体つきからしても、それは何となく判っていたのだが、顔を確認して、響子は訝しい思いで眉を寄せた。
「まだ私に何か用なの、克也くん？」
と、冷たい口調で問いかける。
「お腹が空いてるんだ……」
克也は言った。
その口からは、とてつもなく厭な匂いがしていた。生臭い――湿気と血臭が混じり合っているような。
それに何より、克也が口にした言葉は、響子には、戸惑うしかないものであった。
「お腹が空いた、ですって？」
からかっているのだろうか、と思えるような言葉であった。
「生憎、ここはレストランじゃないのよ。さっさと出て行ってちょうだい」
と、ドアを閉じる――いや、閉じようとしたが、
「レストランの肉では満足できないんだ」
と、克也が、閉じようとするドアに手をかけて、グイ、とまた、

開け放った。

act 30

響子は、その時、初めて、目の前の克也に、恐怖を感じた。
正常ではない――そんな印象を、覚えたのだ。
まず、眼の輝き。
異形の獣のように、爛々と薄気味悪く、輝いている。欲望、というか、純粋な食欲、というか、目の前の〝食事〟を食べたくて仕方がない、といった顔付きなのだ。
「……克也くん？」
響子の声も、震えていた。
「魁には、もう喰わせてやったのかい？」
克也が強引に、部屋の中へと入り込む。
「ちょっと――」
「この脂肪の塊の乳房も、淫乱なあそこも、全部喰わせてやったんだろ？」
ダン――っ、と壁に強く叩きつけられ、響子は刹那、声を失くした。
頭が割れたのではないか、と思うほどに強く叩きつけられ、全身が瞬く間に痺れ出していたのだ。
しかし、克也の口調は、少しも怒りを含んでいない平坦なものであり、それが余計に薄気味悪さを感じさせていた。
「く……」
ポタ、っと床に、赤いシミが落ちた。
それは、壁に叩きつけられると同時に、床に落としてしまったロウソクの明かりで、かろうじて、見えた。
鼻血、だろう。
しかし、ロウソクはもう、消えかかっている。
それでも、その鼻血は、響子をカッとさせるに充分なものであった。

「何をするのよ、このキチガイ！　皆があなたのことを、何て言ってるか知っているの？　才能もないくせに、まだ絵筆を折っていない馬鹿だ、って言ってるのよ！　そんな人間を、私が相手にするとでも思っているの？　フラれたからって、女に暴力を奮う男なんて最低よ！　今度、私に手を上げたら、警察に――」
言葉の途中、今度は平手が、頬を弾いた。
「キャッ！」

響子は、床の上に吹き飛ばされた。それほどに、凄まじい力を持つ一撃であったのだ。
立つ間も、なかった。
克也の足が、響子の顔の前に、迫っていた。
だが、克也がそこまでするなど、何故、響子に知り得たであろうか。
ガツっ、と鈍い音が、部屋に響いた。克也の靴が、響子の顔を蹴り上げたのだ。
声を上げる間もなく、続いて、顔を踏みにじられる。
「ひっ……やめ……」
ガツっ、ガツっ、と何度も、靴が顔を踏み潰す。
痛いのか、痺れているのかさえも、今の響子には、判らなかった。ただ、鼻が熱く、顔が酷く歪んでいるような気がしていた。
とてつもない恐怖が、体中を支配していた。
「あーあ、ひどい顔だな。こんな女に惚れてたなんて、笑い話にもなりゃしない」
グチャグチャに潰した響子の顔を覗き込みながら、克也が愉しそうに、唇を歪めた。
無表情なその笑いは、この部屋の壁が笑っているようにも、見えた。――いや、見えていたのだろうか。この暗い部屋の中で。
響子の顔は、血塗れであった。鼻の骨は折れ、唇は、その血で真っ赤に染まっている。歯も、もちろん、折れていた。

「さあ、足を開けよ。魁に喰わせてやったものを、オレも喰ってやるからさ」
「や……やめ……おねが……」
これ以上、何をされるのかも解らず、響子は、もう思い通りに動かすことも出来ない口で、懇願した。
克也の手が、響子の足を、大きく開く。本当に大きく、両足が耳にくっつくほどに。
響子は、声にもならない悲鳴を、上げた。
ゴリ、っという音がして、凄まじい痛みが股関節を駆け抜けた刹那、響子の目の前は白くなっていた。
克也の手が、下着を剥ぎ取り、女の柔らかい部分を、露にする。そして、その部分に顔を近づけ、舌でピチャピチャと舐め始めた。
裂けた部分から滲み出ている血を、舐めているのだ。
だが、もう響子には、何も解らなくなっていた。自分の体が、どんな形になっているのかも、これからどうなって行くのかも。
克也の口が、大きく開いた。
それも、もう響子には見えないものであった……。

act 31

「おい、魁。真弓の旦那、部屋に戻って来ないんだけど、こっちに間違えて運ばれて来てないか？」
少し乱暴にドアを叩き、龍生は、中にいる魁へと、問いかけた。
カチャ、とドアが開き、
「暗くて危ないから、部屋を出て歩き回るな、と言われただろ」
と、冷たい返事が、返って来る。
「いつまで経っても、やな性格」
「人を見て話をするだけだ」
「ムッ」
この暗闇の中でも、以外に、緊張感のない会話である。
「いないのか？」
今さら、と思うような問いかけであった。
「そう言っただろ。あいつのことだから、どこかで迷子になってるか、海に落ちて鮫にでも喰われているか――。ああ、真弓に喰われてるかも知れないな」
龍生の方も、まだそんな冗談を口に出来る余裕があったのだ――少なくとも、魁はその時、そう思っていた。
だが――。
「本当は……怖いのさ。――情けないだろ？　あの霧のことが、どうしても頭から離れなくて……な」
龍生は言った。
正直な人間なのだ、彼は、学生時代から。
そして、魁も口にこそしないものの、龍生と同じ思いであった。
薄暗い部屋の中に一人でいると、どうしても、あの霧のことが頭にチラつき、じっとしていられなくなってしまうのだ。
一人なのは、修一が戻って来ていない龍生だけでなく、同室の克也がいない魁も、また、同じである。

それに、龍生の話では、克也もこの船に乗っているらしいが、一向に部屋には姿を見せず、未だ、行方も判っていないのだ。
「何か、気味悪くないか？　外はいつまで経っても明るくならないし、船の中は静かなままだし――。この季節は、太陽もあっと言う間に昇るはずだろ？」
「……。雲がかかって暗いだけさ。三十にもなって、怪談はやめてくれ」
「……そうだな」
龍生は言った。
もちろん、心から納得した訳では、ないだろう。魁にしても、普通ではないものを感じていたのだ。
だが、それを口に出していまうことが、怖かった。
「響子の部屋を見に行ってみよう。あの旦那、気が弱そうだったから、真弓のところに甘えに行っているかも知れない」
「もしくは、この機会に、真弓がおまえのところへ行かないか、見張りに？」
「――三十にもなったら、少しは考えてから喋るものだ。そうすれば、一言多いそのクセも直るだろう」
二人は、龍生がどこからかくすねて来た懐中電灯を手に、響子と真弓の部屋へと、足を向けた。
やることが出来て安心したのか、龍生も、さっきの軽口と同じように、随分、表情を緩めている。
だが――。
「なあ、魁、あの霧……。いや、何でもない」
気分が軽くなっても、あの霧の話はしたくないのだろう。龍生は途中で、言葉を止めた。
そして、龍生が呑み込んでしまった言葉の先は、魁にも何となく解るような気が、していた。
多分、同じことを考えていたのだ。この船の停電も、あの霧のせいではないのか、と。

もちろん、そんな馬鹿げたことなど、あるはずがないだろう。第一、船が停電になったのは、あの霧が消えて、随分、経ってからのことなのだ。そして、たかが霧で、船が停電してしまうはずもない。――いや、魁も龍生も、霧に詳しい訳ではないが、霧が出たせいで停電した、などという話は、聞いたこともない。

それでも――。

act 32

それでも、その馬鹿な考えを、どうしても否定することが出来なかったのだ。あの霧を見た者にしか解らないだろうが、蒼く仄光るあの霧には、何が起こっても不思議ではない、そんな恐怖が染み付いていた。

「真弓？」

部屋の前に来て、魁は、ノックと共に、声をかけた。

「誰もいないのかな」

龍生が言った。

部屋からは何の返事もなく、物音一つ、しない。

「響子？　真弓？」

魁はもう一度、声をかけた。そして、ドアのノブに、手をかける。ロックされていなかったのか、ドアは、以外にもすんなりと、開いて来た。

だから、おかしい、と思ったのかも、知れない。――いや、おかしい、と思ったのは、ドアを開けた途端に鼻孔をついた、その匂いのせいであった。妙に生臭い、厭な匂いがしたのだ。

「……何だ、この匂いは？」

鼻と口を押さえて、龍生が言った。

部屋の中には、口の中が錆びて行くような異臭が漂っている。まるで、沼の水に血を混ぜたような、そんな匂いが。

「さあな。少なくとも、響子や真弓が好みそうな匂いじゃない」

「解らないぜ。女、ってのは、訳の解らないものに大金を叩く生き物だからな。脂肪を取る薬とか、肌を白くするクリームとか……少々厭な匂いがしたって、使うに決まってるんだ」

多分、言っている龍生自身、その言葉を信じていた訳では、ないだろう。

魁は、大きくドアを、開け放った。

龍生が、懐中電灯で、部屋を照らす。
「血……？」
いきなり目に飛び込んで来たものは、床やベッド、辺りの壁を染める、赤黒い大きな染みであった。
「冗談……だろ？」
誰が、そんなことをすぐに信じられた、というのだろうか。たとえ、部屋の中に血の匂いが充満していようと、普段、そんなものと縁のない生活をしている人間にとって、目の前にあるものは、すぐに受け入れられるようなものではなかった。
「二人を捜そう。部屋にいないのなら、どこか別の場所にいるはずだ」
魁は、そう言って、翻った。
死体となって、とは、言えなかった。あれだけの血が、一人の人間の体内から流れたものだとすれば、もうその人物が生きているはずもないのだ。
だが、その時――。
「おい、魁！」
と、龍生が、目を瞠って、声を上げた。――――いや、それは、思ったよりもずっと小さい声であったかも、知れない。
そして、その龍生の視線の先には、懐中電灯の光があった。また、何か別のものを照らしているのだ。
窓の下に置かれた、テーブルの上である。
そこには、赤黒い肉の塊が、乗っていた。それが、人間の頭部である、と気づくのに、少し時間がかかった。
女である。ショート・カットの――今は、もう見る影もないが……。
「響子……なのか？」
疑問符がついたのも、信じられなかったからではなく、その顔が、グチャグチャに潰れていて、まだ確信が持てなかったせいであった。
鼻は潰れ、唇は剥がれ……とても正視できるような状態では、な

かったのだ。
「ぐぅっ！」
龍生が口を押さえて、部屋の外へと飛び出した。
魁もまた、込み上げる吐き気に、部屋を出た。
「誰が……誰が、あんな……」
龍生が身を震わせて、呟きを零す。
口には出さなかったが、もしかして、真弓や修一も、どこかで同じ目に遭っているのではないか、という思いが、二人の胸には、あった。
そして、首から下が失くなっているのは、何故なのだろうか、という思いも。
「あれ……玩具じゃないよな？」
最近の玩具は、本当に趣味が悪く、しかも精巧に出来ているのだ。
「……玩具なら、血の匂いはしないさ」
「そうだな……」
これは、現実に起こっていることなのだ。誰が、何のためにしていることなのかは判らないが、イタズラでないことは、はっきりとしている。
「船のスタッフに知らせに行こう。真弓と修一のことも捜してもらった方がいい。克也のことも……」
二人は、懐中電灯の明かりを頼りに、スタッフ・ルームへと歩き始めた。
その背中を、暗い陰から、じっと見送る人物が、いた。
「残念だったな、魁。もうおまえに、響子を喰らうことは出来ない……。もちろん、他の女も……。おまえは、すぐにオレに喰われるんだからな……」

act 33

ホールには、人など一人も、いなかった。パーティの華やかさが消えた今、ただ沈黙だけが、息づいている。

だが、エリアスは確かに、ホールで、船の故障についての説明会がある、と言っていたのだ。

それなのに、人は一人もいない。

また、オーギュストを困らせるために、そんな嘘をついた、というのだろうか。――いや、エリアスはあの時、こう言ってはいなかったか。

シグルドおじさまが、と……。

嘘をついたのは、エリアスではないのだ。シグルドが、エリアスに、そう言ったのだ。

なら、そんな嘘をついた、シグルドの目的とは――。

「まさか――」

オーギュストは、行き当たった考えに、目を瞠った。

シグルドも、すでに〝あれ〟に変わっているかも、知れないのだ。――いや、変わっていないにしても、嘘をつくからには、何らかの目的があったとしか、思えない。たとえば、エリアスを殺して、ガラス王の地位を手に入れる、とか。

オーギュストは、自らの失態にこぶしを握り、すぐにホールを飛び出した。

こんな状況の時に、エリアスを他の人間に預けたりしてはならなかったのだ。誰が〝あれ〟に変わっているかも判らない、というのに――。身内だから、ということだけで、シグルドには、疑いもかけていなかった。彼にしても、あの霧の中、デッキに出ていた可能性はあったのだ。

それに、パーティ会場では見かけなかったシグルドが、その間どこにいたのか、疑問を持って当然であった。いくら、思いがけない

ことが起こった後で、冷静さを欠いていたとはいえ――。
あの部屋は、ホールから一番、離れている。バーグマンが、エリアスがゆっくり休めるように、と気を遣ってくれたのだ。そこで何が起こっていようと、オーギュストの耳には入らなかっただろう。シグルドが、エリアスに襲い掛かっていても……。
「エリアス様……」
彼を、最後のガラス王にしてはならないのだ。亡きガラス王の遺言、というだけでなく――。
もっとも、オーギュストも最初は、エリアスの秘書となったことを、後悔していた。いくらガラス王の遺言とはいえ、あんな年端もいかない少年の秘書になるなど、誰もが喜びはしなかっただろう。加えて、エリアスは、いつまで経っても、オーギュストに心を開こうとはせず、あの調子なのだ。頑ななまでに心を閉ざし、誰一人として信用せず……。
だが――。
だが、彼をそんな少年にしてしまったのは、周りの大人たちではないのか。両親も祖父も、幼くして亡くし、その度に、遺産の話を持ち出す親戚たちや、事業経営のことを持ち出す取締役たち――。彼は、誰よりも哀しい少年なのだ。
早く大人になり過ぎてしまった子供は、何より、哀しい。見ている方が、辛くなるほどに……。
彼が、周囲の人間全てに、猜疑心を持つのは当然のことなのだ。そうしなければ、自分の身も、祖母の身も守れはしなかったのだから。
オーギュストにしても、亡きガラス王の死に、疑問を持っていなかった訳では、ない。あの事故のことも、いろいろと調べてみたが、どうしても、証拠と呼べるものが見つからなかったのだ。
犯人は――犯人ではないか、と思える人物は、いる。老舗の名を、あっさりと地に堕とされ、腹を立てている男なら、ダールクビストのガラス王国を崩壊させようと考えても、何の不思議もないだろう。

エリアスの両親の事故は、本当にただの事故であったのかも知れないが、亡きガラス王の事故は、あっさりと片付けてしまうには、―あまりにも当たり前過ぎる事故であったのだ。

ヘリをよく利用するダールクビストが、そのヘリで死ぬなど……。

たとえば、いつも車を利用している人間が、たまたま利用したヘリで事故に遭う、というのなら、不運な事故、として、片付けることが出来ただろう。

だが、いつも利用していたヘリで事故に遭う、というのは、どうしても疑問が残るのだ。必ず利用する、と判っているものになら、誰もが、それに、細工が出来たのではないか、と――。たまにしか利用しないものには、細工が出来なくでも、いつも利用するものなら、容易く細工が出来たのでは、と……。

しかも、オーギュストが、ガラス業界の老舗、バーレンの不正を調べている間に――ダールクビストの側を離れている間に、起こるなど……。

不意に、目の前に人影が立った。

act 34

マルセ――ではない。今日のパーティに招かれていた、客人（ゲスト）の一人である。

周囲には、生臭い匂いが、立ち込めていた。

半分、禿げ上がった頭に、申し訳程度に生えている毛が、じっとりと濡れるように、張り付いている。

オーギュストは、ハッ、と身を縮めた。

「やあ、オーギュスト。ガラス王国は、相変わらず、順調そうじゃないか。全く、羨ましい限りだよ。うちなど、業績不振が続いて、苦しい限りだからね。こうしてパーティに招（よ）ばれれば、うちもパーティを開かない訳にはいかない。莫大な金がかかっても、ね。見栄というものがある。それに、あの会社は危ない、などとは言われたくないからね。――まあ、君のように、羽振りのいい企業の、会長秘書をしている人間には、解らんだろうが」

タキシード姿の、禿げ上がった紳士は、生暖かい笑顔で、愚痴を零した。

しかし、もうそんなことなど、どうでもいいような、平坦な口調である。

「……霧に濡れましたか？」

オーギュストは訊いた。

「霧？　ああ、あれは不気味だった。酔いを醒まそうと思ってデッキに出たら、あっと言う間に、あの霧に取り囲まれて――。身動きも取れなくなってしまったよ。――こう、ポゥ、と蒼白く光る奇妙な霧で……。酒に酔っているせいで、そう見えるのかと思っていたが、あの霧は、確かに自分で発光していたよ」

やはり、あの霧が、人間を別のものへと変えているのだ。あっと言う間に、辺りの全てを喰い尽くしてしまった、あの霧が、人間をも、その霧のように変え、食欲だけを持つ生き物へと――他の欲望

や感情も、全て食欲に変える生き物に、変えている。
もちろん、そんなことを他人に話しても、笑い飛ばされるだけだろうが。
だが――。
だが、エリアスなら、笑わずに聞いてくれるのではないだろうか。
あの霧を共に見ていた、エリアスなら。
「ガラス王国の人間を、全て喰い尽くしてしまったら、きっと、ガラスの城は崩壊するだろうねぇ……。いや、順調な利益を上げている企業の人間を、全て喰い尽くしてしまえば――」
カッ、と紳士の口が、大きく開いた。
顔中が口になったのではないか、と思えるような、形相であった。
そして、オーギュストは逃げなかった。もちろん、マルセ夫人の時のように、手加減をする積もりも、なかった。
早く、エリアスの元へと、戻らなくてはならないのだ……。

ベッドに腰掛け、エリアスは、コルト・パイソンのシリンダーに、抜き取った銃弾を、詰め直していた。
見様見真似で覚えたことではなく、オーギュストに対抗するために覚えたことであるから、その手つきも、手慣れている。
「そんなもの、君に扱えるのかい？」
シグルドが、からかうように、エリアスの手元を覗き込んだ。
生臭い息が、顔にかかる。
エリアスは、それに顔を顰めながら、
「〇．五六秒あれば、三発撃てる」
と、小馬鹿にするように、言葉を返した。
だが、シグルドは、
「君が？　それとも、オーギュストが？」
「……」

「君には無理だよ。オーギュストも、こんなものを小さい子供に持たせるなんて、何を考えているんだか――。かしてごらん、ぼくが持っていてあげよう。君には危険過ぎる」
シグルドの手が、銃弾を詰め終えた銃へと、優しく伸びた。と同時に、エリアスは、ベッドを飛び降り、壁の方へと翻った。
キッ、とシグルドを睨みつけ、パイソンのグリップを、握り締める。
シグルドの面が、きつく変わった。――いや、当然、きつく変わるだろう、と思っていたのだ。
だが、シグルドは、不機嫌な顔もせず、
「やれやれ、相変わらずだな。ぼくは君に、徹底的に嫌われているらしい」
と、平坦な口調で、肩を竦めた。
だが、怒りを見せない今のシグルドの方が、すぐにカッとなるシグルドよりも、ずっと恐ろしいものではなかっただろうか。

act 35

「……ぼくは、オーギュストのところへ行って来る。あなたは、ここで待っているといい。――それに、暇なら、バス・ルームで歯でも磨いて来た方がいいんじゃないのか？　死人だって、そんなに臭い口をしていない」

エリアスは、プイ、と顔を背け、ドアの方へと、足を向けた。

シグルドの表情が、見る間に変わった。

だが、それも怒りを表すものではなく、心底愉しげな――それでいて、無表情としか言いようのない、不気味さを増幅させるものであった。

「本当に、気の強い子だ……。子供と年寄りは、頑固で仕方がない」

と、生臭い息を吐いて、クックッ、と笑う。

シグルドの足は、エリアスの背後へと、そろり、そろり、と近づいていた。

エリアスは、それを気にせず、ドアの鍵を、解除した。

刹那であった。

ドアが、何の前触れもなく、外からの力に、開け放たれた。

内開きのドアである。当然、ドアの前に立っていたエリアスも、その勢いと衝撃に、床の上へと跳ね飛ばされた。

「く――っ！」

一瞬、何が起こったのか、エリアスには、解らなかった。ただ、目の前が白くなるような痛みが走り、衝撃を受けた部分が、瞬く間に痺れ出したのだ。

手の中の銃が、床の上をカラカラと滑った。

もちろん、エリアスには、それを気にする余裕もなかった。

部屋へと、人影が、入って来た。

しかし、一体、いつの間に、部屋の前に立っていた、というのだろうか。廊下には、足音一つ響いていなかったというのに。

エリアスは、痛みを堪えながら体を起こし、部屋へ入って来た人物を、茫と見上げた。
女性である。しかも、全裸で、胸や鳩尾部分には、殴られたようなアザが残っている。額も割れ、そこから血が滲み出していた。
足音が廊下に響かなかったのも、その婦人が裸足で、靴を履いていなかったからなのだろう。
「フリュ・バーレン……？」
エリアスは、あまりにも思いがけないマルセの姿に、呆然と瞳を見開いた。
今、目の前にいる婦人が、あのパーティ会場で見た貴婦人と同一人物であるとは、エリアスにはとても思えなかった。
髪は乱れ、気味の悪い薄ら笑いすら、浮かべている。
「男……。男なんて……いなくなればいいのよ……」
マルセは言った。
笑みのままの言葉であることが、さっきのシグルドと同様、新なる気味の悪さを、もたらしていた。
「フリュ――」
エリアスが、体を起こそうとした時であった。不意に、後ろから腕が巻き付き、がっしりと体を拘束された。
湿りを帯びた服が、エリアスを羽交い締めにして、抱え上げる。
「何を――。放せ！　放せよ！」
エリアスは、手足をバタつかせて、抗った。
だが、シグルドの力は、異様なほどに強く、そんなことでは揺るぎもしなかった。もともと、大人の力と、子供の力、という違いがあったのだ。そして、今は、また別の力も加わっている――そんな気が、した。
「実に、うまそうな匂いがする……」
クン、とエリアスの匂いを嗅いで、シグルドが言った。
「え……？」
エリアスは、そのシグルドの言葉に、戸惑った。

「フリュ、あんたも一緒に、食べるかい？　見たところ、腹が減っているようだし」
シグルドは、変わらずマルセに、話しかけている。
マルセは、口から涎を垂らし、一歩、足を踏み出した。
また、一歩、一歩、エリアスの前へと、近づいて来る。
シグルドの口からも涎が垂れているのか、エリアスの髪に、生臭い唾液が糸を引いて、伝い落ちた。
「や……やめ……」
エリアスは、目の前の夫人を、哀しく見つめた。
パーティ会場で見た時は、優しそうな夫人、だったのだ。あまり幸福そうではなかったが、こんな狂気は宿していなかった。写真でしか見たことのない母親と同じように、ブロンドの髪をきれいに結い上げ、エリアスに微笑み返してくれたのだ。
今、それと同じ瞳で、それでも違う笑みで、エリアスを喰らおうと近づいて来ている。
「フリュ・バーレン……」
「バーレン？　ああ、そうね。あの人も、食べに行かなくてはならないわ。この食事を片付けてから……」
マルセは、舌なめずりをしながら、愉しげに言った。
彼女は、もう、人間ではないのだ。オーギュストが言っていたように、もう別のものになっている。
だが、何故――。

act 36

何故、あの夫人が、こんな風に変わってしまった、というのだろうか。――いや、彼女だけでなく、シグルドの方も。

「あんたみたいないい女と食事が出来るなんて、最高だね。頭でも、足でも、好きな方から食べていいぜ」

ニタニタと笑いながら、シグルドが言った。

「ありがとう……」

カッ、とマルセの口が、大きく開いた。

凄まじい匂いが、エリアスの顔に、降りかかる。

エリアスは、ギュっ、と目を瞑った。

バキバキバキ――っ、と骨まで咬み砕くような、恐ろしい音が、響き渡った。

その音は、エリアスの耳にも、はっきりと聞こえていた。

「うわあああああ――――――っ！」

絶叫、としか呼べない叫びが、上がった。

ボトボト――と、エリアスの髪に、大量の血が降りかかる。

輝かしいばかりの金髪は、あっと言う間に真紅の血に塗り替えられた。

同時に、エリアスの体は、床の上に落ちていた。シグルドの腕が、離れたのだ。

エリアスは、その衝撃に呻きを上げたが、傍らでは、もっと凄まじい悲鳴が上がっていた。

シグルドが床の上にのたうちながら、頭を抱えて転げ回っている。

頭の右側は、齧り取られたように――いや、事実、齧り取られて、欠けていた。

マルセは、バリバリと口の中の肉骨を咀嚼し、ゴクリと喉に通している。

そして、再び、転げ回るシグルドへと、襲い掛かった。

「フリュ……？」
エリアスは、あまりに残酷な光景に――そして、哀しい光景に、動けないまま、呆然としていた。
人間を喰べている夫人を見ても、不思議と、気味の悪さは、感じなかった。
そんなことより、あの貴婦人が、こんな風に変わってしまったことに、言いようのない憫れみを感じていたのだ。
そんな時、また、ドアの外に足音が響き渡り、エリアスは、ハッ、として音の方を振り返った。
「エリアス様！」
部屋へと飛び込んで来たのは、オーギュストであった。
「エリアス様……ご無事で……」
と、エリアスの側へと歩み寄り、床に転がるままの銃を、拾い上げる。
その手は、慣れた手つきで、シグルドを喰らうマルセの方へと、狙いを定めた。
「撃つな――っ！」
何故、そんなことを言ってしまったのだろうか。気がついた時には、エリアスはそう言って、オーギュストの腕にしがみついていた。
「……エリアス様？」
「か……さま……。かーさまが……」
「……」
「悪くない……。その人……悪く……」
碧い瞳には、祖父の死以来、見せたことのない涙まで、浮かんでいた。
オーギュストはゆっくりと、銃口を下げた。
「……参りましょう、エリアス様。ここは危険です」
そう言って、泣きじゃくるエリアスを抱え上げ、ドアの向こうへと翻る。
幼子のように抱き上げられるそのことにも、エリアスは何も言わ

なかった。ただ、オーギュストの肩に抱きついていた……。

act 37

デッキには、全く、と言っていいほど、風がなかった。
船内の照明が消えてから、船も動いていないように、思える。――いや、事実、動いてはいないのだろう。
空は、一向に明ける様子もなく、黒い雲が、低く重たげに、のしかかっている。
「こんなところまで連れて来て、一体、何だって言うのよ。話があるなら、部屋ですればいいじゃない」
真弓は、不機嫌を露に顔を顰め、夫の修一を睨みつけた。
停電のために遊べなくなって、余計に気分が苛立っていたのだ。
修一の唇が、フッ、と歪んだ。嘲笑うかのような表情、である。
「用？　ぼくが、君に？　クックッ……。食べ物に、どんな用がある、っていうんだい？」
と、生臭い息で笑いながら、皮肉げに言う。
「食べ物？」
真弓は、その言葉に、眉を寄せた。
「ああ。ぼくは今、君を喰べたくて仕方がないんだ……」
普通なら、甘い囁き、とも言える言葉であっただろう。愛の冷めていない学生時代に、零れ落ちた言葉なら。
「バッカじゃないの？　デッキでスリルを楽しみながらやろう、ってわけ？　アダルト・ビデオの見過ぎじゃないの」
「ビデオじゃ、こんなことはやらなかったさ……」
修一の腕が、真弓を、デッキの隅へと押し付けた。
「やめ――っ」
「もう命令されるのは、たくさんだ。君にも、上司にも……。人を道具みたいにこき使って、威張り散らして……」
その修一の言葉の意味は、真弓にもすぐに、理解できた。
怒っているのだ。表情は、不思議なほどに変わってはいないが。

だが、修一が怒ったところで、真弓には怖くもない。少し甘えてやれば、今、自分が怒ったことさえ後悔して、逆に真弓に気を遣ってくれるような男、なのだ。
「いいわよ。ここでやりましょうよ。私、あなたがそう言ってくれるんじゃないかと思って、期待してついて来たのよ」
修一の首に腕を回し、真弓は、囁くような声で、そう言った。
修一は黙って、そこにいる。
もう、さっき怒ったことを、後悔し始めているのだろう。声も出せないほどに――。少なくとも、真弓は、そう思っていた。
「早くして……。お願い。もう待てないわ。体が疼いて……」
と、自分から、胸と腰を、すり寄せて行く。
修一の手が、真弓の髪を、ゆっくりと撫でた。
生臭い匂いが、した。
多分、海の潮の匂いだろう。
真弓は、唇を重ねるように、顎を高く持ち上げた。
髪を撫でる修一の手に、力が入ったのは、その時であった。グッ、と真弓の髪を握り締め、柵の向こう――海の方へと、引き倒す。
「キャア――っ！」
上半身から落ちる体に、真弓は、信じられない思いで、叫びを上げた。
だが、さらに信じられないことが、その後、起こった。真弓の体が全て落ちる前に、修一が足をつかんで、落下を止めたのだ。
もちろん、それだけのことなら、信じられただろう。夫が妻を助けるのは、当然なのだ。
だが、修一は、途中まで引き上げた膝を柵にかけただけで、真弓を引き上げようとは、しなかった。
「何してるのよ！　早く助けなさいよ！」
真弓は、怒りを露に、怒鳴り散らした。
スカートが捲れ、足も、下着が丸見えの状態に、なっている。
その太ももと、足首に、ロープのようなものが、巻き付いた。ま

るで、柵と足を固定するように、巻き付いたのだ。
「な……っ。やめて！　何をするつもりよ！　今すぐやめないと、承知しないわよ！」
そんな怒りが飛ぶ間も、修一は、細いロープで、真弓の足を縛っている。柵を挟んで、太ももと足首を一くくりに、普段の修一からは思いもかけない手際の良さで、真弓の体を固定して行く。
足を開く形で縛り付けられつけられた真弓は、体を持ち上げることも出来ず、恥ずかしさに唇を噛んでいた。

act 38

「豚の丸焼きみたいで、君にはお似合いだよ」
修一が言った。
真弓は、屈辱と怒りに、頬を染めた。
「あなたなんて、もう離婚よ！　日本へ戻ったら、覚悟しておくといいわ！　早くロープを解きなさいよ」
「いやだね」
「何ですって――」
「豚の丸焼きなら、内臓を取り出さなくちゃならない。体の中に、手を突っ込んでね」
言葉と共に、修一の手が、真弓の下着を剥ぎ取った。引き千切るようにして、肌から剥がし、柔らかい肉の部分を、露にする。
「何をするのよ！　やめて！　お願いだから、やめてちょうだい！
謝るわ。離婚なんかしない。だから――」
「ごめんだね。ぼくはもう、君と別れたいんだ。今日が、永遠の別れの日だよ」
グッ、と修一の手が、下肢の狭間の、葩の中へと、入り込んだ。指ではなく、手、そのものが。葩を裂くのも構わずに、凄まじい力で入り込んだのだ。
「ギャアアア――っ！」
真弓は、その激痛に、叫びを上げた。
「よく鳴く豚だな。そんなに、突っ込まれるのが好きかい？　さんざん、他の男のモノをくわえ込んで来たんだろ？　ぼくが知らないとでも、思っていたのかい？」
「やめ――く……！　ひっ……苦し……。や……め……」
修一の手が、柔らかい肉を引き裂きながら、真弓の体の中へと、食い込んで行く。生暖かい肉の隙間に、湿った息を吐きながら。
「へェ。結構、入るもんだな。まあ、子供が産まれて来るんだから、

不思議じゃないけど」
もう手首も見えないほどに――肘の半ばまで腕を突っ込み、修一は面白そうに、唇を歪めた。
真弓は、白目を剥いて、言葉にならない声を上げていた。
「これが、そうかな」
修一が言った。そして、手のひらにつかんだ柔らかいものを、もぎ取るようにして、引き出した。
ゴボっ、と真弓が口から、血を吐いた。
叫びを上げたかも知れないが、それは、修一の耳には届かなかった。
「いただきます」
それも、真弓へ向けての言葉ではなく、もぎ取ったものへ向けての、言葉であった。
真弓は涙を零し、痛みと苦しみに血を吐きながら、その夫の言葉を――いつもと変わらない夫の言葉を、聞いていた……。

act 39

船の乗務員室には、誰もいなかった。
床は血の海で、凄まじい血臭が、漂っている。
死体は、なかった。今度は、首さえ――。
「これは……。これは、一体、どういうことなんだ……」
目の前の凄惨な光景に、龍生は、蒼冷めた面で、呟きを零した。
「……武器になるようなものを、探した方がいいかも知れない。この船の中には、何かがいるんだ」
「化け物かい？」
茶化すような龍生の言葉にも、魁は笑み一つ、零さなかった。
誰か、ではなく、何かが、と言った自分の言葉を、間違っているとは、思っていなかったのだ。
だが、龍生は――。
「何で、いつもそうやって澄ました顔をしてるんだよ！　俺は、おまえのその顔が気に食わないんだ！コンクールで入賞した時も、高名な画家に褒められた時も、同じような顔をしやがって！　まるで、自分だけは、そんなことで喜ぶようなレベルの人間じゃない、とでも言いたげに――っ」
「……」
「そうなんだろ？　おまえは何でも出来て、褒められることが当然で、賞を取るのも当然で――。いつだって、俺たちを見下して来たんだ。その取り澄ました顔で――。何か言ってみろよ！　言えよ、魁！」
龍生は、食いつくように、魁の胸倉につかみ掛かった。
苛立っているのだ。訳の解らないことが続き、恐怖が込み上げ――そんな中、魁が一向に取り乱さないことに。
「……そういう顔しか、出来ないのさ」
魁は言った。

「え？」
「入選しなくなった時が怖くて……。その時も、同じ顔でいられるように、と……。入選しなくても、俺には関係ないことなんだ、と思われるようにしようと……。そんなことを思いながら、絵を描き続けて……ついに、描けなくなった」
「……魁？」
「絵を描くことが、苦痛でしかなくなったんだ。いつも、他人の言葉が気になるようになって……。だから、人一倍、努力をして、技術だけは、最高になった。それでも……。いつの間にか、俺はノイローゼになっていた。もう、人の目を気にせずに描くことなど出来なくなっていた。いつも、人に褒めてもらえるか、貶されるか――。そればかりを考えていた。好きな絵を描けなくなっていたんだ。――一〇〇点満点の絵なら、いつだって描けたさ。非の打ち所のない、うまい絵なら――。だが、一二〇点の絵も、五〇点の絵も描けなくなっていたんだ。――そんな俺の苦しみが、おまえに解るというのか？　入選しても、次の絵のことが気になって、喜べもしなかった俺の心が――。人に見向きもされなくなることに脅えていた、俺の気持ちが！」
なまじ、人よりも少し、才能と技術があっただけに、その重みに、いつも歪められて生きて来たのだ。
誰よりも脅えて、誰よりも臆病に。
その傷つきやすい心を守るものが、いつも変わらない顔であった。
入選して当然、と誰からも思われている魁が、自分の心を守る方法は、それしか、なかった。
そして、魁が描きたいものは、人に褒めてもらえるような、一〇〇点満点の絵では、なかった。
だが、それに気づいた時、魁はもう、五〇点の絵など、描けなくなっていた……。
「……みっともないな」
龍生が言った。

魁は、フッ、と苦笑を零した。
「今のは、聞かなかったことにしてやるよ。おまえは、何でも軽くやってのける、秋月魁なんだからな」
「助かるよ」
二人は、もういつの顔に、戻っていた。
同情もしない龍生の言葉は、魁には、何より、ありがたいものであった。本当に、みっともない挫折であったのだから。
「クラブに、バンドが使う、スタンド・マイクがあったよな？　あれなんか、武器にどうだい？　化け物が出ても、長いから近づかずに殴れる」
「賢明な方法だな」
「なら、行こう」
二人は、クラブの方へと、翻った。
暗い中を、懐中電灯を照らしながら、慎重に進む。
「他の乗客、どうしてると思う？」
「自分の部屋で寝てるさ」
少なくとも今は、そう思っている方が、気が楽だった。二〇〇〇人を越える乗客の誰かが、狂った殺人鬼なのだ、と考えるよりは。
何しろ、その殺人鬼を見つけたところで、どうすればいいのかも、判らないのだ。
取り敢えず、今、はっきりとしていることは、姿の見当たらない三人――真弓と修一、克也を捜し、その無事を確認すること――。できれば、殺人鬼に出会うことなく。
「待て」
突然、魁が、隣を歩く龍生を、静かに制した。
「どうし――」
「足音だ。誰かが近づいて来る」
暗闇と、船内の静けさは、少し耳を澄ますだけで、その足音を容易に、聞き取らせた。――いや、相手が、足音を消すつもりがなかったのかも、知れない。

コツ……コツ……コツ……と、単調なリズムで、近づいて来る。
懐中電灯も何も持っていない、というのに、奇妙なほど、同じ歩調で歩いて来るのだ。もちろん、この大型客船の中、誰が出歩いていようと、不思議ではないのだが。
それでも、今の二人には、緊張せざるを得ない、状況であった。
蒼い霧、停電、響子の首、血の海……と、そういったものを見た後でなければ、人が歩いていることの方が、当然、と思えたであろう。
だが、今は――。
何か、生臭い臭いがしていた。
龍生が、ゆっくりと懐中電灯を、持ち上げた。
そこには――。

act 40

「克也……」
龍生が、言った。
明かりに照らし出された人物は、確かに、ヘルシンキのカフェから行方不明になっていた、小島克也であった。
「やあ」
克也が、少し照れるような顔で、片手を上げた。
「おまえ……やっぱり、船に乗ってたんだな。こうデカイ船じゃ、捜し回るのも一苦労で、どうなることかと思ってたよ。――今までどこにいたんだ？」
龍生は、そう言って、克也の前へと、足を進めた。
魁も、当然、後に続いた。
何しろ、懐中電灯の数は、一つ、である。
「なんとなく、出て行き辛くて……。響子にフラれたことは、聞いただろ？」
「え、あ、いや……まあ……」
聞いた、というか、壊れたレコードのように、何度もその言葉が飛び交っていた、というか――言いにくいところである。
「克也、その響子だが……殺されたんだ」
魁は、言った。
「……殺された？」
克也の両目が、大きく開いた。
「ああ。信じられないだろうが、俺たちが部屋に行った時には、もう死んでいた。首だけになって、な」
「首……」
「犯人は、この船内にいるはずなんだ。――それに、ふに落ちないこともある。部屋の中には、響子の首だけしかなかったのに、廊下には血の跡も残っていなかった。普通、担いで胴体を運び出すにし

ても、引きずって行くにしても、血の跡が残るものだろう？　毛布にくるんで行ったのなら、部屋の毛布がなくなっているはずだ。それなのに、響子の部屋の毛布は、きちんとあった。自分の部屋の毛布を、わざわざ取りに戻ったのかも知れないが……そんな、自分が犯人だ、と疑われるようなことをするとは思えない。――解らないことばかりだ」

魁は、出来るだけ事務的な口調で、話を続けた。

そうした方がいい、と思ったのだ。

人は、悪い知らせほど、取り乱して詳しく聞きたがる。それなら、最初から事務的に、全てを話してやった方がいい、と。

「なら、犯人は、響子の胴体を喰べた、とでも言うのかい？」

克也が言った。

魁は――龍生も、あまりに思いがけないその言葉に、驚きを通り越して、戸惑った。

人間が、人間を喰らうなど――しかも、骨も残さず食べるなど、普通の人間には、考えられることではなかったのだ。何日もかけて、骨もすり潰して、というのなら、まだ解るが、たった数時間の内に、など。

「ば、馬鹿なことを言うなよっ。殺されたのは、響子だけじゃないんだ。船のスタッフも何人か、殺されてるんだ。こっちは、首もなかったけどな」

龍生が言った。

「スタッフ？」

克也の表情が、驚きとはまた違った、訝しむような形に、刹那、変わった。

恐らく、仲間の死だけでなく、関係のない人間まで殺されていることに、感情的な驚きよりも、殺人の動機の方が気になったのだろう、と、魁も龍生も思っていた。

もし、殺されていたのが、響子一人なら――そして、首だけが残っている、という異常な殺し方でなければ、魁も龍生も、克也が犯

人なのではないか、と思っていたに違いない。響子にフラれた怒りで、カッとなって、ということは、充分に考えられるのだ。
だが、実際には、響子以外の人間も殺され、その殺し方は、カッとなって、というような、突発的な殺意によるものとは、思えないものであった。
手近なもので殴る、とか、つい突き飛ばして、というのなら解るが、響子は酷く顔を潰され、その顔をさらすように、首だけが残されていたのだ。克也に出来る殺し方では、なかった。
「真弓と、その旦那が行方不明なんだ。それで、今、魁と捜しているところなんだけど……」
「オレも一緒に捜すよ。一人でいる気がしない」
克也は言った。
明かりに照らし出された克也の髪は、少し湿っているような感じがした。長髪だけに、濡れているのがよく判るのだ。
それに、さっきから漂っている、生臭い匂い――それは、どこから流れて来ているのだろうか。――いや、きっと、あの血の海で嗅いだ凄まじい匂いが、まだ鼻孔に染み付いているのだろう。
二人は、それ以上気にすることもなく、克也と共に、クラブの方へと翻った。
「あいつら、これだけ人に心配させて、夫婦でじゃれあってた、なんて言ったら、旅費を全部、持たせてやるからな」
相変わらず、社長令嬢との結婚が決まっている、とは思えないセコい台詞を、龍生は目一杯、不満げに、吐き出した……。

act 41

パーティの客は、所謂、ホールとは別の、いくつかのソファや椅子を並べた、サロンの方へと、集まっていた。
船が動き出さない限り、帰ることも出来ず、皆、一様に、苛立った様子を浮かべている。
文句を言う者、自分がどれほど忙しい身であるかを、まくし立てる者、周りの人間に当たり散らす者……じっと黙っている者は、数えるほどしか、いない。
見当たらない客は、他の部屋にいるのだろう。
「――で、ぼくを、こんなところに置いて行く、っていうのかい、オーギュスト？」
エリアスは、皮肉な口調で、秘書を見上げた。
「夫人も、大勢の人間を一度に喰い殺すことは出来ないでしょうから、ここが一番、安全だと思いますが――誰が、ああなっているか判らない以上、私と一緒にいていただいた方が……」
もう、二度と、目の届かないところに、エリアスを残して行く訳にはいかないのだ。
「なら、行こう、医務室に行って、まず最初に、傷の手当だ」
二人は、医務室の方へと、足を向けた。
今は、クルーザーの機能が回復するまで、生き延びることの方が重要である。
そして、今、このクルーザーの中で起こっていることを、他の客たちに説明しても、余計な混乱を与えるだけだろう。それどころか、誰一人、そんなことなど信じようとしないかも、知れない。
「痛むか？」
無事、医務室まで辿り着き、エリアスは、上着とシャツを脱ぐオーギュストに、肩の咬み傷の具合を、問いかけた。
鍛え抜かれた体躯の肩を染める赤い血は、今も、傷口をじわじわ

と濡らしている。
「大丈夫です」
オーギュストは、言った。そして、エリアスが懐中電灯で照らす中、器用な手つきで、処置を始めた。
傷口を消毒し、血止めの包帯をきつく巻くだけの、応急処置である。
「それは？」
オーギュストが手にするアンプルを見て、エリアスは訊いた。
「モルヒネです」
「痛まないんじゃなかったのか？」
苦笑のような笑みが、零れ落ちた。
「ぼくに嘘をつくとは、いい秘書だな」
それは、非難ではなく、からかいにも似た言葉であっただろう。
そんな会話の中、オーギュストは痛み止めのモルヒネを打ち、処置を終えた。
「――で、あれは、どういうことなんだ？」
エリアスは訊いた。
オーギュストには、何か心当たりがあるようであっただが、エリアスには、マルセやシグルドがあんな風になってしまった理由など、知りようもなかったのだ。
「霧です」
オーギュストは言った。
「霧？　あの、蒼く光ってた、気味の悪い霧のことか？」
「はい。あの霧のせいで、フリュ・マルセや、シグルド様が、おかしくなられたのではないか、と……」
誰に笑い飛ばされようと、もうそれを否定することなど、オーギュストには、出来なかった。
そして、あの霧なら、人間をあんな風に変えてしまっても、おかしくはなかったのだ。
あの三人は、霧が出ている時に、デッキに出たか何かして、霧に

濡れたに違いないのだ。あの、ゾッとするような、蒼く仄光る霧に……。

act 42

「あの霧を実際に見ていなければ、おまえの言葉なんか信じなかっただろうな」
話を聞き終え、エリアスは言った。
いくら子供といっても、もうとっくに、サンタクロースも信じていない年なのだ。たかが霧が、人間を化け物に変えてしまう、など、普通なら信じもしなかっただろう。
幼いエリアスでさえ、そうなのだから、あの霧を見ていない大人なら、絶対に信じはしなかったに、違いない。
「恐らく、船の故障も、あの霧のせいかと――。詳しいことは判りませんが、あの霧に濡れた人間は、食欲だけが残る化け物に――いえ、全ての感情や欲望が、食欲という形に変わって現れる化け物になるのではないか、と」
まるで、貪欲な霧が、辺りのもの全てを、喰い尽くして行ってしまうように。
「あれは本当に、霧だったのか？　ロシアが開発した生物兵器とか、海に沈んでる何かが、化学反応を引き起こすような物質と結び付いて、霧状の毒素を発生させた、とか――。そう考えた方が、納得できるんじゃないのか？」
子供のものとは思えない言葉を、エリアスは、大人の眼差しで、口にした。
「我々はそれで納得できても、国のお偉方は納得しないでしょう。バルト海に有害物質が沈んでいる、となれば、バルト海を囲む各国には、大きな問題です。バルト海に船を出して、海外からの客をつかんでいる企業も、少なくはありませんから」
「……なら、無事に帰れたとしても、誰も相手にしてくれそうにないな」
「以後、船上パーティには、出席なさらない方が宜しいかと」

「出席する気もしないよ」
それは、紛れもない本心であっただろう。
「何か役に立ちそうなものは？」
医務室を見渡して、エリアスは訊いた。
「機械類は確かめてみないと判りませんが、器具を消毒する時に使う硝酸がありますから、ダイナマイトくらいなら作れるかと――。問題は――」
「その爆発音が届く範囲に、人がいるかどうか、か」
「はい」
「一応、試せるものは、試してみよう。松明（たいまつ）もいる。デッキを明るくしておけば、誰かがその明かりに気づいてくれるかも知れない。懐中電灯の電池だって、いつまで持つか判らないからな」
「かしこまりました」
二人は、孤立した、船、という世界の中で、生き残るための準備を、始めた。
その頃には、もう、船内のロウソクも切れていた。
そして、凄まじい悲鳴が響き渡ったのは、船内のロウソクが切れて、十分と経たない内であった。
「オーギュスト――」
「様子を見て参ります」
銃を片手に、オーギュストは、ドアの方へと翻った。
もちろん、エリアスも、後に続く。
「あの夫人……殺すのか？」
「……。いえ。急所を狙うことはしません」
ホッ、としたような空気が、流れた。
それでも、
「ぼくは、ここに残った方がいいか？」
エリアスは訊いた。
「大旦那様の時と、同じ轍を踏むつもりはありません。あなたがお残りになるのなら、私もここへ留まるでしょう」

「なら、行こう」
二人は、悲鳴の聞こえた方へと、駆け出した……。

act 43

そこには、もう、ざわざわと人が集まり始めていた。
サロンと医務室の間の、女性用の化粧室の中である。
そこは、真っ赤な鮮血に染まっていた。
その光景を見た一人の夫人が、さっきの悲鳴を上げたのだ。
しかし、そこには血があるだけで、死体はなく、化け物の姿も、見当たらない。
「これは……。これは一体、どういうことなんだ」
今日のパーティの主催者、バーグマンが、声を震わせて、呆然と言った。
あまりに凄惨な光景に、血の気を失くして、蒼冷めている。
それでも、パーティの主催者として、しなくてはならないことも、心得ているのだろう。スタッフを呼び付け、客たちを宥めながら、サロンへの誘導を始めている。
エリアスと、オーギュストは、そのサロンの入り口近くに立ち、客の髪と服を観察していた。そして、匂いも――。いや、匂いは、これほどの客が犇めいていては、正確には誰が放っているのか判らないため、もっぱら、服や髪の湿り具合を、観察していた。
一人、二人――どんどん客たちが、前を横切る。
整髪剤で髪が湿っているように見えたり、空調も止まってしまっているため、その湿気で汗をかいていたりする者もいたことで、何度か眉を寄せたが、霧に濡れた、と思えるような人物は、いなかった。
「ヘル・バーグマン」
エリアスは、今日の船上パーティの主催者へと、声をかけた。
「ああ、エリアス君。こんなことになって申し訳ない。船の故障に続いて、また、こんな訳の解らないことが――」
「そのことで、少しお話しが。――今、よろしいですか？」

「今はちょっと――」
「大事なことです」
オーギュストを見上げて、エリアスは言った。
バーグマンの視線も、オーギュストへと移る。そして、
「その血は……」
と、オーギュストのダーク・スーツの肩を染める赤黒い染みを見て、目を瞠った。
「騒ぎにしたくありません。懐中電灯を向けないでください」
オーギュストは、言った。
「え、あ、ああ、すまない」
光が遠のき、オーギュストの姿も、影だけになる。
「この部屋は安全です。多分、この暗闇の中、一人でおられる方もないでしょう。――いえ、決して一人で行動しないよう、伝えてください」
「あ、ああ、それは、もちろん――」
「それと、これが一番、大事なことですが、髪や服の湿っている人物、生臭い匂いのする人物には、決して近づかないでください」
「え？」
オーギュストの言葉に、バーグマンの眉が、訝しげに寄った。
「気にかけていてもらうだけで結構です。――船の現在地は判りますか？」
オーギュストは訊いた。
「い、いや、それが、計器も全て狂ってしまっていて……」
船がどこに流されているのかすら、判らないのだ。あの霧は、人間だけでなく、船さえも容易く狂わせている。
「ですが、海流に流されているのなら、見当くらいは」
「私には詳しいことは……。こんなことは初めてで、もうどうしていいのか……」
「……そうですか」
位置も判らず、どこへ流されているのかも判らないのでは、手の

打ちようもない。また誰かが喰い殺されてしまう前に、霧に濡れた人間を見つけて、倒してしまうしか方法はないのだ。
すでに客たちは、パニックを起こし始めている。苛立ちが募ってケンカを始めれば、余計な怪我人も出るだろう。
もちろん、そこまでは、エリアスやオーギュストが構ってやるようなことではなく、もういい年をした大人ばかりなのだから、当人の良識に任せていればいいのだろうが。
「行くぞ、オーギュスト。どっちにしても、火がいる」
二人は、医務室の方へと、翻った。
バタバタと騒がしい足音が近づいて来たのは、その時であった。

act 44

「船です！　船籍はまだ確認できていませんが、大型の客船が近づいて来ます！」
その声に、おおっ、と波のような声が、上がった。
これで助かる――誰もが、そう安堵して、声を上げたのだ。
一人がサロンを飛び出し、デッキへ上がろうとするのを皮切りに、皆が、先を競うようにして、走り出した。
「待ってください！　落ち着いて――。走っては危険です！」
「止まってください！」
その制止の声は、何の役にも立たなかった。
一人として、足を止める者はなく、また、止めようとすれば、後ろから突き飛ばされて、怪我を負った。
「押すなよ！」
「痛い！　打付かって来ないでよ！」
「キャアっ！」
倒れる者、踏み付けられる者、その上に覆い被さって倒れる者――キャビンの中は、人間の醜さを見せつけるように、次々に、自滅の図を書き上げていった。
「エリアス様、こちらへ！」
オーギュストは、小さなエリアスをかばうように腕に抱え、壁沿いに、人並みの中を擦り抜けた。
「……人間っていうのは、たった数時間の暗闇にも耐えられない生き物なんだな」
やっと、人並みの中を脱出すると、エリアスは、冷ややかな眼差しで、吐き捨てた。
だが、それは厭味ではなく、人を憫れむ言葉であっただろう。
二人は医務室に戻り、その窓から、海の向こうに目を凝らした。
「見えるか？」

「いえ……。船らしきものは、何も……」
位置が悪いのか、客船の明かりは、医務室の窓からは、覗けなかった。
「どっちにしろ、これで助か――」
そう言って、部屋の中を振り返った時であった。カッ、と赤く開く口が見え、エリアスは、碧い瞳を見開いた。
「オーギュスト、後ろ！」
生臭い息が、顔にかかった。
人間の頭さえ丸呑みに出来そうな口が、貪欲に食料を求めて、襲い掛かる。
刹那、一発の銃声が、駆け抜けた。
赤い口が、涎を撒き散らしながら、後ろに吹き飛ぶ。
その腹には、真紅の血が、滲んでいた。急所ではないが、放っておけば、出血多量で死ぬだろう。
「……後ろに目でもついているのか、おまえは？」
「いえ。条件反射で、体の方が先に……」
「軍で特種訓練でも受けていたような物言いだな。ロシアから脱出して来て、名前も身分も全て変えてる、って言われても信じられるよ」
フッ、と目を伏せるだけの笑みが、落ちた。
床に倒れているのは、船のスタッフ――航海士であろう。二人が出て行った隙に、この医務室へと入り込み、ベッドの下かどこかに、隠れていたのだ。凄まじい形相で、涎を垂らしながら、悶えている。
「足を狙う余裕が……」
「そんなことをしていれば、ぼくかおまえが食べられていたさ。それに……こんな姿で、人を食べながら生きて行くくらいなら、死なせてやった方がいいのかも知れない……」
あの夫人も……。
何より今は、人を殺すことさえためらってはいられない、異常な状況の中なのだ……。

act 45

「ほら、下の足が外せた。いい鉄パイプの出来上がりだ」
クラブのステージの上のスタンド・マイクを手に、龍生は、邪魔な部分を取り外し、得意げな面貌でそう言った。
もう三十にもなるというのに、男というのは、武器を持つことが楽しいらしい。
「……やっぱり、こいつ、ガキのままかも知れない」
ブンブン、とスタンド・マイクを振り回す龍生を見て、魁は重い頭痛に、頭を抱えた。
その傍らでは、克也が、自分の分のスタンド・マイクを用意し終え、
「魁、オレが懐中電灯を持っていてやるよ。おまえも、自分の分を用意するといい」
と、魁の方へと、手を伸ばした。
魁は、二人がスタンド・マイクを確保する間、ずっと懐中電灯で照らしていたのだ。
「ああ」
と、うなずき、克也の手に、懐中電灯を渡す。
生臭い匂いが鼻孔に触れたが、それを口に出して言うことは、しなかった。まだ、さっきの血の匂いが染み付いているのだ、と思っていたのだ。
スタンド・マイクを逆さにして、床に立たせておくための、足の部分を外し始める。
明かりが消えたのは、その時であった。
「あ、懐中電灯の電池が切れたみたいだ」
暗闇の中で、克也が言った。
その声が、どこか愉しげに聞こえたのは、魁にとってだけ、であっただろうか。

辺りは、自分の手さえ見えない闇に、包まれている。
「少し振ってみたら、しばらく点くんじゃないのか？」
龍生が言った。
普段、コンピューターを相手にしている、とは思えない大雑把な台詞である。
「無理みたいだ」
二、三度、風を切る音を立てて、克也が言った。
足は、魁の背後へと、回っている。
暗闇に目が利かないのは、克也も同じだが、魁のいた場所は、明かりが消える前に、はっきりと確認してあったのだ。もちろん、暗闇の中では、多少、目測も狂うかも知れないが、歩いて数歩のところ、となると、大きく狂うことは、あり得ない。
克也は、魁の後ろに立って、鉄パイプと化した、スタンド・マイクを振り上げた。
ニヤリ、と笑みを浮かべ、同時に腕を、振り下ろす。
ブン、と鉄パイプが、風を切った。
ガツッ、という手応えと共に、
「うあっ！」
と、痛みを告げる呻きが、上がった。
「魁？　どうかしたのか、魁？」
龍生の心配そうな――不安を露にする声が、闇に響いた。
「誰か……誰かが……」
左肩に走った凄まじい痛みに、魁は、訳が解らず、そう言った。
あと少しのズレで、頭を砕かれていたところなのだ。
再び、ブンっ、と風を切る音が、駆け抜けた。
「ぐっ！」
「魁――！」
一体、何が起こっている、というのだろうか。闇しかないステージの上には、恐怖と戸惑いだけが、存在していた。
ブン、ブン――と何度も、鉄パイプを走らせる音が、闇に響く。

もし、まともに頭に喰らおうものなら、それだけで、呆気なく死を迎えていたに、違いない。
「魁！　どうしたんだ？　返事をしろ、魁！」
龍生の声が、広いホールに、谺した。
魁は、手に持つスタンド・マイクを両手で翳し、降りかかる攻撃を、受け止めた。
キーン、と高い音が、跳ね返った。
すでに何カ所も殴られている魁にとっては、その響きさえ、手を痺れさせるものであった。――いや、何カ所にも渡る傷痕を。
背中や足、肩――不意に喰らった攻撃は、痛み、というより、じわじわと腫れ上がって行くような　そんな痺れを、纏っている。
骨にヒビが入っているのかも、知れない。
攻撃は止まずに、続いていた。

act 46

生臭い匂いが、鼻をついた。
その匂いに、魁は戸惑いながら、瞳を揺らした。それは、確かに、今、魁を襲っている人物の息遣いの中から、漂っているのだ。
海の中で腐食した肉のような――それに、血の匂いを混ぜ合わせたような、そんな、何とも言えない、悍ましい匂いが。
だが、一体、誰が、魁を襲っている、というのだろうか。――いや、魁には、その人物が誰であるか、判っていた。今、鉄パイプを振り回しているのが、誰であるのか――。
この暗闇の中、懐中電灯が消えてから、クラブに入って来た人間に、これほど速く、魁を襲えたはずもない。
そして、懐中電灯の電池が切れた、と言ったのは、魁のすぐ側にいた、克也、である。
自分の手の中にあるものなら、スイッチ一つで、いくらでも消してしまうことが出来ただろう。
今、魁を襲っているのは、克也、なのだ。
鉄パイプの攻撃が、不意に、止んだ。
魁は、体を起こそうとしたが、その意志に反して、手足には全く力が入らなかった。思ったよりも、傷の痛みが激しいのだ。
「魁？　大丈夫なのか、魁？」
龍生が、手探りで、魁の方へと進んで来る。――いや、方向が合っているのかどうかは判らないが、それでも、足を進めていた。
「気を……つけ……。克也が……」
そう言いかけた刹那であった。目の前で、カッ、と赤く、口が開いた。
その口は、不思議なほどに、暗闇の中でも、よく見えた。
生臭い息が、顔にかかった。
赤い口が、魁の顔面を狙って、襲い掛かる。

刹那、地鳴りのような振動が、船を揺らした。
船が跳ね上がったのか、と思えるほどの、衝撃であった。
「うわっ！」
その衝撃に、体のバランスを崩したのか、克也が前のめりに、空を舞った。
楽器や照明器具が、派手に転がり、あちこちで機材の壊れる音がした。
床に横たわっていた魁はともかく、立っていた龍生は、その大きな揺れに、床の上へと放り出された。
揺れは、随分、長く続いていた。
海の上で地鳴りもないだろうが、そうとしか思えない、凄まじい衝撃であったのだ。
船が座礁したのかも、知れない。
それが、地鳴りの次に思い当たった、考えであった。
もし、暗礁にでも乗り上げたのなら、船体が無傷であるとは、思えない。船に穴でも空いていれば、数時間後には、確実な死が待っているのだ。
三万トンクラスの船ともなれば、そう簡単には沈まないが、それでも、二〇〇〇人を越える乗客が、全て無傷で逃げ出せるとは、思えない。
十分近くも、そうしていただろうか。――いや、暗闇の中での時間が、一体、どれくらいのものであったのかは、判らない。長かったのか、短かったのかさえも。
不意に、懐中電灯の明かりが灯り、魁は、ハッとして瞳を見開いた。
「大丈夫か、魁？」
そこには、龍生が立っていた。手には、懐中電灯を持ち、事態を理解できていないように、訝しげに首を傾げている
「龍生……」
「どうしたんだ、その傷は？　懐中電灯が目の前に転がって来たか

ら、スイッチを入れたら、明かりがついて――」
「スイッチは、オフになっていたんだな？」
魁は訊いた。
「え……？　あ、そういえば、押したら点いて……。スイッチはオフになっていた」
やはり、克也が自分で、懐中電灯のスイッチを切っていたのだ。
「どういうことなんだ、魁？　さっき、暗闇の中で、何が起こっていたんだ？　おまえのこの傷は？」
「……克也だ。響子を殺したのも、多分……」
魁は、暗闇の中で起こったことを、龍生に簡単に話して聞かせた。
今の魁の容体をみれば、龍生も信じない訳にはいかなかったのだろう。
「なら、克也は今もここで――」
と、懐中電灯を巡らせる。
ステージの下にいる克也の姿が視界に入ったのは、その時であった。

act 47

「……いたよ。克也だ」
その龍生の言葉に、魁は、明かりの方へと、視線を向けた。
そこには、首を曲がらぬ方向へと曲げて、白目を剥いて倒れる、克也の姿があった。
恐らく、さっきの衝撃でステージから落ち、首の骨を折ったのだろう。
「……俺が克也を突き落として殺した、としか見えない状況だな。誰かに襲われているような一人芝居をして、その隙に」
「その怪我で、か？　それに、ステージの高さは、一メートル程しかないんだぜ。突き落としたくらいで殺せる、なんて思う人間はいないさ。――首の骨を折ってから突き落とした、っていうのなら、別だけど」
「なら、まだ俺の容疑は晴れない訳だ」
「死人に口なし、だからな。――傷を見せてみろよ。それで容疑が晴れる」
龍生は言いながら、魁の服を捲り上げた。
肩や腕、腰、足、背中……至るところに、スタンド・マイクで殴られた後が、残っている。
「……頭に当たってたら、終わりだったな」
「俺が自分で殴ったのなら、頭は避けるさ」
「自分の背中も、これだけの力で殴れる、ってか？　もう真っ赤に腫れてるぜ。骨にも異常があるかも知れない。――普通の人間に、自分の背中を、これほどの力で殴れる奴はいないさ」
「……実際、殺される、と思ったよ、克也が大きな口を空けて、襲い掛かって来るのを見た時は……。顔のすぐ近く――明かりがなくても、はっきりと見えた。まるで、俺を食べようとしているかのように、襲い掛かって来たんだ……」

「食べる？」
魁の言葉に、龍生は訝しげに、眉を寄せた。
「笑っても構わない。本当に、食べられる、と思ったんだ……」
人間の口が、あれほど間近に迫って来るなど、誰が想像し得たであろうか。しかも、骨の限界を超えて、顔全体が、口と化したように開くなど。
これは、悪い夢なのではないだろうか。
そんな思いが過ったのも、現実逃避、というより、この現実が、あまりにも悪夢に近かったせいであったかも、知れない。
「とにかく、これで全部、終わったんだな」
龍生が言った。
「ああ。克也の口からは何も聞けなかったが――。もう正気ではなかっただろうからな」
人間を食べようとするなど、正気のままで出来ることではないのだ。
「それはそうと、さっきのあの衝撃は、何だったんだ？」

デッキの上は、我先に、と駆け上がって来た有閑人種たちで、すでに一杯になっていた。
船が近づいて来ている、と聞いて、皆、救出されることだけを信じて、駆け上がって来たのだ。
もちろん、その間には怪我人も続出し、悲惨な光景が、多々見られた。
しかし、それも、自業自得で片付けられることであり、少なくとも、同情する気にはなれなかった。
そして、誰もが、その異変に気づくのに、そう時間はかからなかった。

船の明かりが、見えないのだ。――いや、船は確かに存在している。大きな影となって、もう、すぐそこまで近づいて来ている。
だが、それでいて、明かりが一つも、見えないのだ。あれだけの大型客船なら、必ず明かりが灯っているであろうに。
「何だ、あの船は？　明かりが一つも点いていないじゃないか」
「あれ、本当に船なの？　岩か何かが、海面に突き出しているんじゃ……」
その囁きの通り、目の前の影は、船というより、大きな岩の塊、というように、見えた。
「どう思う、オーギュスト？」
人の少ない一角に立ち、エリアスは、目の前の影のことを、問いかけた。
「三万トンクラスの大型客船でしょう。近くに見えるのは、船自体が大きいためで、実際には、衝突するまで、まだ少し余裕があります」
「衝突？」
エリアスは、その言葉に、目を瞠った。

act 48

「……考えたくはありませんが、このクルーザーは操舵が利かず、向こうの船も、普通とは思えません。明かりの灯っていない客船など、見たこともありませんから。人がいるのなら、明かりは必ず灯っているでしょうし――。あの大型客船に打付かっては、このクルーザーも無事では済みません」

オーギュストは、難しい顔で、それだけを告げた。

操作の利かない船同士では、避けることも出来ないのだ。

見たところ、このクルーザーは、あの大型客船に向けて、真っすぐ、進み、あの大型客船も、このクルーザーの方へ、避ける様子もなく、近づいて来る。

それは、影が大きくなっていることでも、容易に知れた。

「――幽霊船かな？」

「今なら、何でも信じられますが」

そのオーギュストの返答に、エリアスは、クスっ、と笑みを零した。

「ボートで非難しようとしても、衝突の煽りを受けて、転覆するのがオチだな」

「皆が、あなたのように思ってくださるといいのですが」

オーギュストが言った時であった。

「おいっ、このまま進んだら、あの船に打付かるんじゃないのか！」

一人が、大きな声を、張り上げた。

それを皮切りに、そこかしこで、どよめきが起こり始める。

「あの船は何をしているんだ！　何故、もう少し進路を切らない！」

「あんな船に打付かったら、このクルーザーはおしまいだぞ！」

「ボートがあるわ！　それに乗って逃げれば――」

最早、エリアスやオーギュストが何を言っても、止められるような状況では、なかった。

「ボートには全員、乗れないぞ！　どうやって、乗る人間を決めるんだ？」
「女性が優先されるべきよ！　男の人は後から――」
「そんな決め方があるものか！　私は、大切な仕事をいくつも抱えているんだっ。その私が死んだら、どれほどの損害が出るか――」
「弱い女性を優先するのが、当然じゃないの！」
「何だと！　普段、男女同権だの、フリー・セックスだの言っておるくせに、こういう時だけ、女という言葉を使いおって――」
　これが、スウェーデンの要人、として通っている人物たちの言葉、なのであろうか。――いや、もちろん、こんな状況では、落ち着対処できる人間の方が珍しいのだろうが、それにしても、部下やマスコミには、見せられない姿であったに、違いない。
　避難ボートの周りには、どっと紳士淑女の群れが、押し寄せていた。
「……こういうのを見ていると、生き残りたくなくなるな」
　エリアスは、侮蔑の言葉を、吐き捨てた。
「大奥様を、お一人になさる積もりですか？」
「……そうだったな。ぼくには、おばあさまがいる」
「参りましょう。救命胴衣を付けておいた方が、良さそうです」
　船の影は、もう随分、大きくなっていた。
　どう足掻いても、衝突を避けることは、出来ないのだ。
「ダイナマイトで、向こうの船を吹き飛ばす、っのは、どう？」
　皮肉な口調で、エリアスは言った。
「硝酸が、あと一〇〇倍もあれば」
「残念」
　本気なのか、冗談なのか、二人は、のんびりとしている、としか思えない会話を交わしながら、救命胴衣を取りに戻った。――いや、その前に、船のスタッフに、救命胴衣の装着を呼びかけてもらったが、その言葉に耳を貸す者は、数人しかいなかった。皆、救命胴衣を取りに戻っている間に、ボートに乗り遅れるのではないか、と、

そんな猜疑心に凝り固まっていたのだ。
結果、海に落ちる者、殴り合いのケンカを始める者――と、デッキは、収集のつかないパニックに、襲われていた。
もしかしたら、救命胴衣をつけていれば、全員が助かったかも知れない、というのに。
ボートに乗り込もうとしていた者たちは、その場で何人かが海に落ち、定員オーバーで、目前の大型客船と衝突する前に、最早、危ない状態になっていた。
「三万トンクラスの大型客船とはいえ、このクルーザーと打付かっては、無傷で済まないでしょう。向こうの船に乗り移ることが出来たとしても、楽観は出来ません。それに――。明かりが灯っていないのが、気になります」
エリアスの救命胴衣のベルトを嵌めながら、オーギュストは言った。
「向こうの船でも、このクルーザーと同じことが起こってる、ってか？」
「その可能性はあります」
あの蒼く仄光る不気味な霧が、向こうの船の前にも現れていた、という可能性が。

act 49

「……厄介だな。三万トンクラスの客船なら、一〇〇〇人――いや、二〇〇〇人は乗っている。その内、何人が霧に濡れているか、想像もつかない」

「かなりの広さがあるだけに、死体も――血の跡も、すぐには発見されないでしょう。化け物と化した人間がいることを知らない者も、大勢いるはずです」

危険に気づいていない、ということは、用心していない、ということに外ならないのだ。しかも、客のほとんどが自室に戻っている、とすれば、その中で、発見されずに喰い殺されている人間が、何人もいるはずである。

特に、シングル・ルーム――。

部屋割を知ることが出来る立場の人間が、あの霧に濡れていた、とすれば、まず、客を自室へ戻らせて、それから、シングル・ルームを襲おう、とするだろう。

乗務員がノックをすれば、客は疑いもなく、ドアを開く。普通の客が、霧に濡れている以上に、厄介なのだ。

「乗務員の誰かが、霧に濡れていると思うか？」

エリアスは訊いた。

「一〇〇パーセント、間違いないでしょう。他の船が接近している、というのに、何の信号も出していませんでしたから」

普通なら、何かの明かり――懐中電灯でも、松明でも用いて、このクルーザーに信号を送っているはずなのだ。その証拠に、こちらのクルーザーでは、乗務員が、向こうの船に、ＳＯＳを送り続けている。

それがない以上、その手段を知る乗務員が、全て殺されてしまっているか、霧に濡れてしまっているか――向こうの船に乗り移ることが出来ても、事態が変わらないことは、明らかであった。

「唯一の救いは、霧が出たのが暗い時間で、景色を見にデッキに上がっていた人間が、少ないかも知れない、ということと、客船には、船内にいくらでも遊び場がある、ということだな」
「ええ。大抵の人間は、船の中にいたでしょうから――。もうそろそろ衝突する時間です」
客船は、そのオーギュストの言葉の通り、すぐ鼻先まで、近づいていた……。

暗い中、距離感もなく、大型客船とクルーザーが、衝突した。
互いに、船首を掠めるようにして、接触し、大きな波を、巻き起こす。
その際の衝撃は、凄まじいものであった。船が数メートルも飛び上がったのか、と思えるほどに。
その煽りと、コンクリート壁のような波を喰らい、ボートは、呆気なく転覆していた。
乗っていた者たちは、救命胴衣も付けておらず、手の届く範囲に船はなく、また、もがくことも出来ない波に囚われ、為す術もなく、浮き沈みしていた。
水、といっても、高いところから、頭上に降りかかる衝撃は、凄まじいものなのだ。
波に呑まれて姿を消す人間は、あっと言う間に、増えていた。
その中、まだ海面に顔を出していたバーレンは、運の良い方であったのだろう。肺に入った水に噎せ返りながらも、まだ何とか、海底に引きずり込まれることなく、踏ん張っている。
「たっ、助け――」
高い波に押されながら、暗い海に、助けを求める。
人間、自分だけは死んだりしない、と思っているものなのだ。
しかし、他人を押しのけてボートに乗り込んだ人間を、誰が助け

てくれる、というのだろうか。
反りくり返って吐いた唾は、必ず己の顔にかかるのだ。
だが、バーレンは、まだ死ぬ運命ではなかったのかも、知れない。目の前に、救命胴衣を付けた人間が、現れたのだ。暗いせいで、顔までは見えないが、オレンジ色の救命胴衣の輝きは、波の合間に、はっきりと見えた。
「助け――ゴボ……っ。助けてくれ――っ！」
水を呑み、また、吐きながら、バーレンは、その人物に救いを求めた。
その人物が、バーレンの方へと、近づいて来る。
そして、顔が、見えた。
「マルセ……」
それは、紛れもない妻の顔であった。

act 50

「ああ、良かった、マルセ。早く助けてくれ」
波間に顔を出しながら、バーレンは、自分がその妻にどんな仕打ちをしたのかも忘れたかのように、そう言った。
きっと、彼は本当に、そんなことなど、もう忘れているのだろう。もしかすると、あんなことは、彼には、塵ほどの罪悪感にもならないことであったのかも、知れない。
妻なら、夫の言うことを利くのが当然だ、と――。
「捜していましたのよ、あなた」
マルセは言った。
波の中でも、少しも濁っていない声であることが、不思議であった。
もちろん、今のバーレンには、そんなことは、大した問題ではなかったが。
「助け……っ。早く！」
「ええ、解っていましてよ、あなた。――でも、あなたの苦しむ顔を見るのが、愉しくて」
心底、愉しげな面で、マルセは言った。
「何を……っ！　さっさと助けんか！」
マルセの表情は、変わらなかった。波間に浮き沈みするバーレンの惨めな姿を、冷めた笑いで、観察している。時には、クックッ、と声を立てて笑い、手を伸ばしては、引っ込めて――。
バーレンを助ける積もりなどないのだ、彼女は。
だが、それは、波に襲われているバーレンには、解らないことであっただろう。助けを求め、時には懇願し、罵倒し、思いつく限りの言葉を並べたてる。
もちろん、そんな時間が長く続くはずも、なかった。
バーレンの力も、やがて、尽き、恨み言を最後に、波に沈んだ。

「あら、もうおしまいなの？　つまらないのね」
マルセは、不満を零すように唇を歪め、そして、さらに楽しいことを思いついたように、唇の端を持ち上げた。
「あなた、一緒に、あの船に行きましょう。あなたにも、とてもおいしいお肉を食べさせてあげるわ。だって、夫婦ですもの、私たち……。そうでしょう、あなた？」

「く……っ！」
「大丈夫か、魁？」
二人は、クラブを後にして、デッキの一つに上がって来ていた。
鉄パイプで殴られた魁の傷は、時間を追うごとに痛みを増すようで、落ち着きを取り戻した今、痺れていた部分は、全て痛みに変わっていた。
それでも、二人が部屋に戻らず、こうしてデッキに出て来たのは、さっきの衝撃の原因を、確かめるためであった。
もちろん、それは二人だけでなく、デッキには、大勢の人間が、押し寄せて来ていたのだが。
その内の一人に押され、今、魁が呻きを上げた、という訳である。
「部屋に戻った方が――」
「黙って船が沈むのを待ってろ、ってか？」
この性格、誰かに似ている。
「そういう、人の親切を無にする性格が嫌いなんだよ、俺は」
相変わらずの、遠慮のない龍生の言葉に、魁は、フッ、と鼻を鳴らした。
デッキの一角で悲鳴が上がったのは、その時であった。
「何だ？」
「さあな。ここからじゃ見えない」

すでに、その辺りには、大勢の人間が集まっている。
それが、内臓を喰い荒らされた日本人女性の死体を囲むものであることは、魁と龍生には知りようもなかった。
「先に、向こうへ行ってみよう。あっちは、人が集まっていて、行けそうもない」
二人は、船首の方へと、足を向けた。
このクラスの船になると、デッキの上に立つだけで海を見渡す、ということは出来ないのだ。ある程度、柵のほうへ行かないと、水平線しか見えない、ということになる。
「クルーザーだ！」
誰かがその声を上げた途端、ドン、という振動音と共に、いきなり海が明るくなった。
オレンジ色に染まった、と言ってもいい。
そして、また船が大きく、揺れ始めた。

act 51

「うわっ！」
魁と龍生は、共に床の上へと、投げ出された。――いや、感覚的には、吹き飛ばされた、という感じであった。
だが、反対側では、もっと悲惨なことが起こっていた。さっき、誰かが悲鳴を上げた一角で、蟻のように群がっていた人々が、折り重なるようにして、倒れたのだ。
そこかしこで、悲鳴や呻きが上がり、海に投げ出された者も、何人かいた。恐らく、死者も出ていただろう。怪我人は、数えていられなかったに、違いない。
そして、折り重なるようにして倒れた数十人――或いは、数百人の客たちを、全て立ち上がらせてやることは、今の魁や龍生には、無理であった。
「……向こうに行ってたら、今頃、あの中の一人になってたな」
龍生が言った。
「……で、いつまで、俺の上に乗ってるんだ？」
は、魁。
倒れた時、魁も、龍生の下敷きになっていたのである。
「え？　ああ、そうか。別に、犯そうと思って、上に乗った訳じゃなし――」
「頼むから、そういう冗談はやめてくれ……」
再び、魁の頭に頭痛が生じていたことは、言うまでもない。
「そういや、おまえは大学時代から、男にラブレターをもらってたもんな」
「――お互い様のはずだ」
自由課題の時、互いのヌードを描き合って、提出したことから、二人の元に、そういうラブレターが来るようになったのだ。
もちろん、どれも皆、無視したが、いきなり、『抱き締めてくだ

さい』と言われることを筆頭に、その手の男に言い寄られることが、後を断たなかった。
「響子と真弓は、言い寄って来る男を退けるのに、本当に役に立ってくれたよな。――でなきゃ、俺もおまえも、今頃カマを掘られて、人生変わってたかも知れないぜ」
「……思い出したくもない」
「まあ、おまえが学内の女のヌードを描いて提出してたら、もっと騒ぎになってだろーけどな。女のイヤガラセは陰湿だし、モデルになってくれた女に何をするか、判ったもんじゃない」
「……男も似たようなものさ」
克也のように、あんな酷い殺し方をしてしまう人間もいるのだ。
二人は、それを口に出さず、明るく染まる海の方へと、足を向けた。
怪我をしている魁では、折り重なって倒れている人間を、助けてやることも出来ず、取り敢えず、その不審の方へと、足を向けたのだ。
龍生は――魁の松葉杖、のようなものである。
そして、二人が見下ろした海の上には、火を吹くクルーザーが、浮かんでいた。――いや、かつてはクルーザーであったもの、というべきだろうか。今は炎に包まれ、凄まじい黒煙を纏っている。
さっきの音と振動は、そのクルーザーの一角が、爆発したためのものであったのだ。恐らく、燃料に何かが引火して、こういう事態になったのだろう。
「ロープと浮輪だ、龍生！　海に投げ出された人間がいる」
「あ、ああ」
それからは、もう他のことを考える余裕は、全くなかった。
船の一方では、折り重なって倒れる人々の救助、もう一方では、クルーザーから投げ出された人々の救助――と、それだけに時間を費やしていたのだ。
もちろん、魁や龍生だけでなく、他の人間も――。

そういう状況であったため、裸の女と、意識のない紳士が引き上げられても、誰も不思議とは思わなかった。恐らく、風呂に入っている途中だったのか、夫婦で楽しんでいる最中だったのか、それを追及しようという者など、なかったのだ。その女が、裸でいたにも拘わらず、きちんと救命胴衣をつけていたとしても……。

そして、引き上げられたほとんどが大人であったが、その中には、一人だけ、小さな子供が混じっていた。淡い金髪と、碧い瞳をした、お人形のように愛らしい、男の子（だと思う）である。

「可哀想に、まだ子供じゃないか。――ほーら、もう大丈夫だぞ。寒いだろ？　今、上着を貸してやるからな」

龍生は、着ている上着を脱いで、その子供の肩に、羽織らせた。そして、可愛い金髪を、くりくりと撫でる。――と、その子供は、龍生の手を、バシ――っ、と叩いて振り払った。

「失礼な奴だな。人を小さな子供みたいに。これだから、アジア人は」

スウェーデン語が解らないことだけが、龍生に取っては、救いの状況であっただろう。解っていれば、その子供を殴っていたかも、知れない。

「エリアス様！」

すぐ後から、船へと上って来た男が、その子供――エリアスと呼んだ子供の言葉に、目を瞠った。

「その方にお謝りください、エリアス様！　助けていただいた方に、そのような態度を――」

「ふんっ。そいつが先に、ぼくに失礼な真似をしたんだ」

エリアスは、つん、と鼻を持ち上げている。

龍生には、二人の会話は解らなかったが、それでも、その子供に馬鹿にされていることだけは、雰囲気からして、解っていた。

「……この可愛げのないガキ、誰かに似てる」

見た目だけは、お人形のように可愛いのに、性格の方が、それに伴っていないのだ。

act 52

「日本の方ですか？」
不意に、流暢な日本語が、耳に届いた。少年に何かを言っていた男である。恐らく、龍生の口にした言葉を聞いて、日本人だと判断したのだろう。
「え、あ――」
龍生は慌てて、口を噤んだ。まさか、日本語が解る、とは思っていなかったため、そのガキを――いや、子供を、『可愛げのないガキ』呼ばわりしてしまったのだ。
「馬鹿な奴」
と、傍らで呟いたのは、魁である。
所謂、口は災いの元、という奴だ。
だが、男は、そのことを気にしている様子もなく――胸の内では、龍生の慌てように笑いを噛み殺していたかも知れないが、
「申し訳ございません。エリアス様は――ダールクビストは、悪気があった訳ではなく、その……子供扱いされることが嫌いで……。私は、オーギュストと申します。助けていただいて、ありがとうございました」
「い、いえ、こちらこそ失礼なことを……。仁龍生です。――こっちは、秋月魁。――日本語がお上手ですね」
子供相手に腹を立てたとあっては、さすがに少し恥ずかしいのか、龍生は、似合いもしない褒め言葉を、口にした。もちろん、実際に、褒めるほど堪能な日本語でもあったのだ。
「海外へ出ることが多いので、大抵の国の言葉なら――。ダールクビストの方も、日本語は出来ませんが、十二、三カ国語くらいなら」
「十二、三……カ国？」
龍生など、日本語を入れても、英語、フランス語、ドイツ語、中国語……と、五カ国語がいいところである。しかも、その内の二つ

は、かなり、危うい。
　その子供が、子供扱いされることを嫌うのも、ある意味では当然のことであったのだろう。当人は、すっかり大人のつもりでいるはずなのだ。そして、それだけのものを持っているのだから。
「日本の第一外国語は、確か……英語でしたか？　英語なら、ダークビストも解りますので」
　一体、どういう人物だというのだろうか、この二人は。
　一見して、親子のようにも見えるが、親が、子供を姓で呼ぶ、というのも、妙なものだろう。
　口を開いたのは、魁であった。
「ほら、茫としてないで、次だ」
　と、素っ気なく言う。
　龍生は、ムッとし、
「怪我をして役に立たないクセに、偉そうにするなよっ」
「怪我？」
　その言葉に、オーギュスト、と名乗った男の、表情が、変わった。エリアス、という子供の方へと視線を向け、何やら、二言三言、言葉を交わし合っている。
　だが、その理由を訊くのは、救助が一段落ついてからに、なった。その間、彼らはずっと、魁と龍生の側を離れず、何かを訊こうとするかのように、救助を手伝いながら、その場にいた……。

act 53

「さっきの……怪我、というのは、髪や服が湿って、口からは生臭い匂いのする人間に、食べ――咬みつかれようとした時に、受けたものでは……」

「え？」

四人は、デッキでの救助を終え、キャビンの、魁の部屋へと戻って来ていた。

そこで、零れ落ちたのが、そのオーギュストの言葉である。

魁と龍生は、デッキでのエリアスとオーギュストのように、互いに顔を見合わせていたが、どちらからともなく、あの時の克也の狂気を話し始めた。

そして、聞いたのである。あの克也の狂気が、蒼く仄光る、あの不気味な霧のせいであったことを……。

もちろん、普通なら、信じはしなかっただろう。

だが、魁も龍生も、実際に、あの不気味な霧を、見ていたのだ。

二人の言葉を、馬鹿馬鹿しい、と笑い飛ばすことは、出来なかった。

それからの話は、簡潔で短いものであった。現実を受け入れている以上、長々と説明する必要もなく、互いに、同じ出来事に打付かった、ということを確認するだけで、良かったのだ。

そして、その間、エリアスは、何故か、魁にだけは好意的であった。

「子供にまでモテるのか、おまえは」

と、龍生が小声で悪態づいたのも、仕方のないことであっただろう。龍生の方は、すっかり嫌われてしまっているのだ。

そのエリアスも、今は、魁のブカブカのセーターを着せてもらって、まるで女の子のような愛らしさで、ベッドに、ちょこん、と腰掛けている。

オーギュストの方は、筋肉の付き方が、魁とも龍生とも違うのか、

セーターはともかく、ズボンの方には、ちょっと無理があるようで、窮屈そうな印象を受ける。
魁にしても、龍生にしても、決して貧弱、という体型ではないのだが、そのオーギュストという男は、世の中年男性の常識を越えた、見事な体格をしていたのだ。それも、スポーツで鍛えた、とかいうレベルのものではなく――かといって、ボディ・ビルダーのようなグロテスクな筋肉でもなく、一切の無駄のない、そして、機敏な動きを妨げない、戦うために造られたかのような、体躯を。
何より、二人が驚いたのは、オーギュストの肩についた、傷であった。包帯が濡れてしまったため、それを解く時に見えたのだが、そこには、はっきりと、人間の歯型がついていたのだ。
「今、一番、厄介なことは、引き上げられた人間の全ての髪が濡れ、見ただけでは、誰が霧に濡れた人間なのか、解らなくなってしまった、ということです」
傷の話をした後、オーギュストが言った。
何故だか、その傷のことには、あまり触れてほしくはない様子で、それから話を逸らした、という風にも、見えた。
傍らでは、エリアスが、キュっ、と唇を結んでいる。
「なら、あんたたちが霧に濡れた人間でも、俺たちには解らない訳だ」
龍生は言った。
「それは……」
「馬鹿な奴。話を聞いていなかったのか？　霧に触れた人間は、生臭い匂いがするんだよ」
生意気な口調で――しかも、龍生以上に流暢な英語で、エリアスが言った。その表情には、さっきの〝いたたまれなさ〟のようなものは、微塵もない。
「エリアス様！」
と、オーギュストが咎めるようにして吐いた言葉にも、
「ふんっ」

と、鼻を持ち上げている。
やはり、可愛くない。
「何で、毛も生えていない子供に、馬鹿にされなきゃならないんだ、俺は……」
龍生は、その怒りと情けなさに、ぷるぷると肩を震わせた。
エリアスは、といえば、
「毛……？」
と、大きなセーターを捲り上げ……魁は、
「余計なことを言うなよ、龍生。それでなくても、子供扱いされるのが厭みたいなのに」
と、小声の日本語で、睨みを利かせる。
大人でない部分について、反論できないらしいエリアスは、また、キュっ、と――今度は悔しげに、薄い唇を噛み締めている。
この四人、結構、いい取り合わせかも、知れない。もちろん、難しい性格の人間がまた一人増えてしまったことに、龍生が喜んでいたかどうかは、疑問だが。

act 54

「見ろよ。傷ついてるじゃないか。おまえが、余計なことばかりを言うから」
魁は、龍生の耳元で、チクリチクリ、と刺すように、言った。
龍生も、さすがに罪悪感が募ったのか、
「あ、あの、えーと……」
「第一外国語の英語もロクに話せない奴よりマシだから、いいや」
当のエリアスは、何とか心の整理がついたようで、セーターを降ろして、満足げに言った。
もちろん、龍生は、ムッとした。
「話せない訳じゃないっ。何を言おうか考えてたんだっ」
「ほら。また、子供の言うことにカッと――」
そこまで言いかけ、魁は慌てて、口を噤んだ。
何しろ、子供扱いされることが、何より嫌いなのである、目の前の少年。
だが――。
「ホント、大人気ない奴」
エリアスは、気にも留めていない様子で、そう言った。
どうやら、都合の良い時は、子供で構わないらしい。
「……ダールクビストのガラス王国では、どんな躾をしてるんだ？」
その少年が、かのガラス王の孫――いや、今はガラス王そのものであることは、龍生も魁も、オーギュストの口から聞いていた。
「は……。私はただの秘書で、教育係ではありませんので、その辺りのことは……」
「日本人は、秘書の仕事も知らないのか？　やっぱり、馬鹿だな」
「エリアス様！」
何かと問題の多い子供のようである。
龍生は、傍らの魁へと視線を向け、

「おい、魁。おまえが馬鹿呼ばわりされてるぜ。この場で日本人は、おまえだけだからな」
「え……？」
と、眉を持ち上げたのは、エリアスであった。
「残念だったな、ボーイ。俺の血は、メイド・イン・チャイナだよ。名前も、中国語読みにすれば、仁龍生（レンロンション）」
龍生としては、初めて、その子供に勝利した、瞬間である。
まあ、子供相手に、ちょっと、みっともない気もするのだが、それでも、いい気分である。
エリアスは、心底悔しそうに黙っているから、これも、結構、可愛い。
「馬鹿に、馬鹿にされるのが、一番、悔しい……」
やはり、可愛くないかも、知れない。
まあ、この場合は、いい勝負であっただろう。
「オーギュスト、このベン・ジョンソンとかいう奴、囮にしたら？」
「ベン・ジョンソンじゃないっ！　レン・ロン・ションだっ」
うーん、どうも、エリアスの方が、一枚も二枚も上手のようである。
「ともかく、今は、助かる道を探すことが先決だ。食人鬼だけでなく、船まで沈むとなれば、ここにずっと閉じこもっている訳にはいかない」
煙草を銜えながら、魁は言った。
エリアスが、クン、と匂いを嗅ぐように、愛らしい鼻を動かした。
北欧の国々は、喫煙のマナーに煩いのだ。それでなくても、子供がいる場所である。
それに、その子供、妙に、周囲の人間を、自分のペースに引き込む力を持っているのだ。視線一つ、仕草一つで、側にいる人間を動かしてしまう、というような。
それも、ガラス王の名を継ぐ者としての才能、なのだろうか。
「あっと、今すぐ消すから――」

「……別にいい」
「へ？」
思いもかけないエリアスの言葉に、魁は、ポカンと口を開けた。
「何で、魁にはそうやって甘いんだよっ」
その龍生の言葉通り、もし、煙草に火を点けていたのが龍生であったなら、エリアスは、一言くらい文句を言っていたかも、知れない。
エリアスは、つん、と横を向いている。
「まあ、今は、ミスター・秋月のおっしゃった通り、助かる道を探すのが先決で……」
オーギュストも、かなり肩身が狭そうで――いや、表情にはそんなものなど映ってはいないのだが――一応、それから話を逸らすように、
「客船の構造なら、大体、見当がつきますから、私とダールクビストで船内を見て来ます。あなた方はここで――」
「子供を――彼を連れて行くのは危険だ。船内は、ぼくと龍生が見て来ますから、あなたは、彼と一緒に、ここに」
「ですが、あなたは怪我人で……」
「お互いに」
「私は肩だけですから、不自由なく動けますが――」
「ぼく、ミスター・秋月とここにいる」
そう言って、魁の手をつかんだのは、エリアスであった。

act 55

「は？　あの、エリアス様……」
「怪我人と子供が残るのが、当然だろ？」
「はあ、それは、まあ……」
オーギュストの顔は、不安げである。そして、疑い深げでも、ある。
何しろ、聞き分けがいい時のエリアスが、一番、怖いのだ。
オーギュストの心配も、エリアスの安否、というより、エリアスが、魁に何か迷惑をかけるのではないか、ということが中心であった。
「なら、早く行けよ。この客船には、車も一緒に積み込んであるはずだ。無線機を載せてる車があるかも知れない。そうでなくても、発煙筒や、赤色灯を――。霧に濡れていなければ、の話だけど――。それから、彼の傷を手当するのに必要な薬」
彼は本当には、十一、二歳の子供である、というのだろうか。
てきぱきと指示をするエリアスを横目に、今度ばかりは、龍生も、言葉なくそれを聞いていた。
何故だか、その少年と、その秘書の男の言う通りにしていれば、助かるのではないか、という気もしていた。
「かしこまりました。ミスター・仁は危険ですから、私が一人で――」
「俺も行くよ。ここにいると、気が短くなりそうな気がする。それに、あんたんとこのお坊っちゃまも、俺に行け、って言ってるみたいだし」
龍生は、ベッドの上から、腰を上げた。
エリアスが手を振って見送っていたことは、言うまでもない。
二人は部屋を、後にした……。

かくして、一人の子供の命令の元に、大の大人たちは文句も言わずに、従うことになった訳である。
「あんたんとこのエリアス坊っちゃま、ゲイじゃないだろうな？」
「は？」
「いや、いい。どうせ、襲われるのは、俺じゃない」
気に入られているのは、魁、である。
龍生とオーギュストは、暗く閉ざされたキャビンの階段を、下層の車輛スペースへと向かって、降りていた。
あのエリアス坊っちゃま、生意気な子供ではあるのだが、言っていることは、全て正しく、冷静な判断によって打ち出された、最良の手段であるから、龍生も文句が言えないのだ。
車のことなど、龍生は考えてもいなかったし、せいぜい、スタンド・マイクを武器にする、ということを思いついたくらいである。
これでは、どっちが子供なのか、判りもしない。
住む世界が違う、といか、レベルが違う、というか、彼が、わずか十一、二歳でガラス王の名を継いだ、というのも、うなずける。
彼は、血の繋がりだけで、ガラス王の名を継いだ訳ではなく、その才能を持ってして、ガラス王国のトップに立ったのだ。
龍生や魁が手に入れることが出来なかった、天才、という輝かしい響きを、我が物にして。
「あんたみたいな有能な人間が、何故、あの子供に支えているのか、解るような気がするよ」
龍生は言った。
心の中で、俺はごめんだけど、とも付け足した。
「……。私は、この一年、あの方の秘書となったことを、喜ばしい、と思ったことは、一度もありませんでした」
「え？」
「あの方は、大奥様――お祖母様以外の人間には、決して心を開かれず、親戚方はもちろん――中でも、私を一番に嫌っておいででし

たから――。もちろん、お祖母様の前では、そんなことは顔にも口にも出されませんでしたが」
これほど優秀な男を嫌う理由がある、というのだろうか。――いや、龍生のような良い人間を嫌い、魁のような無愛想な人間を好んでいるのだから、有り得ることなのかも、知れない。
それでも――。
「あんたが、あの子供を嫌う理由なら、解るような気もするけど、その逆は……」
龍生は言った。

act 56

「エリアス様は、お寂しい方です。ご両親の顔も、写真でしかご存じなく、お祖父様も亡くされ……。体調を崩されたお祖母様にも、心配をかけるようなことは、何も言えず……。かといって、他に、悩みを打ち明けられるようなご友人も、お持ちではありません。あの方が、うっかり口になさった一言が、誰を通して、どこに流れないとも限らないのです。――普通の子供なら、何を言ったところで許されるのでしょうが、あの方は、ダールクビストの当主で、ガラス王です。どんな些細なことでも、ダールクビストのガラス王国を潰そうとする人間には、格好の攻撃ネタになります。――あの方は、それを全て承知しておいでなのです。ですから、誰も信用なさらず、何も口にされず、他人を突き放して生きておいでです」

「だけど、あんたは、あの子の秘書で――」

「はい。これからは、秘書として努めていけると思っております。皮肉なことに、この事件を切っ掛けに……」

「んー……。今いち、よく解らないけど、まあ、やっていけるのなら、構わないさ。あのお坊っちゃまも、あんたがいれば安心だろうからな」

彼らが住んでいる世界は、一般人の常識とは掛け離れた、全く別の世界なのだ。恐らく、自由など一つもない、責任だけが覆い被さって来るような、厳しい……。

「あの方には、ダールクビストの事業に何の利害もないあなた方との時間の方が、余程、落ち着けるものだと思いますが――。言葉も選ばず、何を言うことも許される時間は、あなた方が思っておられる以上に、エリアス様には楽しい時間のはずです」

「……」

龍生や魁が思っている以上に――。

大人として振る舞わなくてはならない子供は、何より、不憫なも

のであるのかも、知れない。
そして、龍生も、あの子供の生意気さにも、少しくらいは目を瞑ってやろう、という気になっていた。飽くまでも、少し、だが。
何しろ、自分より頭がいい、というのが、気に入らない。
まあ、それを差し引いても、人に愛されて当然の――人に優しくされて当然の、哀しい少年なのだが。
それに、そんな話を聞いた後では、嫌でも見方が変わって来る。一筋縄ではいかない少年、とはいえ、慣れてくれば結構……慣れるだろうか。
龍生に懐いてくれるかどうかは、向こうの意志次第である。
二人は、そんな話をしながら、下層の車輛スペースに降りていた。車特有の匂いが渦巻く中、懐中電灯を手に、足を進める。
アンテナを頼りに、無線機を載せていそうな車を捜す――が、オーギュストが足を止めたのは、新車らしきボルボの前であった。
無線のアンテナは、ついていない。
「懐中電灯を」
「え？　でも、これに無線は……」
無線はついていない、と言おうとしたが、龍生は、言われるままに、懐中電灯の明かりを、オーギュストの手元に向けた。
オーギュストは、器用な手つきで、車のキーを壊している。
巨大財閥の会長秘書になるためには、そんな才能もなくてはならないのだろうか、とも思ったが、龍生は、何も言わないことにした。
実際、このオーギュストという男、一つや二つの質問を持ち出したところで、得体の知れそうにない人物なのである。
鍵は、五分と経たない内に、呆気なく開いた。
そして、その中、オーギュストが取り出したのは、ダッシュ・ボードに備えてあった、懐中電灯であった。
「明かりは、いくつあっても便利なものですから。新車なら、トランクに発煙筒や、赤色灯も備えてあるかも知れない」
本当に、同じ人間なのだろうか、彼は。

「何か……助かりそうな気がして来た」
龍生は、希望を見るように、呟いた……。

ａｃｔ　５６（後書き）

近日中に、完結済小説の『魔窟降臨伝』を削除させていただくこととなりました。
詳しくは、活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

act 57

部屋の中は、静かであった。
龍生が出て行ったせいでもあるし、エリアスが〝いい子〟にしていたせいでも、ある。
今も、エリアスは、部屋の中をキョロキョロと見渡し――見渡すほどもないのだが、一応、懐中電灯を巡らせて、興味深げに、
「ぼく、《Ｌｕｘ　Ｒｏｏｍ》って初めてだ」
と、感激するように、頬を染めた。
ここは一応、下のＡ・Ｂ・Ｃルームよりも料金が高く、デラックスな部屋なのだから、褒めてもらえる、となると、魁も嬉しい。
だが――。
「いつも《Ｓｕｉｔｅ》ばっかりだったから、こんな小さい部屋、何か、ワクワクする」
忘れていたが、この子供、大金持ちの孫――いや、今は当主なのである。庶民には高い部屋でも、この子供には、安い部屋の一つ、なのであろう。
「他の部屋って、こんな風になってるんだ」
Ｃランク・ルームの倍近い料金の《Ｌｕｘ　Ｒｏｏｍ》とはいえ、さらに倍近い料金の《Ｓｕｉｔｅ》と比べれば、見劣りもする。
「あんまり喋らないんだね、ミスター・秋月？」
碧い瞳で魁を見上げて、エリアスが言った。
まあ、龍生なら文句の一つや二つ――五つくらいは言っていたかも知れないが、魁は、思ったことを何でも口にしてしまうような性格でも、ない。
「ん、ああ。よくそう言われる」
実際、子供の相手も、魁より、龍生の方が、うまいのだ。
今回は、なかなか苦戦しているようだが。
「ハクション」

と、何とも愛らしいクシャミが、明かりを揺らした。
夏とはいえ、海に落ちた後である。
「少し眠った方がいい。大人でも、起きているのは辛い時間だ。ベッドに入れば、体も温まる」
それ以外に、気の利いた言葉もかけられないのだ、魁は。
龍生なら、もっと色々と世話を焼いてやれたのだろうが。
エリアスは素直に、ベッドに入った。
服が濡れてから、魁の着替えの中にも、エリアスのサイズに合うようなズボンがなく（当然だが）、エリアスは、大きなセーターを被っただけの格好である。足元も、随分、冷えているだろう。
特に、暗い時間の海は、ひどく寒い。――そう。空はまだ、暗いまま、なのだ。
エリアスが、毛布の中から、手を伸ばした。
何も言わなかったが、魁は、その手を握り返した。
それだけで安心するように、エリアスが静かに、目を瞑る。
まだ本当に子供なのだ、彼は。
それに、余程、疲れていたのだろう。十分と経たない内に、スゥスゥと寝息を立て始めた。
どれほど大人びていようと、どれほど強がっていようと、あんな目に遭って、怖がっていないなど、あり得ない。それに、大人の時間に合わせて動き、大人と同じように振る舞っていることが、小さな子供に苦痛でないはずがない。
見ている者の方が辛くなるような子供、なのだ、彼は。
「天与の才に恵まれた者の方が幸せなのか、恵まれなかった者の方が幸せなのか……」
どっちにしろ、わずか十一、二歳で、その重みを背負うのは、不憫過ぎる。
まあ、エリアスには、オーギュストという秘書がついているのだから、心配ないのだろうが。
コツ、コツ、と単調な足音が廊下に響いたのは、それから、しば

らくしてのことであった。
エリアスが眠ってしまったせいか、部屋は余計に静かになり、その音は、魁の耳にもはっきりと、届いたのだ。
龍生とオーギュストが、戻って来たのだろうか。
その足音は、魁の部屋の前で、ピタリ、と止まった。
コンコン、と、足音と同じリズムのノックが、ドアに響く。
魁は、返事をしなかった。
龍生やオーギュストが戻って来たのなら、何か声をかけるはずなのだ。
そして、エリアスの手が、魁の手を、ギュっ、と強く握っていた。まるで、行ってはいけない、とでもいうように――。それは、耳で聞く言葉以上に、不思議なほどはっきりと、そして、確かなものとして、魁の胸に届いていた。

ａｃｔ　５７（後書き）

近日中に、完結済小説『魔窟降臨伝』を削除することとなりました。
詳しくは活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

act 58

ノックの音で目を醒ましたらしいエリアスは、身動きもせず、ただ魁の手だけを、握っている。
小さな子供が、たかがノックの音で目を醒ましてしまうなど、可哀想な気もするが、それも、彼が自分で選んで決めた道なら、他人が口を挟むようなことでも、ない。
周囲の視線を気にして、自分を見失い、絵筆を折ってしまった魁とは、その強さが違うのだ。
魁は、解っている、というように、毛布の上から、エリアスの肩を、ポンポン、と叩いた。
ノックは、奇妙なほどに、同じリズムで、続いていた。苛立って強く叩くこともなく、速く叩くこともなく、明らかに、普通でないことを示すように、単調なリズムを繰り返しているのだ。
魁は、手のひらに滲む汗を感じながら、じっと息を殺していた。
船員が霧に濡れている可能性がある、ということは、魁もオーギュストから聞いていたし、実際、他の船員の多くが姿を消していることも、知っている。
その消えた船員たちが、霧に濡れた船員に喰べられてしまった、ということは、充分、考えられるのだ。
そして、今も客室を回り、人間を喰べ続けているかも知れない、ということも。
その中、何よりも恐ろしいのは、その船員が、マスター・キーを持っているかも知れない、ということである。もちろん、内鍵はしっかりと掛けてあるのだが……。
単調なノックは、十分も続いていただろうか。想像を超える長さである。
魁とエリアスが返事を返さず、息を殺していると、向こうもやっと諦めてくれたのか、再び、単調なリズムで、歩き始めた。

「……と……さま」
エリアスが、魁の手を両手で握り締め、頬に、ギュっ、と圧し当てる。
「ん？　何か言ったかい？」
聞き取れなかった薄い呟きに、魁は、静かな声で問いかけた。
返事は何も、返らなかった。
だが、何となく、優しい気持ちに、なっていた。
しかし、その安堵の時間も束の間、また、足音が近づいて来た。
今度は逆――いや、同じ方向から、というべきだろうか。さっきの足音は、右から左へと消えて行ったのに、今度の足音も、また、右手の方から聞こえて来たのだ。
もちろん、人間の暗闇での感覚など、当てにならないものなのだろうが。
それでも、もし、それが聞き間違いでないのだとすれば、今度の足音は、さっきの足音の主とは、また別の人間、ということになる。同じ人間なら、右からではなく、去って行った方向――左から聞こえて来るのが当然なのだ。
ドアの前で、足音が、止まった。
コンコン、と単調なノックが、届く。
そして、今度は、声も届いた。
「先輩？　秋月先輩？　いらっしゃるんでしょう？」
日本語である。
そして、魁には、聞き覚えのある声であった。もとより、魁のことを『秋月先輩』などと呼ぶ人物は、この船の中に、一人しかいない。
真弓の夫、高橋修一である。
「あ――」
「ダメっ」
腰を浮かせようとする魁の手を、エリアスが、ギュっと強く、握り締めた。

「だが、彼は、ぼくの後輩で――」
「ノックの仕方が、さっきと同じだ」
「それは……」
確かに、同じノックの音のような気もするが、修一なら、そんな遠慮がちなノックをしても、少しも不思議ではない性格なのだ。
「秋月先輩？　真弓が部屋にいないんです。響子さんも……。それで、ぼく、心配になって……」
口調も、最も、修一らしい。――いや、少し感情が見えないような気もするが、もともと、自分の思っていることを、胸の中に押さえ込んでしまうような人間なのだ。
「エリアス、彼は気が弱い人間なんだ。部屋の外に放っておいて、化け物に襲われでもしたら――。それに、さっきの足音の主も、まだ近くにいるかも知れない。このまま放っておいたら、彼まで――」
「……子供の言うことは、信用できない？」
「え？」
「同じことを、オーギュストが言ったのなら、きっと、みんな、信用してくれたはずなんだ……」
「……」
何という、きつい顔をするのだろうか、彼は。
多分、彼が他人を信用しないのではなく、周りの人間が、今の魁のように、彼を子供扱いして、真剣に話を聞いてやろう、とはしなかったのではないだろうか。それでいて、彼が口にした不用意な言葉だけは、鬼の首を取ったように、取り上げて……。だから、彼は、そんな大人たちを無視して、突き放して生きるようになってしまったのでは。
そんな気が、した。
彼も、かつては、愛らしいだけの、ただ当たり前の子供であったのだ、と。
そうでなくしてしまったのは、大人たちの方であったのだ、と。
そして、そんな中でも、彼はまだ、子供としての一面を、持って

いる。絶望せずに、強い心で。
「先輩？　秋月先輩？　いらっしゃるんでしょう？　声が聞こえました」
呼び声はまだ、続いている。
そして、魁は、ふと、一つのことを思い出した。
修一は、響子も部屋にいなかった、と言ったのだ。首だけの姿になって、部屋に置き去りにされていた響子も、いなかった、と――。
修一と真弓は夫婦だが、二人は同じ部屋を取っては、いない。真弓は響子と、修一は龍生と、部屋を取っていたはずで、修一が、響子の不在を確かめるには、響子の部屋へ行き、生首だけの響子の姿を見たはずなのだ。部屋に残っていた血痕も。
それでいて、慌てもせず、響子も真弓もいない、と言っている。
もちろん、外からノックをしただけで、中の様子は確かめていない、ということも考えられるだろうが、それなら、まず、同室の龍生に、何か言いに行くのが、当前である。そして、龍生が部屋にいなければ、『龍生もいない』と、魁に言いに来るのが……。
「――おいで」
魁は、エリアスを、腕の中へと抱き寄せた。
傷がかなり、痛んだが、そうしてやらなくてはならない、という気が、していた。
「秋月先輩？　そこにいらっしゃるのは、判っているんです。ドアを開けてください、先輩」
声は高くなることもなく、苛立ちを交えることもなく、まるで、愉しんでいるかのように、同じ口調で続いていた。
それは、それだけに、一層、恐ろしいものであった。
「ミスター・秋月……」
「魁でいい。――ドアは開けない。もし、無理やり入って来るようなら、ぼくが引き留めておくから、君はその隙に――」
「もっといい方法があるよ」
エリアスは言った。

「え？」
「力のない子供と、怪我人は、頭を使わないとね」

ａｃｔ　５８（後書き）

近日中に、完結済小説『魔窟降臨伝』を削除させていただくこととなりました。
詳しくは活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

act 59

「使えそうかい？」
無線機を手に、難しい顔をしているオーギュストに、龍生は、期待を込めて、問いかけた。
だが――。
「無理なようです」
オーギュストは言った。
「だけど、霧はこんなところまで――」
「《ＮＥＭＰ》をご存じですか？」
「え、あ、ああ……。確か、核爆発による《ＥＭＰ（電磁パルス）》のことだったと……」
「ええ。《ＮＥＭＰ》は、極めて強力で、航空機の機体外板の継ぎ目からでも内部に侵入し、搭載電子機器にダメージを与えます。あの霧は、その《ＮＥＭＰ》のように、船の継ぎ目から入り込み、全ての通信機器を妨害しているのかも……」
「だけど、それなら霧は、船内にも入り込んでいたことになる訳だから、俺たちにも影響が出ているはずだろう？」
「人間と機械が同じだ、と思われますか？」
「それは……」
「あの霧が、核爆発による《ＥＭＰ》だとは言いませんが、例えとしては、間違っていないと思います。通信手段は妨害を受け、船の機能は停止し――。もしかすると、船内に流れ込んで来ていた微量の霧を吸い続けている私たちも、いつかは食欲だけの人間になって行くのかも、知れません。機械のように、すぐに機能が停止する訳ではなく、ゆっくり、ゆっくりと……」
そんな恐ろしい言葉を、何故、その男は、平然と口に出来てしまうのだろうか。もし、その言葉の通りなら、この船の中の人間は、何時間後か何日か後には、自分も含めて、悍ましい共喰いを始めて

しまうことになる、というのに――。いや、その男の胸の内など、考えるだけ、無駄だろう。龍生とは、生きて来た世界が違い過ぎるのだから――。第一、核爆発、などという言葉が出て来ること自体、一般人には、ついて行けない。
オーギュストも、そんな龍生の胸の内を察したのか、
「《ＮＥＭＰ》に関しては、エリアス様の受け売りです。あの方が、ロシアの生物兵器のことや、有害物質の化学融合のことをおっしゃっていたので」
「……」
あの子供、ますます恐ろしい限りの人物である。
「なら、通信手段は、一つも使えない訳だ」
開き直って、龍生は言った。
開き直れること自体、龍生の方も、なかなかのものであると思えるのだが。
オーギュストも、軽く瞳を細めている。
「ただの可能性の一つですから、それくらい気楽に考えておいた方がいいかも知れません」
「気楽じゃないぞ」
と、龍生は抗議したが、どう見ても気楽そうである。
「あの霧によって引き出されている《食欲》の源は、人間が堪えに堪えて来た感情や欲望のようですから、その感情や欲望をあまり堪えてなさそうな、あなたのような方なら、まず大丈夫ですよ」
どう聞いても、それが褒め言葉である、とは思えない。
何でも口に出して言ってしまう、遠慮のない人間、と正面切って言われたような気も、する。――が、龍生は黙って、後に続いた。
こういう人種なのだ、と思っておけば、オーギュストの言葉も……その内、腹が立たなくなるだろう。
そして、龍生は、そう思っておける人間であった。
車輛スペースを後にして、二人は、場所も知らない医務室の方へと歩き出した。――いや、龍生は知らないが、何故か、オーギュス

トの方は知っているようである。ためらいもなく、その方向へと、歩いている。
まあ、最初から、客船の構造なら判る、と言っていたのだから、それは、不思議、の内には入らないだろう。
それにしても、知れば知るほど、このオーギュストという男、大した人物である。もちろん、エリアスの方も。
「〃きんぴら〃って、知ってるかい、オーギュスト？」
龍生は訊いた。
「は……？　きんぴら、ですか？」
「ああ」
「さあ……。何のことだか」
「そう。それならいいんだ」
その男にも、知らないことがあるのだ、と知って、龍生は何故か、満足であった。
もちろん、そんなことを知っていたところで、別に偉くはない、と思えるのだが。
やはり、この青年、子供じみている。
その足音は、二人が医務室のある層まで来た時に、廊下の先から、近づいて来た。

ａｃｔ　５９（後書き）

近日中に、完結済小説『魔窟降臨伝』を削除させていただくこととなりました。
詳しくは活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

act 60

誰かが、ずるずると壁に身を擦りつけながら、歩いて来ているのだ。
奇妙な音である。
オーギュストが、その足音の方へと、懐中電灯の明かりを、向けた。
「ヘル・バーレン……？」
それが、オーギュストの口から零れた言葉、であった。
「知っているのか？」
龍生は訊いた。
「ええ。スウェーデンの老舗ガラス・メーカーの会長です」
「商売敵か」
二人は、その紳士の方へと、足を向けた。
「ヘル・バーレン、これは……」
バーレンの口からは、凄まじい血臭が漂い、顔中――顎から首、胸にかけて、夥しい血が滴っていた。
「こいつ、人間を食べたんじゃ――」
そうとしか思えない、光景であった。近づいただけで、口の中が錆びて行くような血の匂いが鼻をつき、吐き気を催すほどの、異様な匂いが漂っているのだ。
「彼は、霧に濡れた人間ではありません。それは、クルーザーにいた時に、確認しています」
「だけど、この血は――」
龍生が言いかけた時であった。
「助け……あの女……殺され……る……」
バーレンが言った。
スウェーデン語であったため、龍生には、何を言っているのか判らなかったが、オーギュストには判ったようで、

「フリュ・マルセですか？」
と、バーレンの言葉に、問い返した。
「ああ……。あの女……わしが海に沈んで行くのを……楽しむように、眺めていた……。だが……気が変わったのか……わしを海から引き上げて……今度……今度は……人間の肉を、わしの口の中に、突っ込んだんだ……」
その言葉が真実であることは、顔や首、胸に滴る血を見ただけで、容易に知り得た。
「それだけじゃない……。あいつは、わしを何度も殴って……蹴って……。わしのペニスを、咬み千切ったんだ……。それを、わしの口の中に突っ込んで……笑って……。君の悪い声で……凄まじい力で、わしの口を押さえながら、笑って……わしがペニスを飲み込むまで……。その後も、何人もの男のペニスを、口の中に突っ込まれて……。あいつが、その男たちを殺したんだ……。それで……その男たちのペニスを、わしの口へ――ぐ……っ！」
また、その時のことを思い出して、気分が悪くなったのか、バーレンが、血の混じった胃液を吐き出した。
肉は、全部吐き出した後なのか、吐瀉物の中には、見当たらなかった。
「助けて……くれ……。このままでは……わしは、あの女に殺される……。あいつが、また別の人間を襲いに行っている内に……また……喰わされる前に、やっと逃げ出してきたんだ……。頼む……助けてくれ……」
血の涙を滲ませての、懇願であった。
だが、同情できるものでも、なかった。
そこまで、あの夫人を追い込んだのは、外ならぬバーレン自身であったはずなのだ。
もちろん、バーレンが自業自得だとしても、他の人間にまで被害が及ぶのを、黙って見ていることは出来ないが。
「……。夫人に、今までのことを謝ってみられてはいかがですか、

ヘル・バーレン」
冷たい眼差しで、オーギュストは言った。
「そんなもの……っ。何度も謝ったんだ……っ！　何度も……何度も……。それでも……あいつは……っ」
人間の肉を口の中に突っ込まれては、バーレンも、謝って懇願するしかなかったのだろう。――いや、その謝罪も、今までのことを悔いてのものではなかったかも、知れない。もし、夫人が、元の通りに戻ったら、バーレンは、きっと今まで以上に――この仕打ちのことも含めて、夫人を蔑ろにしようとするだろう。
「おい、さっきから何の話をしてるんだ？」
スウェーデン語の解らない龍生が、じれったそうに、口を開いた。
オーギュストは、少し間を置き、
「……。自分は大丈夫だから、放っておいてくれ、と」
「え？　でも――」
「私も、医務室へ行った方がいいのでは、と言ったのですが、これは自分の受ける当然の罰だから、放っておいてくれ、と」
「罰？」
「彼は、夫人に対して、いい夫ではなかったのですよ……。私も、噂では色々と聞いていましたが、実際は、それ以上だったのでしょう。――彼の夫人は、以前は、とても美しく、誰もが焦がれるようなレディだったのですが、彼の家に嫁いでから、というもの、見る見る生気を失くして……。ヘル・バーレンは、死を前にして、その罪を償いたいそうです。癌でもう余命がなく、吐血したことで、死期を悟った、ということですから」
「……そうか」
オーギュストの淡々とした言葉に、龍生は、胸を詰まらせるようにして、うなずいた。
生きている人間を見捨てる、ということも、今のこの異常な状況の中では、以外にも、あっさりと受け入れられることであった。
「行きましょう。エリアス様と、ミスター・秋月のことも心配です」

「ああ」
二人は、医務室の方へと、足を向けた。
「助け……オーギュ……。お願いだ……。あの女に……殺される……っ！」
その言葉の意味も、龍生には知りようのないことであった。――いや、もし知っていたとしても、バーレンが夫人にした仕打ちのことを聞けば、オーギュストと同じように、彼を見捨てていたかも、知れない。
もちろん、もし、などという仮定が、何の意味もないものである、ということは、解っていたが……。

ａｃｔ　６０（後書き）

近日中に、完結済小説『魔窟降臨伝』を削除させていただくこととなりました。
詳しくは活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8572v/

喰らう霧

2011年10月12日15時52分発行